

筑波大学博士（日本語教育学）学位請求論文

依頼に対する「断り」の言語行動に関する日中対照研究  
－「配慮」の示し方の観点から－

高 揚

2020 年度

# 目次

<b>第1章 研究背景と目的</b>	<b>1</b>
1.1 「断り」の言語行動	4
1.2 「断り」の先行研究と課題	7
1.2.1 「断り」に関する言語行動の意識・発話文レベルの研究	7
1.2.1.1 断る側の視点からの研究	7
1.2.1.2 断られる側の視点からの研究	10
1.2.2 「断り」に関する現実／自然に近い言語行動・談話レベルの研究	13
1.3 本研究の位置づけと研究目的	16
1.3.1 本研究の位置づけ	16
1.3.2 研究目的と研究課題	18
1.4 本研究の構成と各章の概要	21
<b>第2章 理論的枠組みと研究方法</b>	<b>25</b>
2.1 対照語用論(Contrastive Pragmatics)	25
2.1.1 異文化間語用論(Cross-Cultural Pragmatics)	27
2.1.2 中間言語語用論(Interlanguage Pragmatics)	28
2.2 ポライトネス理論(Politeness Theory)	29
2.2.1 Leech(1983)の「ポライトネス原理」	29
2.2.2 Brown & Levinson(1987)の「ポライトネスの普遍性理論」	31
2.2.2.1 B & L(1987)のポライトネス理論の普遍性	32
2.2.2.2 フェイスとフェイス侵害行為	33
2.2.2.3 ポライトネス・ストラテジー	34
2.2.3 「ポライトネス」と「配慮」、「配慮表現」について	37
2.2.3.1 「ポライトネス」と「配慮」の異同	37

2.2.3.2 「ポライトネス」と「配慮表現」の区別.....	39
2.2.3.3 配慮表現の原理.....	39
2.3 Langacker(2008)の「事態解釈(Construal)」 .....	40
2.4 相互行為的社会言語学(Interactional Sociolinguistics).....	42
2.5 分析方法 .....	43
2.5.1 談話分析 .....	44
2.5.2 言語社会心理学的アプローチ .....	44
2.6 本研究で扱うデータ .....	46
2.7 本章のまとめ .....	47
<b>第3章 断る側のストラテジーと断られる側の意識の日中対照.....</b>	<b>48</b>
3.1 断る側のストラテジーと断られる側の意識について .....	48
3.2 断る側のストラテジー .....	49
3.2.1 研究方法 .....	49
3.2.1.1 データの収集.....	49
3.2.1.2 分析方法.....	51
3.2.2 結果と考察 .....	54
3.2.2.1 「断り」において意味公式全体の使用状況.....	55
3.2.2.2 {詫び} {理由} {結論} の意味公式の使用状況.....	55
3.2.2.3 「断り」の【終結部】の意味公式の使用状況.....	61
3.2.2.4 {将来約束} {条件} {代案提示} の意味公式の使用状況.....	63
3.2.3 断る側のストラテジーのまとめ.....	69
3.3 断られる側の意識.....	70
3.3.1 研究方法 .....	71
3.3.1.1 調査方法.....	71
3.3.1.2 データの収集.....	72
3.3.2 結果と考察 .....	73
3.3.2.1 {代案提示} の使い方に対する母語話者の受け入れの傾向.....	73

3.3.2.2 {条件} の使い方に対する母語話者の受け入れの傾向 .....	79
3.3.3 断られる側の意識のまとめ .....	83
3.4 本章のまとめ .....	84
<b>第4章 再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造の日中対照 .....</b>	<b>86</b>
4.1 談話の展開構造とは .....	86
4.2 分析対象と目的 .....	87
4.2.1 依頼に対する「断り」談話の展開構造と構成要素 .....	88
4.2.2 研究目的と研究課題 .....	91
4.3 データと分析方法 .....	92
4.3.1 調査協力者と会話資料 .....	92
4.3.2 会話資料の文字化の方法 .....	93
4.3.3 分析方法 .....	94
4.4 結果と考察 .....	94
4.4.1 再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造 .....	95
4.4.1.1 日本語母語話者が被依頼側の場合 .....	96
4.4.1.2 中国人日本語学習者が被依頼側の場合 .....	100
4.4.2 代案の使用に関する考察 .....	108
4.4.2.1 被依頼側が {代案提示} をするか否かについて .....	108
4.4.2.2 {代案提示} で第三者に言及するか否かについて .....	110
4.5 本章のまとめ .....	112
<b>第5章 依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの日中対照 .....</b>	<b>114</b>
5.1 談話展開のスタイルとは .....	114
5.2 問題意識と研究動機 .....	116
5.3 談話展開のスタイルに関する先行研究と研究目的 .....	119
5.3.1 「働きかけ型」と「非働きかけ型」について .....	120

5.3.2 「目的達成型」と「対人配慮型」について .....	120
5.3.3 研究目的と研究課題 .....	121
5.4 研究方法 .....	122
5.4.1 データ .....	122
5.4.2 コーディングの方法 .....	124
5.4.2.1 話題上の話し手役割・聞き手役割発話のコーディング方法.....	124
5.4.2.2 話題上の役割交替の判定方法.....	127
5.5 分析結果 .....	127
5.5.1 談話が展開していくプロセスにおける話題上の役割交替 .....	127
5.5.2 談話展開のスタイル .....	129
5.5.2.1 談話展開のスタイルの質的分析.....	129
5.5.2.2 話題展開のスタイルの量的分析.....	138
5.6 考察.....	139
5.6.1 楊(2015)の結果との比較.....	139
5.6.2 談話展開のスタイルと「自他志向」との関連性.....	139
5.7 本章のまとめ .....	141
<b>第6章 円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動の日中対照 .....</b>	<b>143</b>
6.1 配慮言語行動とは.....	143
6.2 理論的枠組みと研究目的 .....	146
6.2.1 「高コンテキスト文化」と「低コンテキスト文化」 .....	146
6.2.2 研究目的と研究課題 .....	148
6.2.3 研究方法 .....	148
6.3 結果と考察 .....	149
6.3.1 日本語母語話者間の日本語の会話.....	149
6.3.2 中国語母語話者間の中国語の会話.....	152
6.4 本章のまとめ .....	156

<b>第7章 本研究のまとめと今後の展望</b>	<b>159</b>
7.1 本研究の結果	159
7.2 本研究の意義	168
7.2.1 言語行動研究と配慮言語行動研究への貢献	168
7.2.2 日本語教育と異文化理解教育への示唆	169
7.3 今後の展望	171
<b>参考文献</b>	<b>173</b>
<b>付録Ⅰ 調査票</b>	<b>186</b>
付録Ⅰ-1 日本語母語話者への調査票	186
付録Ⅰ-2 中国語母語話者への調査票	188
<b>付録Ⅱ 談話完成テスト資料</b>	<b>190</b>
付録Ⅱ-1 日本語母語話者の談話完成テスト資料	190
付録Ⅱ-2 中国語母語話者の談話完成テスト資料	191
<b>付録Ⅲ 意識調査票</b>	<b>192</b>
付録Ⅲ-1 中国語母語話者への意識調査票	192
付録Ⅲ-2 日本語母語話者への意識調査票	194
<b>付録Ⅳ 意識調査における調査協力者の内訳</b>	<b>196</b>
付録Ⅳ-1 日本語母語話者の内訳	196
付録Ⅳ-2 中国語母語話者の内訳	197
<b>付録Ⅴ ロールプレイカード</b>	<b>198</b>
付録Ⅴ-1 日本語版のロールプレイカード	198
付録Ⅴ-2 中国語版のロールプレイカード	199
<b>博士論文に関わる研究発表活動（章関連）</b>	<b>201</b>
<b>謝 辞</b>	<b>203</b>

## 第1章 研究背景と目的

日本と中国の言語接触および文化接触は歴史的に長期にわたっている。1972年の日中国交正常化後、両国の交流は活発化し、日系企業の進出など経済関係は大いに拡大した。それに伴って、中国における日本語教育も順調な発展をたどり、1990年代半ばまでに日本語は英語に次ぐ第二の外国語の地位を確立した。国際交流基金(Japan Foundation)が2012年度に実施した「海外日本語教育機関調査」<sup>1</sup>の結果によると、中国における日本語学習者の数は100万人(1,046,490人)を突破し、世界第一位の日本語学習大国となった。また、2018年度(調査期間：2018年5月～2019年3月)になされた海外日本語教育機関調査結果の速報によると、中国における日本語学習者の数は依然として世界第一位であり、1,004,625人に達している。この結果は、2012年の結果と比べると学習者数は減っているものの、2015年の結果(953,283人)と比べると51,342人と再び増加している。また、日本政府観光局(Japan National Tourism Organization : JNTO)の調査によると、2018年の訪日外国人の数は3,119万人に達し、国別内訳の首位は中国(838万人、26.9%)であった<sup>2</sup>。こうしたことから、日本と中国の関係は今後さらなる発展が期待されており、両国間のコミュニケーションや中国国内における日本語教育は益々盛んになることが考えられる。

しかし、“Intercultural communication is inherently problematic. Different cultural values and communication styles constitute the underlying causes of the difficulties common in this type of communicative interaction.”(FitzGerald 2003 : 1)(「異文化間コミュニケーションはその性質上、問題を伴うのが普通である。文化によって異なった価値観やコミュニケーション・スタイルが意思疎通を阻むからである」(日本語訳は村田他 2010:1 による))。つまり、日中両国間の経済的・文化的な交流が緊密になればなるほど、異文化間コミュニケーションでの摩擦や誤解が生じることは避けられない。言い換えれば、同じ文

---

<sup>1</sup> 国際交流基金は、海外での日本語教育の状況を把握するために、1974年から約3年に1度「海外日本語教育機関調査」を実施している。調査結果は報告書として一般に公開されている。なお、2018年度になされた最新の調査結果(速報値)が、2019年10月8日に国際交流基金 Web サイトにて発表された。詳しくは <https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2019/dl/2019-029-02.pdf> (2019年10月16日閲覧)を参照されたい。

<sup>2</sup> 詳しくは日本政府観光局 Web サイト [https://www.jnto.go.jp/jpn/about\\_us/profile/index.html](https://www.jnto.go.jp/jpn/about_us/profile/index.html) (2020年1月12日閲覧)を参照されたい。

化背景を持つ母語話者同士の場合には互いに相手の意図を比較的に容易に読み取ることができるのに対し、異なる文化背景を持つ会話参与者同士の場合自然に身に付いた自文化の習慣で言語行動を行うため、話し手の意図が聞き手にうまく伝わらないことや、聞き手が話し手の意図を正しく理解できないことがある。また、相手と円滑にコミュニケーションを取るために「配慮」を示すことは、異文化間コミュニケーションでも共通であるが、「言語によって『配慮』していないと感じることが『配慮』であることもある」(生越 2012a : 186)ことや、「配慮したつもりなのに良い印象を与えない」(野田 2012 : 152)ことも起こりかねない。その結果、相手とのコミュニケーションが円滑に進まず、ひいては「人格的誤解につながるような異文化接触の問題が起きている」(沖他 2018 : 83)。

「日本語教育では相手とのコミュニケーションが重要視されるようになり、効果的な教育のために言語行動に関する分析が必要」(生越 2012b : 571)とされている。中国国内の日本語教育の現状と課題について、李・修(2018)は、次のような指摘を行っている(pp.54-55)。

2018 年 1 月、中国教育部(日本の文部科学省に相当)により、『四年制大学各専攻教育の国家スタンダード(《普通高等学校本科专业类教学质量国家标准》)』が公表された。その中で、日本語専攻の「基準」として、従来の日本語専攻教育の規定(通称、「教学大綱」)と比べ、1)教育内容の重視、2)多様性の重視、3)異文化コミュニケーション能力の重視、4)講義の履修項目と内容の見直しという 4 つの特徴が挙げられる。このうちの「異文化コミュニケーション能力の重視」とは、異文化コミュニケーション能力の育成を力に入れることで、異文化コミュニケーションの講義開設すること、普段の講義でも多文化への理解を促すこと、コミュニケーション力の向上が求められていることを指す。

つまり、中国国内の日本語教育は、言語知識よりも言語運用能力を重視し、積極的なコミュニケーション能力、異文化間コミュニケーション能力を培うことに重点を置いている。加えて、日本語学習者の中でも中国人学習者の占める割合は高く、言語行動における日中の異同を明らかにすることは重要な課題と言える。



言語行動(language behavior)とは、「人間が言語によって行う思考、表現、伝達の行動およびその行動に対して相手がそれを解釈して理解する行動全体を指し、このような言語行動についてその実態を発見し、その内部の姿を把握しようとする言語研究の 1 つの分野を言語行動論という」(洪 2007 : 3)。熊谷・篠崎(2006 : 19)によると、「言語行動には、依頼や断り、説得、謝罪など様々な種類がある」。その中でも「依頼」は「行為要求をする話し手が利益を受けること・相手に対して強制力を伴うこと」(国立国語研究所 1994)と定義され、代表的な FTA(face-threatening act)<sup>3</sup>と言える。「依頼」は日常の会話の中で頻繁に使われているが、「依頼」に対する回答は常に快く「受諾」するばかりではない。不愉快が生じやすい言語行動として「断り」が挙げられる。断れない人は、断れなかったこと自体を負担に感じたり、断れなかったことにより自分の時間や労力が奪われたりもする。一方で断る場合、「断り」いかんによって相手に悪い印象を与えてしまい、相手との間に深刻な摩擦を生む危険性もある。良好な人間関係を築き、維持するためには、「断り」の言語行動について理解し、相手に不快な思いをさせない断り方について学ぶ必要がある。特に、異文化間コミュニケーションでは、社会文化的な相違に基づく誤解を防ぐために、様々な知識を蓄えることが必要とされるが、互いの断り方に関する知識、そしてその断り方に反映される「配慮」の示し方に関する異文化理解もそのような知識の 1 つである。

「配慮」については、杉戸・尾崎(2006 : 2)の定義を引用し、「コミュニケーションにおける言語使用を背後で支える各種の意識や心配り」と定義する。本研究では、「配慮」の示し方の観点から、依頼に対する「断り」の言語行動を研究対象として取り上げて日中対照を行う。依頼に対する「断り」の言語行動は言語社会ごとに異なると予測し、主に日本と中国の大学生・大学院生を対象に実験調査を行い、日中の「断り」の言語行動の特徴と相違点を明らかにし、その結果を社会文化の観点から考察する。その上で、日中両言語における「配慮」のメカニズムを明らかにする。日本語母語話者(Japanese native speaker ; 以下、JNS )と中国語母語話者(Chinese native speaker ; 以下、CNS)の断り方(言語の使用実態)は様々な点で異なるが、その背後には異なる配慮のメ

---

<sup>3</sup> Brown & Levinson(1987)は、相手とのやりとりにおいて相手の面子を脅かす可能性のある行為をフェイス侵害行為(face-threatening act : 以下、FTA)と呼んでいる。詳しくは 2.1.2.1 節を参照されたい。

カニズム(言語の運用意識)が存在しており、その配慮のメカニズムを理解すれば相互理解が促進されるだろう。

本章では、本研究の背景を述べ、本研究の目的を明確にする。まず、1.1 節で本研究の研究対象である「断り」の言語行動の性質およびその特徴を述べる。次に、1.2 節で「断り」に関する様々な先行研究を概観し、残された課題を明らかにする。それから、1.3 節で本研究の位置づけと研究目的を述べる。最後に、1.4 節で本研究の構成と各章の概要を述べる。

## 1.1 「断り」の言語行動

「依頼」・「誘い」・「勧め」・「申し出」・「助言」・「許可求め」など「持ちかけ系」の発話行為に対して、相手側からこうした発話行為がなされる場合、例えば「断り」が挙げられるが、このような発話行為はそれらに対する「応答系」の発話行為と言える<sup>4</sup>。

「応答系」の発話行為では、先行行為の性質に応じて適切に答えなければならない。

「持ちかけ系」の発話行為を自ら行う際には、発話する前に何をどのように言うかを考える時間があるのに対して、「断り」のような「応答系」の発話行為の際には、即座に返答しなければならないため、何をどのように言うかをじっくり考える時間はない。そのため、「一般的には発話行為を行うときよりも返答をするときのほうが言語的タスクとして難しい」(清水 2018 : 127)とされる。また、返答の場合、先行行為を「受諾する」か「断る」かによって話し方や言葉の選び方に明らかな違いがある。Levinson(1983)は、(1)「依頼」―「受諾」と(2)「依頼」―「断り」の会話例を取り上げて次のように検討した。

- (1) Child : Could you. hh could you put on the light for my. hh room

<sup>4</sup> 仁田(2009 : 289)によると、配慮が必要とされる対人行動は、次のように分類される。

対人行動の類型	
持ちかけ系	命令・禁止 依頼 勧め 助言・忠告 誘い 許可求め 申し出
応答系	承諾・許可 断り・不許可
調整系	感謝 謝罪

子供：私の部屋の電気、つけてくれない？

→Father：Yep

父：いいよ。

(Levinson 1983：307、日本語訳はポリー、ザトラウスキー 1993：17)

(2) C：Um I wondered if there's any chance of seeing you tomorrow sometime(0.5)

morning or before the seminar

あのう、明日、いつか(0.5)、朝かゼミの前にでも会えないかなかと思っ  
て。

→ (1.0)

→R：Ah um (.) I doubt it.

ウーん (.) どうかな。

C：Uhm huh

ええっ。

→R：The reason is I'm seeing Elizabeth.

エリザベスに会うことになっているんだ。

(Levinson 1983：308、日本語訳はポリー、ザトラウスキー 1993：17)

(1)では子供の依頼に対して父は‘yep’と「受諾」するのに対し、(2)ではCの依頼に対する「断り」の仕方に複数の言動が伴う。Cの依頼の後、1.0秒の沈黙があり、Rは‘Ah um’というポーズの後、‘I doubt it’と言って躊躇う様子を示すことを通して回答の時間を伸ばし、断りを明言せずに、依頼を実行できない理由のみを述べている。以上の例から分かるように、依頼に対する「受諾」はシンプルで即座に発話されるのに対して、「断り」は複雑な要素を含み、遅れて発話される<sup>5</sup>。また、「断り」は、「相手から自分に向けられた期待や好意に添えないことを伝える言語行動」(尾崎 2006：89)であるため、断る際には会話の相手との人間関係(上下・親疎・将来相手との関わりの有無など)

<sup>5</sup> 「会話分析では、隣接ペアのうち、第1ペアが例えば勧誘や招待、依頼のような場合、返答が期待に添った場合と期待に反する場合とでは第2ペアの構造が異なると説く。すなわち、承諾のような肯定的な応答は『選好される応答形式』であり、無標であることから、『もちろん』『いいよ』のように構造的に短く簡潔なターンとなる。一方、否定的な返答は『選好されない応答形式』であり、理由や残念であることを伝えたり言いよどみ(フィラー)を挿入したりしながら、時間をかけた、より構造的に複雑で有標なターンとなる」(三牧 2013：19)。

を踏まえた上で、断りによって相手にかかる負担などの要素も考慮しなければならない。例えば、相手が感じる不快な気持ちを少しでも減らすように、自分は断りを言っているのだということを相手に端的に示すような、「行けない」「できない」「だめだ」など直接的な断りの表現を避けたり、「いや、今日はちょっと…」と言葉を濁したりする。また、「ごめん、今日は家族と約束があるんだ」と詫びや断りの理由説明をして、「その日はダメだけど別の日なら大丈夫だ」と協力の気持ちを示すなど、断りによって生じる不調和を緩和すべく何らかの言語的ストラテジーを講じる。さらに、「依頼—断り」のやりとりは1回だけで終わるとは限らず、断っても再依頼される場合がしばしばある。この際には、発話文レベルの知識だけでは対応できず、談話が展開していくプロセスの中で、相手が伝えた意味に関して絶えず対応したり、相手が言おうとすることを予想しながら対応を適宜に変えたりする能力が必要とされる。同時に、互いに対人関係を維持しながら談話を展開する能力までも要求される。

このように、「断り」という言語行動は、複雑さや難しさを備えた、日常生活の中で回避できない、そして「関係維持と意図の伝達の両方に配慮が求められる言語行動の1つ」(尾崎 2006 : 90)である。しかし、関係維持と意図の伝達という2つの指向性を両立させることは容易ではない。尾崎(2006 : 90)は次のように述べている。

関係維持に気を配りすぎるあまり表現があいまいでありすぎたり情報が不足したりすると、意図が十分伝わらなくなる。逆に、意図を確実に伝えることにばかり注意を向けると、相手との関係を損ねてしまう危険性がある。

さらに、「断り」における意図の伝達と関係維持について、熊谷・篠崎(2006 : 19)は次のように指摘する(下線は筆者による)。

断りにおいては、意思を伝えるという行動の目的がきちんと達成されなくては意味がない。しかしその一方で、社会的な対人行動であるからには、なるべく相手の感情を害しないようにする必要もある。そこで話者は、両者のバランスをとりつつ、双方をなるべく満たすよう、工夫や配慮を行っているのではないかと考えられる。

「断り」の言語行動は、意図の伝達と関係維持のバランスを考慮しなければならない、複雑さや難しさを備えた言語行動の1つであるため、これまで数多くの研究がなされてきた。次の1.2節では、「断り」に関する先行研究を概観し、「断り」についての研究動向を明らかにする。そして、従来の研究に存在している問題点を指摘し、残された課題を述べる。

## 1.2 「断り」の先行研究と課題

本節では、「断り」の先行研究を概観するに当たって、1.2.1節では「断り」に関する言語行動の意識・発話文レベルの研究と1.2.2節では「断り」に関する現実／自然に近い言語行動・談話レベルの研究に分けて概観する。「断り」に関する言語行動の意識・発話文レベルの研究は、視点によって、断る側の視点からの研究(1.2.1.1節で詳述)と断られる側の視点からの研究(1.2.2.2節で詳述)に分けられる。また、「断り」に関する現実／自然に近い言語行動・談話レベルの研究は、対照研究を取り上げる。

本研究では、「発話文(utterance)」を次のように定義する。「1文またはそれ以上の文からなり、ひと区切りのまとまりある考えを示すもの」である。近藤・小森(2012:145)は「談話」を、「相手に伝えたい内容を表す1つの言語単位で、文または発話より大きいまとまりである」と定義している。本研究はこの定義を参照し、「談話(discourse)」を「発話文および発話文からなる話し手と聞き手によるやりとり」と定義する。

### 1.2.1 「断り」に関する言語行動の意識・発話文レベルの研究

#### 1.2.1.1 断る側の視点からの研究

「断り」は、Austin(1962)や Searle(1969)による発話行為理論を出発点として研究が進められてきた。Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz(1990)は、自由記述型談話完成テスト(Discourse Completion Test ; 以下、DCT)に基づき、範疇化した意味公式(Semantic Formula)<sup>6</sup>を用いることで、米国人英語話者・日本人英語話者・日本人日本語話者それ

---

<sup>6</sup> Beebe et al.(1990)は、断り表現を分析する単位として意味公式を立て、意味公式の連鎖体と

ぞれの断り行動を比較・対照し、日本人英語話者に認められる語用論的転移(pragmatic transfer)<sup>7</sup>の諸特徴を明らかにした。「談話完成テストとは、以下のように空白を埋めてやりとりを完成させる形の質問(通常、アンケートへの記入)によって発話データを収集する方法である」(熊谷 2016 : 258)。

友人：来週末、引越しする予定なんだけど、手伝ってくれないかな。

あなた：\_\_\_\_\_

友人：あ、そうか。じゃ、しょうがない。他の人にきいてみるよ。

「DCT を使うと大量のデータを短時間に収集することができ、また、データを書き起こす労力と時間も必要としない。また、自然談話の収集では実現が難しい協力者の属性や社会的文脈などの条件を容易に統制することもでき、言語間や集団間の比較が可能なデータの収集や追実験による再検証もしやすいため、異文化間語用論、中間言語語用論の研究では最もよく使われている」(清水 2016 : 227)。そのため、Beebe et al.(1990)以降、意味公式を分析の単位として用い、DCT をデータ収集の方法として用いた「断り」に関する発話文レベルでの日中対照・比較研究は盛んに行われてきた(藤森 1994、馬場・禹 1994、劉・小野 1996、加納・梅 2003、伊藤 2004、蒙 2010、李 2013 など)。

馬場・禹(1994)は中国語と日本語の「間接的な断り表現」の使われ方を比較した。その結果、親しい間柄の場合、日本人学生では相手に察してもらおうとすることに重点が置かれる傾向があるのに対して、中国人留学生では相手に共感を示しつつ積極的に働きかけて熱意を示すことに重点が置かれる。一方、親しくない場合、日本人学生は言葉遣いに気を配って丁寧表現を多く用いるのに対し、中国人留学生にはそのような言葉遣いが見られず、比較的気軽に断る。劉・小野(1996)は、JNS と CNS の「断り

---

して分析することができると述べる。意味公式とは、「特定の意味的基準やストラテジーを満たす単語、句、文からなる単位で、単位でまたは複数を組み合わせて行為の遂行に用いられるもの」(清水 2009 : 56-57)を指す。なお、意味公式は {} で表記される。例えば、「ごめんなさい。親戚の人と会うから、テニスに行けないの。ごめんね。」の発話例では、{詫び} + {弁明} + {結論} + {詫び} という意味公式 (ストラテジー)の連鎖パターンが使われている(藤森 1995)。

<sup>7</sup> 語用論的転移は言語転移(linguistic transfer)の 1 つであり、「学習者の目標言語で語用論的知識を理解、産出、学習する際に、目標言語以外の言語(第一言語、または既習言語)の語用論的知識が影響を与えること」(近藤・小森 2012 : 124)である。

方略」の特徴、相違点を考察したが、その結果、断り方略に影響を与える要因として、CNS では親疎の変数が、JNS では上下の変数が最も重要であるということが分かった。加納・梅(2003)は、「断り表現」に関する日中両国語でのコミュニケーションの方法のずれについて考察を行った。中国人非日本語学習者は「詫び先行型」<sup>8</sup>より「理由先行型」が用いられやすい傾向があるのに対して、日本人は目上、同輩、親疎に関係なく「詫び先行型」が現れやすい。また、従来、「日本人と中国人の言語行動については、『日本人ははっきり言わない。中国人ははっきり言う』というイメージがある」(井上 2020 : 215)と言われるが、この調査で中国人非日本語学習者は、比較的礼儀を保ち、婉曲さを重視する傾向が見られた。この点について、「人間の思考様式や価値観などは変わるもので、言葉も変わりつつある」と加納・梅(2003 : 37)は指摘している。また、蒙(2010)は、日本人会社員と中国人会社員を対象として日中の「断り」に見られるポライトネス・ストラテジーを比較した。その調査結果のうち、次の3点は、学生を対象にした先行研究の結果と同じであった。①中国人は日本人に比べて{代案}を多用する；②日本人が用いる{理由}は内容が曖昧であるのに対して、中国人の用いる{理由}は具体的で種類が多い；③日本人と中国人は他の意味公式に比べて{理由}と{詫び}を最も多く使用している。李(2013)は、JNS・中国人日本語学習者(Chinese learners of Japanese : 以下、CJL)・CNS を対象に断り表現を分析した。CJL は JNS と同じく{詫び}のストラテジーを多く使用しているが、その回数は JNS より少ないこと、謝罪表現のレパートリーが少ないこと、「ちょっと」の過剰使用、そして言いさし文の習得不足などの課題を指摘した。

上記のように、断る側の視点からの「断り」の言語行動に関する日中対照・比較研究を概観すると、ポライトネス理論、とりわけ Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論(2.2 節で詳述)に基づき、場面を設定し、DCT をデータ収集の方法として用い、親疎や上下が異なる人間関係や文化の違いなどによってどのような言語表現が用いられるか、どのようなストラテジー(strategy)<sup>9</sup>あるいは意味公式の連鎖体が使用されてい

<sup>8</sup> 「詫び先行型」の1つに「詫び+理由」が挙げられる。「この意味公式の組み合わせでは、発話行為の最初に現れる意味公式が『詫び』である」(加納・梅 2003 : 24)。

<sup>9</sup> ここでいう「ストラテジー」とは、『談話』のやりとりの中で『目的(goal)を達成するために話者が用いる手段』(ザトラウスキー1993 : 76)のことである。研究者によって「意味公式(semantic formula)」という用語が使われることもある。

るかが考察されている。結論として、「日本語は対人的な距離が大きく、ネガティブ・ポライトネス(例えば、詫び、敬語など)が優勢であると言える。対照的に、アメリカ(とりわけ西海岸)の英語や、現代の中国語は、対人的な距離が小さく、ポジティブ・ポライトネス(例えば、理由、共感など)が優勢である」(滝浦 2008 : 46)と主張している。

DCT のデータは発話文レベルのデータである。言うことを 1 発話に盛り込んでいるため、相手とのやりとりの中で言語行動を遂行する自然談話の資料とは異なる。しかし、「DCT 調査は擬似的に場面を提示した『言語行動意識調査』の 1 つである。この調査は、実際の相互作用の場で相手の反応に応じて変更や修正を加えられる前の、話し手が考えている当該言語行動を遂行するには基本的にこういう出方をしたい、これらのことを言うのが適切且つ必要だ、こう展開してしかるべきなど、言わば当該言語行動の『遂行イメージ』を示すことができる」(熊谷 2000 : 97)。同様のことを、生田(2012 : 51)は、「発話行為の研究におけるデータ収集方法としてしばしば用いられる DCT は自然発話によるデータではない。しかし、話者が事前に構想するパターン、社会・文化的に共有される原型としての相互行為パターンの研究にはむしろ適している」と指摘している。また Kasper(2000)は、調査協力者が自然の発話はあるべきだと考えているところを知ることのできるため、DCT は協力者の語用言語学的知識と社会語用論的知識を知る上では有効な手段であると述べている。本研究では、JNS と CNS による依頼に対する「断り」の言語行動を対照する際、まず、言語行動の意識・発話文レベルから議論をはじめ、発話文における JNS と CNS の「遂行イメージ」の断り行為の典型的な例を見出し、つまり「依頼を断る場面で何を述べる必要があるとイメージされているか」を明らかにする。それから、その異同を比較することによって、上述した滝浦(2008)の結論を検証する。DCT によるデータ収集とその具体的な分析は、第 3 章の 3.2 節で述べる。

本節では断る側の視点からの研究を概観した。次節では断られる側の視点からの研究を概観する。

### 1.2.1.2 断られる側の視点からの研究

「語用論」(Pragmatics)とは、「コンテキスト(文脈)を考慮に入れて言語使用について



研究する分野・方法論」(澤田 2020 : 1)である。『コンテキスト』は日本語では『文脈』と訳されることが多い。コミュニケーションの場で使用される言葉や表現の意味を決める背景や状況そのものをさす」(三宅 2011 : 20)。語用論は、「言葉の背後に存在するコンテキストを考慮に入れて、話し手・書き手が聞き手・読み手に対して用いた言葉の意味や働きを考察する」(同上 : 2)が、加えて「相互交渉における意味」、つまり発話や文脈のみではなく、話し手と聞き手のそれぞれが意味の生成にどのように寄与しているかを研究する分野である(Thomas 1995 田中他訳 1998 : 26)。その意味で、「断り」の言語行動は、「断る側」と「断られる側」の双方の相互的なコミュニケーション行為によってなされる言語行動の1つであると考えられるべきである。また、橋本他(2006)は、メッセージの送り手がいかに工夫して自分の考え・感情を記号化しても、最終的にそれが理解されるのは受け手の記号解釈の結果としている。つまり、話し手が発話を通して伝える意味は、言葉だけで伝えられるのではなく、聞き手がその言葉をどう解釈するかによっても変わるのである。したがって、「断り」の言語行動の研究では、断りをメッセージの送り手・話し手の「断る側」の視点からどのように断るかという一方向的な研究だけでは足りず、断りの受け手・聞き手、すなわち「断られる側」の視点からも研究する必要があるだろう。ところが、「Brown & Levinson(1987)をはじめ、多くのポライトネス研究では、FTAを遂行しようとする話し手による、相手のフェイスへの侵害度の見積もりによるポライトネス・ストラテジーだけが重視され、FTAの受け手側がその遂行された発話をどのように受け止めたかという点には十分な注意が払われてこなかった」(三牧 2013 : 292)。断られる側の意識が言及されている研究は管見の限り非常に少なく、野木(2010)、マスデン(2011)、藤(2017)、小野・劉(1998)が挙げられる。

野木(2010)は、「誘い」に対する「断り」について、親しい間柄で日本人がどのように表現するかを調査した。断られた側の立場では、「用事があって」や「都合が悪くて」という具体性の欠く返答よりも、「疲れていて映画っていう気分じゃないんだよね」のように正直な気持ちを述べた回答者の返答に好感を持つという、個人的な感想を述べている。これはあくまでも野木個人の感想であり、一般の日本人にどれだけ当てはまるかは定かではない。マスデン(2011)は、日本人大学生が留学生の断り表現に感じる失礼な表現についての意識調査を行った。その結果、「用事があって……」という日本人も使う常套句について、多くの日本人大学生が不快に感じるという結果が得られ

た。藤(2017)は「断り」に関する評価を分析した。国立国語研究所「BTSJ 日本語自然会話コーパス」<sup>10</sup>の5つの「友人の依頼への断り」の音声データを JNS3 名と CJL3 名に聞かせ、プロトコル分析<sup>11</sup>とインタビューを通して、断りに対する評価の様相とその背後にある断り観を調査した。その結果、まず、評価者の「友人への断り」における基本的態度は、「合理性・効率性重視」か「心情・気遣い重視」かによって評価が分かれた。なお、評価のばらつきと評価者の母語との関連性は見出せなかった。藤(2017)の研究は、音声、特に「りきみ口調<sup>12</sup>や沈黙などのパラ言語的要素」への評価基準を分析の視野に入れたことは評価に値するが、収集したデータが JNS と CJL 各3名という非常に少数のデータであるため、評価者の母語の違いが「断り」への評価に影響するという根拠は示しきれていない。小野・劉(1998)は日本人と中国人の典型的な断り表現(日：間接的、人間関係重視、受け手指向；中：直接的、送り手中心、課題指向)を取り上げ、このような特徴の断り方をどう受け止めるかを調査した。その結果、日中母語話者の過半数が、相手の典型的な断り方に違和感を示している。しかし、意識調査紙に用いられた中国語から日本語への翻訳(CJL2 人が翻訳したもの)が、どの程度原文の意図を正しく反映しているかという点で疑問が残る。

上記のように、断られる側の視点から「断り」の言語行動を研究する必要性は先行研究で認められているものの、まだその研究の数は多くない。また、調査対象者の選び方や、意識調査紙における調査項目の日本語訳・中国語訳の仕方には疑問が残されている。加えて、断られる側の意識には日中間で差異があるが、その差異が生じる原因についてさらに研究を深める余地がある。この点について、第3章の3.3節で取り

<sup>10</sup> 国立国語研究所では、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」と、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー：宇佐美まゆみ)の研究成果として、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2018年版』を公開している。詳しくは [https://ninjal-usamilab.info/lab/btsj\\_corpus/](https://ninjal-usamilab.info/lab/btsj_corpus/) (2020年3月9日閲覧)を参照されたい。

<sup>11</sup> 理解や問題解決の過程など本来内的な認知的処理を、それらの処理に伴って起きる言語化など、観察可能な行動から分析する研究方法。「考えていることをできるだけ声に出して説明してください」などの教示によって言語化を誘導し、そこに現れた言葉づかい、表現などを分析する。発話思考法とも言われる(中島他 1999)。

<sup>12</sup> りきみ口調とは、重い荷物を運ぼうとしてなかなか持ち上がらなかったときに、つめていた息が漏れ出して出る「んんん、んん、んん」のような声、または足の小指を思いきりたんのすの角にぶつけてしまったとき、涙をにじませ、小刻みに体を震わせながら漏れる、「ん、んんん、んん」のような声を指す。話し手がりきむ局面は、苦しみ、関心、「いわゆる強調」の3つが挙げられ、「苦しみ」の局面は心理的な苦痛による場合もあり、「相手の前で恐縮してみせる」ときにもりきみ口調はよく用いられる(定延 2005)。

扱う。

## 1.2.2 「断り」に関する現実／自然に近い言語行動・談話レベルの研究

1.2.1 節で概観したように、「断り」に関する 1990 年代以来の研究では、DCT 調査を用いてデータが収集され、依頼に対する 1 度目の断り発話に注目したものが主流である。その研究のほとんどは、意味公式による個々の断りのストラテジーの分析に焦点を当てている。しかし、実際の「断り」はそれほど単純ではなく、例えば、丁寧で且つ婉曲的な断り表現を用いて断る場合、その断り方がかえって相手からの再依頼を誘発するという問題が生じる。そして、その再依頼に対して、受諾するか断るか、またどのように断るかによって、その後の談話構造や談話展開は異なる。しかし、DCT 調査の場合、あくまでも 1 発話というミクロなレベルでの研究である。DCT によるデータは自然談話やロールプレイのデータよりも短く、構造的にも単純で直接的である (Golato 2003 : 92) ため、「口頭インタラクションのデータと異なる」(清水 2009 : 44)。DCT の結果は実際の会話とは異なる可能性が高く、また、談話レベルでの適用にも制約があるため、「断り」を談話レベルで分析するのに有効ではないという限界が多く指摘されている(木下 2006、ウォンサミン 2016、熊谷 2018 など)。言語使用を談話レベルで分析しようとする際には、ロールプレイのほうがコミュニケーションの相互作用的側面の分析に適していると Sasaki(1998)は指摘している。「録音やビデオ撮影による自然談話の記録のデータは、本物(authentic)の言語行為の正確でありのまま記録を分析できる。しかし、対象となる事象のサンプルを集めるために膨大な自然談話データが必要であること、状況変数を統制できないために比較可能なデータが得にくいことなどの短所がある」(清水 2016 : 225) ため、自然談話の観察の代わりとなるものに、ロールプレイによって収集されたデータがある。

ロールプレイ(role-play)とは、特定の状況・シナリオの中で与えられた役割を演じるタスクである。ロールプレイについて、Kasper(2000)は「ロールプレイの対話は研究者側の目的によってあらかじめ構造化されたものであり、行為者自身の動機や目的によって構造化される自然談話とは異なる」と指摘する。調査協力者は研究者側に設定さ

れた場面や役割を想像した上で言語行動を行うため、「ロールプレイによって得られたデータは自然談話と全く同じものではない」(清水 2016 : 225)ものの、「たとえ実験的に設定された場面で収録された会話であっても、何をどのように話すかは研究者によって制御されず参加者に任されるという意味で『生』である」(三牧 2013 : 13)ことや、「ロールプレイとは言ってもシナリオを準備したわけではないため、会話参加者は即興で自然に話す」(中井 2017 : 112)という指摘もある。加えて、「話者交替、言い淀みなどの口頭発話特有の特徴、準言語的特徴などの点で自然談話と類似したデータを採取できるだけでなく、比較的短時間にデータを収集できる、文脈の変数を統制できる、追実験が可能であるなど、誘出データに共通する実験上の利点も多い」(清水 2016 : 225)と考えられることから、本研究は DCT 調査では測定できない側面を補うため、現実／自然に近い言語行動・談話レベルでの研究に当たってはロールプレイによって「断り」の言語行動のデータを収集する。

DCT の欠点が認識されるにつれて、発話文レベルを超えて談話レベルでの「断り」に関する日本語と外国語を比較分析した研究が進められてきた。三宅(2019 : 164-165)は、「談話を視野に入れた研究が 2010 年前後から現れ始めるが、談話構造の研究や語用論の視点からの本格的な研究はこれからである」と述べている。談話研究の中で、ロールプレイによってデータを収集し、勧誘や依頼に対する「断り」を対象とした研究も行われている。勧誘に対する「断り」の対照研究では、日本語では断りは言葉少なく手短かに表出され、勧誘側はあまり再勧誘しない傾向が指摘されているのに対し、スワヒリ語<sup>13</sup>やマナド語<sup>14</sup>のように再勧誘が行われる言語もあり、そうした言語では再勧誘の際に複数回の断りを表出し、断る発話が長くなることが明らかにされている(中垣 2014、吉田 2015、2016)。依頼に対する「断り」の対照研究では、施(2005、2007)は電話会話の録音データをもとに日台の言語行動を比較している。日本語は依頼側による「依頼可能性の確認」や「前置き」から始まり、依頼側と被依頼側が表現的に詫び合うやりとりで終わる場合が多い。一方、台湾華語は依頼の要件が被依頼側によって引き出され、最後に依頼側が感謝し、被依頼側が謝罪する例が多い。しかし、「話し

---

<sup>13</sup> 東アフリカで広く話されている言語。ケニア共和国の公用語。

<sup>14</sup> マナド語は、インドネシア語同様、マレー語を祖語とする言語である。標準インドネシア語と文法的には似ているが、音韻、語彙、形態などの面で大きく異なる点もある(吉田 2015)。

手と聞き手が直接会って対面的相互作用(face to face interaction)の中で築いていく談話と、相手が見えないところで音声にのみ頼った相互作用を築かれる談話とでは、例えばあいづちの使用を頻繁に言語化にして要求するなどの言語使用の面における違いが現れうる」(金 2012 : 506)との指摘があるように、電話会話のデータは対面的相互作用の中で構築していく談話と異なるところがある。また、ハヤティ(2017)は、ロールプレイのデータを用いて日本語とスンダ語<sup>15</sup>の断りの展開パターンを明らかにした。それによると、日本語は「断り成立後の段階」の「詫び」の使用が顕著であったのに対して、スンダ語は「断り成立までの段階」に「否定的な見解の表明」を特徴的に使用している。両母語話者では、「断られる」反応として、自分の依頼を相手に受諾するように「断り成立までの段階」で「負担感の軽減」と「情報要求・確認要求」のパターンが見られる点が共通するが、「強要」のパターンがスンダ語のほうが多い結果となった。

上記のように、談話レベルの「断り」についてのこれまでの研究では、電話会話やロールプレイのデータの分析により、日本語、台湾華語やスンダ語の断る側と依頼側が使う個々のストラテジーに相違があることが明らかになっている。しかし、断りの談話が展開していくプロセスにおける依頼側と断る側に使用される個々のストラテジーだけではなく、依頼側と断る側の相互行為(2.4 節で詳述)により形成される「断り」談話の展開構造、談話展開のスタイル、およびその談話全体に見られる配慮言語行動は、文化による違いが見られることもあり得るが、それらに関する研究は管見の限りない。「文化と行動の違いは微細なものであるにも関わらず、それらの違いは多くの人々の感情を刺激し、相手について好印象や悪印象を形成することもある。悪印象は集団的偏見として一般化され、固定化される傾向さえある。些細な違和感であるとしても、それを緩和し、解消し、相互理解を目指す手立てが必要なのである」(本名・羅 2018 : iii)。「断り」の言語行動における断る側と依頼側に使われる個々のストラテジーに加えて、「断り」のコミュニケーションの有り様、つまり依頼側と断る側の相互行為により形成される「断り」談話の展開構造、談話展開のスタイル、およびその談話全体に見られる配慮言語行動が分かれば、日中の異文化間コミュニケーション上の誤解や不愉快さを減らすための一助になると考えられ、「断り」の言語研究における

<sup>15</sup> スンダ語はインドネシアの西ジャワの1つの民族語(地方語)である(ハヤティ 2017)。

談話研究の必要性は高い。本研究では、「断り」のコミュニケーションの有り様、および談話レベルにおける日中間「断り」の言語行動の異同を明らかにするために、「断り」談話の展開構造を第4章、談話展開のスタイルを第5章、談話展開に見られる配慮言語行動を第6章で分析する。

本節では、「断り」に関する言語行動の意識・発話文レベルの研究と「断り」に関する現実／自然に近い言語行動・談話レベルの研究を概観した。次の1.3節では、本研究の位置づけと研究目的を述べる。

## 1.3 本研究の位置づけと研究目的

### 1.3.1 本研究の位置づけ

以上に概観したように、「断り」の言語行動についてこれまでの研究は、DCT 調査による言語行動の意識・発話文レベルにおける断る側の戦略に焦点を当てたものがほとんどであり、断られる側の意識についてはあまり言及されていない。また、依頼に対する1回目の断りの研究がすべてで、再依頼に対する断りおよびその後の談話展開についての研究は無に等しい。しかし、「断り」の言語行動は断る側の1発話だけでは成り立たず、依頼側とのやりとりの中で形成されるため、依頼側(断られる側)の意識、また、談話の流れの中の現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける依頼側とのやりとりの様相も明らかにする必要がある。そのため、本研究では、依頼に対する「断り」の言語行動を、断る側の1発話という発話文レベルだけではなく、断られる側、つまり、依頼側の意識<sup>16</sup>や言語行動を含み、言語社会心理学的アプローチ(2.5節で詳述)で、より長いスパンによる断る側と依頼側とのやりとりを含めた談話レベルでの分析を行う。断る側の戦略と断られる側の意識、談話の展開構造、談話展開のスタイル、談話全体に見られる配慮言語行動という項目について分析を進める。

沖他(2018)は、日韓中の依頼談話を対象に実例と内省観察によって発想と表現の巨視的異同を対照的に記述し、社会文化が意識態度、談話内容、言語表現に影響してい

---

<sup>16</sup> 本研究では、意識調査の方法を用いて、断られる側としての調査対象者が断り方についてどのような意識や意見を持っているかに関するアンケート調査を行った。意識調査の詳細は3.3.2節を参照されたい。

ることを明らかにした。「社会文化」とは、「社会における人々の行動や意識、文化などを総称するもの」である。上村(2000 : 28)は、「社会文化研究では、まず、個人と社会・文化の変数を独立なものに見なす二項対立的な考え方を排除する」と指摘する。本研究はこの社会文化研究の立場を踏まえ、依頼に対する「断り」の言語行動を人・社会・文化との関わりにおいて取り上げて研究する。

Byram (2008 : 64) は「文化」を、“shared beliefs, values and behaviors’ of a social group” (「社会的グループの共通の信念、価値観、行動」(日本語訳は筆者による))として定義している。Hofstede et al. (2000 : 5) は「文化」を、“a catchword for all those patterns of thinking, feeling, and acting” (「考え方、感じ方、行動の仕方のパターンを総称するもの」(日本語訳は岩井・岩井 2013 : 4 による))として捉え、“Culture is learned, not innate. It derives from one’s social environment rather than from one’s genes. [...] Culture consists of the unwritten rules of the social game. It is *the collective programming of the mind that distinguishes the members of one group or category of people from others.* (Hofstede et al. 2010 : 6)” (「文化は生まれつき身につけているものではなく、学習されるものである。文化は社会環境に起源を発するものであって、遺伝子に文化の起源はない。(中略)文化は社会ゲームについての不文律から成り立っている。文化は集合的に人間の心に組み込まれたプログラムであり、そのプログラムは集団によってあるいは人々のカテゴリーによって異なっている」(日本語訳は岩井・岩井 2013 : 4 による))と指摘している。これらの定義からは、言語行動と人・社会・文化との関わりが明らかであろう。言語行動は「文化」を構成する一部分であり、また、文化は「社会」環境に起源を発し、「人」によって異なる。ここから、依頼に対する「断り」の言語行動を、人・社会・文化との関わりにおいて取り上げて研究を行う必要性を導くことができる。「目に見える言語面の差異だけではなく、水面下に存在する目に見えない社会文化的側面においてもギャップが存在する」(金原・春原 2007 : 111)との指摘があるように、異文化間コミュニケーションを円滑に行うためには、コミュニケーション様式などに埋め込まれている目に見えない社会文化を理解することが重要である。社会文化と言語の関係について、沖他(2018 : 84)は「これまで、社会文化が各国で異なっていることは、文化史の問題とされ、言語とは関係なく記述が行われてきた」と述べており、言語研究において言語現象を社会文化と関連付けて記述することの必要性を指摘している。

そこで本研究は、日中両言語における「配慮」のメカニズムを説明するために、依頼に対する「断り」の言語行動に関する日中対照を行う。そして、日中対照を行って得られた結果をいくつかの社会文化の観点から考察を行い、既定の社会文化がいかに関中の「断り」の言語行動に反映されているかを考える。具体的に、まず、断る側の戦略と断られる側の意識の差異について、ポライトネス理論(2.2 節で詳述)から考察を行う。次に、談話の展開構造の差異について、「上下関係」と「互惠関係」の概念(4.4.2 節で詳述)を援用して考察を行う。また、談話展開のスタイルの差異について、河(2012)の「自他志向」の観点(5.6.2 節で詳述)から考察を行う。最後に、相手と円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動の差異について、Hall(1976)の「文化コンテキスト」の理論(6.2.1 節で詳述)を援用して考察を行う。ポライトネス理論、「上下関係」と「互惠関係」、「自他志向」、「文化コンテキスト」はいずれも社会文化と関わりのある理論や概念であり、各章の対照項目に現れる日中の「断り」の言語行動の相違点を説明することができると考える。これらの理論や概念が、いかに日中の「断り」の言語行動(各章の対照項目)に反映されているかを分析・考察する。なお、援用した各理論や概念およびそれらを援用する理由については、各章で具体的に説明を行う。

本研究は、依頼に対する「断り」の言語行動とそこに反映される社会文化を理解し日中異文化間コミュニケーションにおける誤解や摩擦を減らすための記述研究の1つに位置づけられる。記述研究は言語行動の研究分野の1つである。「言語行動とは、どのような行動で、どのような要素から成り立ち、どういう機能を発揮するか、といったことがまず記述されなければならない」(洪 2007 : 4)。本研究は言語意識が表されるアンケートデータと、現実／自然に近い言語行動が観察されるロールプレイの談話データを社会文化と関連付けて、依頼に対する「断り」の言語行動に関する日中対照研究を行い、論文全体を通して記述を進める。

### 1.3.2 研究目的と研究課題

本研究は、言語行動の意識・発話文レベルと現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の言語行動の特徴と相違点を明



らかにすることを目的とする。依頼に対する「断り」の言語行動における JNS と CNS の「配慮」の示し方、およびその背後にある「配慮」のメカニズムを解明するために、ポライトネスや事態解釈、文化コンテキストなど様々な観点から、ストラテジー、談話の展開構造、談話展開のスタイル、配慮言語行動という 4 つの項目について対照研究<sup>17</sup>を行う。また、本研究は日本語教育への応用を念頭に置き、研究結果を今後の日本語の教材作成に生かす。日本人が日常的・慣習的にしている断り方、およびその背後に潜む意識や社会文化的背景を学習者に理解させ、より自然な「断り」の言語行動のやりとりを身に付け、JNS との接触場面でのコミュニケーション上の誤解や不愉快さなどを減らすことを目指す。

言語行動の実態を解明するためには、意識面と行動面の双方に焦点を当てる必要があるという前提を踏まえ、本研究が取り組む研究課題を以下の 4 点に設定する。言語行動の意識・発話文レベルでの断る側のストラテジーと断られる側の「断り」に関する日中言語意識の在り方について知見を得るために、課題 1 を設ける。現実／自然に近い言語行動・談話レベルでの依頼に対する「断り」の言語行動の実態を明らかにするために、課題 2、課題 3、課題 4 を設ける。課題 2、課題 3、課題 4 は行動面からの「断り」の言語行動についての分析・考察である。課題 2 は発話機能に基づいて分割された構成要素の組み合わせという「談話構造」の分析・考察に重点を置く。課題 3 は話題上の話し手役割発話・聞き手役割発話に基づいて、話題上の話し手役割発話・聞き手役割発話の分布の様相によって分類された「談話展開のスタイル」の分析・考察に重点を置く。課題 4 は相手と円滑にコミュニケーションを取るために断る側と依頼側が行っている「配慮言語行動」の分析・考察に重点を置く。

**課題 1：**言語行動の意識・発話文レベルにおける日中両言語の断り発話を比較し、認知や社会文化的差異とそれが反映するポライトネスの差異を明らかにする。また、

---

<sup>17</sup> 岩田他(2018)は、「対照研究は、複数の言語体系を比較し、その異同から対象とする諸言語の特徴を明らかにする研究である。様々な言語現象から見られる差異を考察することは、言語の普遍性と多様性という理論的な問題に取り組むことに他ならず、言語研究への貢献が大いに期待できる」(同上：1)と述べる。また「単一の言語現象では気づかないことも、異なる言語との比較対照し、その相違点や類似点を分析し、それらを考察、議論することにより、その背景となる言語文化、社会および人々を知り、理解するきっかけになる」(同上：3)と述べている。

断られる側の視点から、JNS と CNS にとって、ポジティブ・ポライトネスの断り方とネガティブ・ポライトネスの断り方ではどちらが受け入れやすいかという、「断り」に関する日中の意識の異なりを明らかにする。(第3章)

**課題 2：**現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、JNS の断る側と CJL の断る側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を明らかにする。また、展開構造に違いがある場合、その要因を人間関係の構築の観点から明らかにする。(第4章)

**課題 3：**現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、話題上の話し手・聞き手の役割交替の様相の分析を通して、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの特徴を探る。また、談話展開のスタイルの違いに JNS と CNS のどのような心理的欲求が反映されているかを明らかにする。(第5章)

**課題 4：**現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、依頼に対する「断り」の談話が展開していくプロセスの中で、相手と円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動がそれぞれどのような言語表現、あるいはストラテジーによって表現されるかを明らかにする。また、こうした配慮言語行動がどのような文化コンテクストを反映するかを明らかにする。(第6章)

「配慮」の示し方の観点から、各課題の結果について考察してまとめを行った上で、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の言語行動における配慮のメカニズムを解明し、日本語教育と異文化理解教育への示唆を提案する。上述した研究目的、課題の解明を実現するために、本研究では「対照語用論」の立場(2.1 節で詳述)から、依頼に対する「断り」の言語行動に関する日中対照研究を行う。

## 1.4 本研究の構成と各章の概要

本研究は7つの章から構成されている。各章の概要は以下の通りである。

### 第1章 研究背景と目的

本章では、まず研究背景を述べた上で、「断り」の言語行動に関する日中対照研究をする必要性を明らかにし、本研究の研究対象である「断り」の言語行動およびその特徴を述べた。次に、「断り」に関する様々な先行研究を概観した上で、本研究の位置づけや研究目的、研究課題を明確にした。

### 第2章 理論的枠組みと研究方法

第2章では、まず、「対照語用論」およびその下位分野である「異文化間語用論」と「中間言語語用論」を紹介した。次に、本研究の分析や考察に用いる理論的枠組みである「ポライトネス理論」と「相互行為的社会言語学」、また Langacker(2008)の「事態解釈」という概念を紹介した上で、本研究の研究方法である言語社会心理学的アプローチを示した。最後に、本研究で扱うデータについて説明した。

次いで、第2章で紹介した理論を活用して本研究の方法論によって得たデータをもとに実証的に論じたのが、第3章から第6章である。次頁の図 1-1 に示すように、本研究における依頼に対する「断り」の言語行動の研究内容は、言語行動の意識・発話文レベルから見た日中「断り」の言語行動(3章)、と現実／自然に近い言語行動・談話レベルから見た日中「断り」の言語行動(4章、5章、6章)という2つに大別することができる。まず、言語行動の意識・発話文レベルでの断られる側の「断り」に関する日中言語意識の在り方について知見を得るために、アンケート調査のデータを用いて断る側の発話を分析する(3章)。次に、現実／自然に近い言語行動・談話レベルでの依頼に対する「断り」の言語行動の実態を明らかにするために、談話の展開構造(4章)、談話展開のスタイル(5章)、および談話展開に見られる配慮言語行動(6章)という3つの項目について、ロールプレイ調査の結果を分析する。

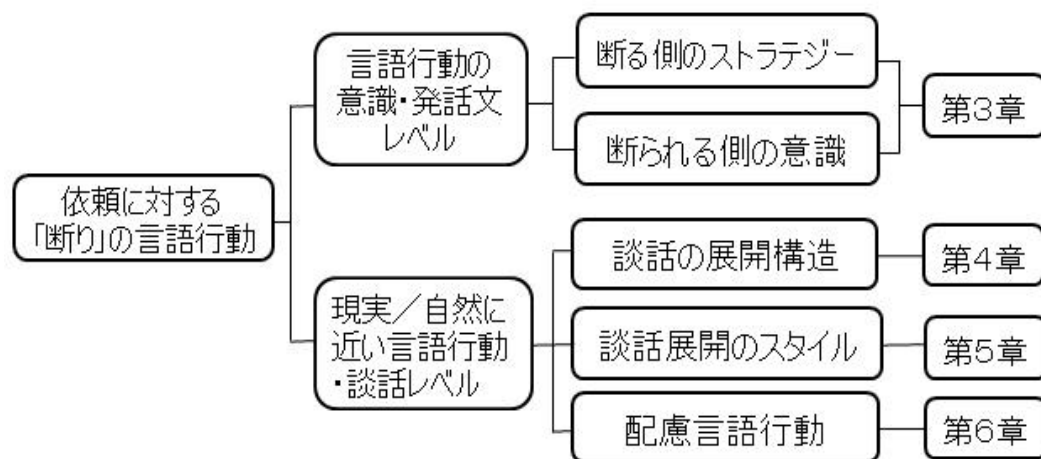


図 1-1 本研究における依頼に対する「断り」の言語行動の研究内容

### 第3章 断る側のストラテジーと断られる側の意識の日中対照

第3章では、Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論と Langacker(2008)の「事態解釈(Construal)」の観点から、「断り」の言語行動についての言語行動の意識・発話文レベルの分析結果を示す。DCT 調査の結果を分析し、断る側の用いるストラテジーおよびそれが反映される文化的、認知的な差異を明らかにする。そして、意識調査の結果を分析し、断られる側の視点から、JNS と CNS それぞれにとって受け入れやすい断り方を検証する。そして、日中の断る側のストラテジーと断られる側の意識に見られる「配慮」の示し方の違いを明らかにする。(課題1)

### 第4章 再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造の日中対照

第4章から第6章では「断り」の言語行動についての現実／自然に近い言語行動・談話レベルの分析結果を示す。第4章では、人間関係の構築の観点から、「断り」談話の展開構造に着目して分析・考察を行う。ロールプレイ調査の結果を分析し、JNS の依頼側による再依頼を、最初は断るが最後に受諾した場合、JNS の断る側と CJL の断る側に見られる、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造の日中比較を行い、その違いを引き起こす原因を「上下関係」と「互惠関係」の視点から考察する。そして、日中の再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造に見られる「配慮」の示し方の違いを明らかにする。(課題2)

## 第5章 依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの日中対照

第5章では、河(2012)の「自他志向」の概念から、「断り」の談話展開のスタイルに着目して分析・考察を行う。ロールプレイ調査の結果を分析し、話題上の話し手・聞き手の役割交替の様相を分析することを通して、JNSとCNSの依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの特徴を明らかにする。そして、その談話展開のスタイルの相違が、JNSとCNSの心理的欲求とどのように関わっているか、という問題を明らかにする。そして、日中の依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルに見られる「配慮」の示し方の違いを明らかにする。(課題3)

## 第6章 円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動の日中対照

第6章では、Hall (1976)の「文化コンテキスト」理論を用いて、相手と円滑にコミュニケーションを取るために依頼に対する「断り」の談話展開にどのような配慮言語行動が見られるかをロールプレイのデータで分析し、日本語と中国語の配慮言語行動の特徴を明らかにする。そして、なぜそのような配慮言語行動の特徴が見られるのかについて、文化コンテキストと関連付けて考察を行う。そして、日中の配慮言語行動に見られる「配慮」の示し方の違いを明らかにする。(課題4)

## 第7章 本研究のまとめと今後の展望

終章である第7章では、本研究の研究結果をまとめる。各章の対照項目についての研究結果および各対照項目に見られる「配慮」の示し方をまとめた上で、日中「配慮」のメカニズム—「『配慮』の二面性」—を提示する。また、その研究結果を日本語教育現場や異文化理解教育にどのように応用できるかを示すとともに、今後の課題について述べる。

各章の議論の展開には個別性が見られるが、各章を分析する過程で全体を融合することによって、ポライトネスや談話の展開構造、談話展開のスタイル、配慮言語行動の4つの側面で、日本語と中国語では相違点が存在しているが、実際は断る側と依頼側の双方が相手と円滑にコミュニケーションを取るために配慮していることが共通点

であることを指摘する。

## 第2章 理論的枠組みと研究方法

本章では、分析・考察に用いる理論的枠組みと研究方法を述べる。まず、2.1 から 2.4 節で分析・考察を行うための種々の理論を概観する。次に、2.5 節で分析方法を示し、本研究で扱うデータを述べる。

### 2.1 対照語用論(Contrastive Pragmatics)

対照語用論は対照言語学(Contrastive Linguistics)の1つとして位置づけられる。対照言語学とは、2つあるいは2つ以上の言語について言語体系を比較対照し、その異同から対象の諸言語の特徴やコミュニケーション体系を明らかにしようとするものである。対照言語学について、沖他(2018 : 82)は次のように指摘している(下線は筆者による、以下同)。

対照言語学における発想と表現の研究においては、「内容と表現のずれは、どのようにあらわれるか」という問とともに、「内容と表現のずれに、文化はどのように関与するか」という問を立てたことが、重要であると考えられる。こうした問の立て方をするすることで、両言語に見られる内容と表現の双方のずれを、「言語的差異」の点から説明するだけではなく、「文化的な考え方の差異」の反映としても説明されるべきだとする視点が、明確に立てられたといえる。

対照言語学のうち、対照語用論は、音声・音韻や語彙、文法などの研究に比べるとまだ発展途上の研究分野である。堀江(2016 : 133)によると、「対照語用論という分野が独立した学問分野として提唱されるようになったのはそれほど古いことではなく、1980年代半ばの Littlewood(1983)、Fillmore(1984)、Oleksy(1989)といった研究をその嚆矢とする」。対照語用論という学問の定義について、Pütz & Neff-Aertselaer(2008)はその序文で以下のように記している。

“Contrastive Pragmatics investigates the pragmatic principles people abide by in one

language or language community in contrast to how these principles may govern linguistic interaction in other language.” (Pütz & Neff- Aertselaer 2008: x)

「対照語用論は、ある言語において人々が準拠する語用論的原理を、これらの原理が他の言語において言語的相互行為をどのように制約しているかと対比しつつ研究する。」(日本語訳は堀江 2016 : 134 による)

また、Aijmer(2011)は、対照語用論の定義や対象とする現象の範囲について以下のように指摘している。

“Contrastive Pragmatics is concerned with pragmatics or language use in different languages. [...] They represent a variety of different perspectives and theoretical approaches such as politeness theory, Conversation Analysis, Appraisal Theory, grammaticalization. Much research has focused on speech acts. In the early days of pragmatics the felicity conditions for speech acts and the means by which they were realized were for instance regarded as universal. However, recent empirical work on speech acts in different languages has shown that there can be large differences in their realization and the rules for how they are used.” (Aijmer 2011: 1)

「対照語用論は、異なった言語における語用論あるいは言語使用に関わるものである。(略)そして、対照語用論の研究対象に関してはポライトネス理論、会話分析、文法化など異なる研究の観点や理論的アプローチが含まれつつも、特に多くの研究が行われてきたテーマが発話行為の実現様態、および発話行為の運用に課せられる規則の言語間、文化間相違に関するものである。」(日本語訳は堀江 2016 : 134 による)

さらに、堀江(2016)は対照語用論を言語間の語用論的基盤の類似点・相違点の両方を解明する志向性を有した研究分野として捉え、「実際には2言語の比較研究が中心であるが」(同上 : 135)、「ある言語の語用論的特徴を他言語との比較を通じて解明する学問分野」(同上 : 133)と定義している。

上述の定義を踏まえ、本研究は対照語用論を「ある言語を他言語との比較を通じて、



言語使用に反映される語用論的特徴、および規則の言語間、文化間の類似点・相違点の両者を明らかにする研究」と定義する。言語行動の意識・発話文レベルと現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける、日本語と中国語の「断り」の言語行動の特徴と相違点を明らかにし、JNS と CNS の「配慮」の示し方および、その背後にある相手への配慮意識をはじめとする対人意識のあり方について知見を得るために、本研究では「対照語用論」の立場から、依頼に対する「断り」の言語行動に関する日中対照研究を行う。

### 2.1.1 異文化間語用論(Cross-Cultural Pragmatics)

本研究のアプローチである異文化間語用論と中間言語語用論については「対照語用論の重要な下位分野として、語用論と異文化コミュニケーション<sup>18</sup>研究の洞察を融合した研究分野」(堀江 2016 : 135)とされる。

異文化間語用論(Cross-Cultural Pragmatics)は「母語話者を対象とした研究であり、文化の違いが言語コミュニケーションにどのように反映するかを語用論の枠組みを用いて研究する分野」(清水 2016 : 217) である。異文化間語用論の対照研究は、1980 年代半ばに行われた大規模共同研究である異文化間発話行為実現プロジェクト(The Cross-Cultural Speech Act Realization Project : CCSARP)を端緒として、それ以降、「依頼」、「断り」、「不満」、「謝罪」、「ほめ」およびほめに対する返答などの発話行為を対象として、意味公式の分析単位で、ストラテジーやそこに現れるポライトネスの分析により、異文化間の発話行為の実現の仕方を探求してきた。具体的には、「ストラテジーと表現形式の使用範囲と文脈的な分布、同じ社会的文脈で使われる表現形式の直接度、発話の複雑さ、発話行為に与える文脈変数の影響、状況認識の仕方などが研究されてきた」(清水 2016 : 219)。

異文化間語用論の目的は主に 2 つある。1 つは、ある特定の言語共同体における言語の機能や構造と社会的文脈(会話参加者の関係や発話状況など)との体系的な関係(社

---

<sup>18</sup> 異文化コミュニケーションの定義はその研究の視点から様々に可能である。本研究は、談話レベルでの対照語用論の立場から、異文化コミュニケーションを「文化背景を異にする人間同士が言語および非言語を用いて、意図するメッセージを伝達しあう発信と受信の相互作用プロセスの複合総体である」という野村(2000 : 3)の定義を採用する。

会話用論的変異)を明らかにすることである。もう 1 つは、異なる言語文化間における、同じ社会的文脈下での言語行為の遂行方法の類似点と相違点(異文化間変異)を明らかにすることである(Blum-Kulka, House & Kasper 1989)。本研究では、この 2 つ目の目的、異なる言語文化間における異文化間変異を明らかにするために、異文化間語用論の枠組みを援用する。具体的に、同じ社会的文脈下での日本語と中国語における依頼に対する「断り」の言語行動を分析対象とし、社会文化の違いがポライトネスの示し方と受け入れ方(課題 1)、談話展開のスタイル(課題 3)、配慮言語行動(課題 4)にどのように反映するか、という 3 つの課題を解明する。

### 2.1.2 中間言語語用論(Interlanguage Pragmatics)

中間言語語用論(Interlanguage Pragmatics)は、「学習者の第二言語(second language : L2)の語用論的知識の使用と習得を研究する分野」(清水 2016 : 218) である。異文化間語用論で比較される言語が学習者の母語(first language ; 以下、L1)と目標言語(target language ; 以下、TL)(例えば、本研究においては CJL にとっての中国語と日本語を指す)である場合、習得が困難な側面や L1 の影響(語用論的転移)をある程度予測できるため、言語教育に対する貢献の可能性が考えられる(Nelson, El Bakary & Al Batal 1996)。しかし、学習者の L2 の語用論的知識の使用と習得を明らかにするためには、学習者のデータを収集し、中間言語語用論の枠組みを利用して分析する必要がある。清水 (2016 : 219)によれば、中間言語語用論の分野で探求されている主要なテーマの 1 つとして、「受容と産出における学習者の言語運用の特徴と原因である。産出の面では主に発話行為の遂行が研究されており、その結果、表現の直接度、ストラテジーの選択やその組み合わせ、発話の長さや複雑さ、言語形式の選択などについて、TL 母語話者とは異なる学習者の特徴」が特定できるとされる。そこで、本研究では、学習者の言語運用(産出)に着目し、JNS の断る側と CJL の断る側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造の相違と原因を追求する(課題 2)ために、中間言語語用論の枠組みを援用して分析を行う。

## 2.2 ポライトネス理論 (Politeness Theory)

「20 世紀に入って欧米の哲学者の中に日常言語への関心を示す者があられ、その影響がポライトネスを含む語用論を生んだ」(堀他 2006 : i)。ポライトネス(politeness)とは、「会話において会話参加者の欲求や負担への配慮や、より良好な人間関係を築くための配慮によって円滑なコミュニケーションを図ろうとする際の社会的言語行動を説明するための概念」(山岡 2019 : 6)である。ポライトネスについては、Lakoff(1973)の「ポライトネスのルール(Rules of Politeness)」<sup>19</sup>をはじめ、Leech(1983)の「ポライトネスの原理(Politeness Principle)」、その後の Brown & Levinson(1987)の「ポライトネスの普遍性理論(Universal theory of politeness)」など、多くの研究が蓄積されている。言語により「配慮」の示し方が異なり、その相違が生じる原因を社会文化的な違いから解明するために、以下では、ほぼ全論にわたって援用することになるポライトネス理論について、その概要を整理する。ポライトネス理論を整理するに当たって、ポライトネスを語用論の主要な問題として扱った Leech(1983)の「ポライトネス原理」と、ポライトネス理論の中で最も知られている Brown & Levinson(1987)の「ポライトネスの普遍性理論」について概観する。

### 2.2.1 Leech(1983)の「ポライトネス原理」

Leech(1983)は、Grice(1975)の「協調の原理(Cooperative Principle)」<sup>20</sup>の有用性を認めた上で、通常の言語使用では原理から逸脱した間接的な言語表現の使用があることを指摘した。協調の原理を補うものとして、相手にとって impolite になるような表現は

<sup>19</sup> Lakoff(1973)は、次の3種類の「ポライトネスのルール」を提示した。

Rules of Politeness

- ① Don't impose(押し付けない)
- ② Give options(聞き手自身に選択させる)
- ③ Make A feel good-be friendly(聞き手の気分をよくさせる。友好的に)

(Lakoff 1973 : 298、日本語訳は三牧 2013 : 25 より)

<sup>20</sup> Grice(1975)の Cooperative Principle(協調の原理)は、コミュニケーションの成立そのものを目的とする原理である。Grice(1975)によると、話し手と聞き手の会話における原理は次の4つの maxim(原則)からなる。

- ① maxim of quantity(量の原則)「必要にして十分な情報を与える」
- ② maxim of quality(質の原則)「真実にして証拠のある情報のみを与える」
- ③ maxim of relation(関連性の原則)「関連のある情報を与える」
- ④ maxim of manner(様態の原則)「明瞭に簡潔に順序よく述べる」

最小限に抑え、polite になるような表現を最大限にする「ポライトネスの原理(Politeness Principle)」を提唱し、6つの原則(maxim)とその下位に位置する2つずつの対を成す副原則を示した。Leech(1983)は、コミュニケーションの成立という目的とよりよい対人関係の成立という目的が矛盾・衝突するとき、協調の原理を犠牲にしてポライトネスの原理が優先されると述べる。「ポライトネスの原理」とその6項目の原則群を、表2-1に示す。

表 2-1 Leech(1983)の「ポライトネスの原理」  
(三牧 2013 : 27 および山岡 2019 : 7 を、筆者がまとめたもの)

	他者志向	自己志向
利害	<p>(A)気配りの原則 (Tact Maxim)</p> <p>(a) 他者に対する負担を最小限にせよ</p> <p>(b) 他者に対する利益を最大限にせよ</p>	<p>(B)寛大性の原則 (Generosity Maxim)</p> <p>(c) 自己に対する負担を最大限にせよ</p> <p>(d) 自己に対する利益を最小限にせよ</p>
評価	<p>(C)是認の原則 (Approbation Maxim)</p> <p>(e)他者の非難を最小限にせよ</p> <p>(f)他者の賞賛を最大限にせよ</p>	<p>(D)謙遜の原則 (Modesty Maxim)</p> <p>(g)自己の非難を最大限にせよ</p> <p>(h)自己の賞賛を最小限にせよ</p>
	自己と他者	
意見の 陳述	<p>(E)合意の原則(Agreement Maxim)</p> <p>(i)自己と他者との意見の相違を最小限にせよ</p> <p>(j)自己と他者との合意を最大限にせよ</p>	
感情の 表出	<p>(F)共感の原則(Sympathy Maxim)</p> <p>(k)自己と他者との反感を最小限にせよ</p> <p>(l)自己と他者との共感を最大限にせよ</p>	

「リーチのポライトネス原理は会話に際して話者が有している志向性のベクトルのよ

うなものを端的に表現している点でわかりやすい」と山岡(2019 : 66)は指摘している一方で、これらの原則や副原則のすべてが等しく重要であるわけではないともされる (Leech 1983)。この点を三牧(2013 : 26)は、「対他者の原則である気配りの原則と是認の原則のほうが、対自己の原則である寛大性の原則と謙遜の原則より『より強力的な制約』として働くこと、また、副原則のうち、ポジティブ・ポライトネスに相当する下段よりもネガティブ・ポライトネスに相当する上段の方は重要度が高い」と述べている。

Lakoff(1973)と Leech(1983)に共通するのは、ポライトネスの重要性を唱え、「ポライトネスを語用論上のルールとして一般化して示すことに焦点が当てられていた」(三牧 2013 : 27)ことである。ただし、「文化によってはこれ以外の様々な maxim が必要になる可能性がある」(Thomas 1995 : 168)ため、理論的普遍性が確立しているとは言えない。Lakoff(1973)と Leech(1983)は、「距離を置くことと接近することの両面を含めた形でポライトネスを捉えたこと、文化的な差異と普遍的な位置づけを主張したこと」(三牧 2013 : 26)、「協調の原理よりも強く働く原則群をポライトネスの原理としてまとめたこと」(山岡他 2018 : 130)など、その後のポライトネス研究に大きな影響を与えた。

## 2.2.2 Brown & Levinson(1987)の「ポライトネスの普遍性理論」

ポライトネス理論の中で最も知られているのは、Brown & Levinson(1987)(以下、B & L(1987))<sup>21</sup>によって提唱された人間関係の言語理論—「ポライトネスの普遍性理論 (Universal Theory of Politeness)」—である。B & L(1987)のポライトネス理論における「ポライトネス」の定義を簡潔に記すと、「円滑な人間関係を確立・維持するための言語ストラテジー」(宇佐美 2002a : 102)ということになる。B & L(1987)についてとりわけ重要であると考えられる理由は、ポライトネス理論の「普遍性」にある。次節では、B & L(1987)のポライトネス理論の普遍性およびポライトネス理論の普遍性に関する議論について

---

<sup>21</sup> 「Brown & Levinson(1987)の Politeness: Some universals in language usage. は、1978 年に刊行された論文 'Universals in language usage: politeness phenomena' がもとになっている。これは Cambridge Papers in Social Anthropology, Volume 8 に収められている大部の論文であった。Brown & Levinson(1987)では、最初の部分でその後 10 年ほどの間に進展したポライトネス関連の研究成果を反映した議論を行っている」(三宅 2011 : 20)。Brown & Levinson(1978/1987)と表記する研究者もいるが、本研究では Brown & Levinson(1987)とする。

概観する。

### 2.2.2.1 B & L(1987)のポライトネス理論の普遍性

B & L(1987)のポライトネス理論公表直後から、B & L が謳ったポライトネス理論の普遍性に対し、「B & L(1987)のポライトネス理論の一側面のみを捉えた、誤解に基づく批判」(宇佐美 2002b : 111)が続出した。B & L は個人のストラテジーに偏った欧米中心のポライトネス理論である、各言語の特性を無視している、各言語・文化の特性を説明できないというのが批判のポイントであった。

それらの批判について、宇佐美(2002b : 112)は、「B & L(1987)のポライトネス理論は、言葉遣いの丁寧さ・言語形式の丁寧度・言語表現の丁寧さなどの『規範的ポライトネス』の観点からではなく、発話の運用効果・言語使用の効果に視点を置いた『語用論的ポライトネス』の理論である。いかなる言語においても、『円滑なコミュニケーション』のためになされる『敬語使用も含むより広い言語行動』の選択のメカニズムは、『普遍的』であると、B & L(1987)のポライトネス理論は主張する」と反論している。その後、ポライトネスの普遍性について、B & L(1987)の日本語版(2011)に追記された「日本語版出版によせて」には、「総体としてのポライトネスは個々の語や文自体に備わっているのではなく」、「状況の中で発せられる言葉によって、ポライトな態度や意図を首尾よく伝えることによって伝達される可能性を持つある推論」であるため、「世界中の様々な言語・文化の中に観察されるポライトな語法に関する共通性を説明できる」(2011 : xii)として、改めてポライトネスの普遍性に関する見解を説明している。その他、三宅(2013 : 34)は「B & L のポライトネス理論が言う普遍性とは、各ポライトネス・ストラテジーの出現の程度や様相など、表面的な様子に関してではなく、人々が相互行為する際に、フェイス保持の重要性を認識し、相互のフェイスを守るように協力し合うという、より深層の部分についてである」と述べている。また、山岡(2019 : 9)は、B & L(1987)のポライトネス理論の普遍性について、次のように指摘する。

B & L のポライトネス理論の最大の特長はポライトネスをストラテジーとして表現しているところにある。その結果、ポライトネスの言語行動は発話参与

者の対人関係や言語文化的背景などの語用論的文脈に応じてその都度選択されるという文脈依存性が的確に記述されている。また、もともと社会学や人類学の知見であるフェイス理論を援用していることもあり、個別の言語文化による差異や、諸々の非言語的行為までも含み込み、普遍性の高い理論となっている。

依頼に対する「断り」の言語行動における JNS と CNS の「配慮」の示し方、およびその背後にある「配慮」のメカニズムの異同を解明するためには、双方の言語使用を等しく捉える共通の枠組みが必要である。B & L(1987)のポライトネス理論は、上述の議論のように「普遍性」の持つ通文化的な言語使用を指摘した理論であるため、依頼に対する「断り」の言語行動に関する日中対照研究に適していると判断し、本研究では重要なアプローチと考えている。

## 2.2.2.2 フェイスとフェイス侵害行為

B & L(1987)のポライトネス理論は、Goffman(1967)のフェイス(face)の概念を援用してポライトネスを規定している。Goffman(1967)はフェイスを「社会に肯定される存在としての自己イメージ」と定義した。フェイスとは、「社会生活を営む上で不可欠である『対人コミュニケーション』に関わる人間の基本的欲求」(宇佐美 2002c : 98)で、B & L(1987)のポライトネス理論の根幹を成す概念である。人間には「ポジティブ・フェイス」(positive face ; 以下、PF)と「ネガティブ・フェイス」(negative face ; 以下、NF)という2種類のフェイスがある。PFは、他者に受け入れられたい、好かれたい、他人に近づきたいというプラス方向への欲求である。一方、NFは、自分の領域(テリトリー)を他者に邪魔されたくない、立ち入れたくないというマイナス方向への欲求である。そして、PFに働きかけるストラテジーをポジティブ・ポライトネス(positive politeness)、NFを尊重するストラテジーをネガティブ・ポライトネス(negative politeness)という。B & L(1987)はこのフェイスのどちらか一方、あるいは両方を脅かす行為をフェイス侵害行為(face-threatening act ; 以下、FTA)と呼び、フェイスへの脅威あるいは侵害度を測定する方法として、「フェイス侵害度見積もりの公式」を提示した。これは具体的に数値化するものではなく、相手の「フェイス侵害度(Wx)」は、3つの要因によ

って総合的に規定される(B & L 1987 : 76)。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

変数

$D(S, H)$  : 話者  $S$  と相手  $H$  の社会的距離(social distance)

$P(H, S)$  : 相手  $H$  の話者  $S$  に対する相対的力(power)

$R_x$  : 特定の文化で、行為  $x$  が相手にかける負荷度(ranking of imposition)

つまり、 $D$ 、 $P$ 、 $R$  の総計が大きいほど  $W$  の値が大となり、行為  $x$  の相手に与えるフェイス侵害の度合いは大きくなる。また、「同じ行為であっても、ある行為  $x$  が、相手にかける『負荷』の見積もりは、文化によって異なる」(宇佐美 2002c : 101)ことは重要である。すなわち、「文化や社会において類似の言語行動の FTA の重みが異なるのは、実はこの 3 つの値がそれぞれの文化・社会で異なり、中でも  $R$  は文化による差が大きい」(堀他 2006 : viii)。こうした指摘からも、B & L(1987)のポライトネス理論は英語圏を越えて多文化への応用も可能な普遍性を持つ理論と言える。

### 2.2.2.3 ポライトネス・ストラテジー

B & L(1987)のポライトネス理論によると、FTA 軽減行為を行う場合にはポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスに働きかける方法がある。ポジティブ・ポライトネスは、“the appreciation of alter’s wants in general or to the expression of similarity between ego’s and alter’s wants” (「相手の欲求一般を認める、あるいは相手と自己との類似点を表明すること」)(B & L 1987 : 101 [訳文は堀他 2006 : xiii] より)である。相手への好意や親密さを表現することでその期待や願望に添えたいという仲間意識を強調する態度は、ポジティブ・ポライトネスの根幹である。ポジティブ・ポライトネスに働きかける方略として、B & L(1987 : 103-129)は 15 種類のポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(positive politeness strategy ; 以下、PPS)を挙げている<sup>22</sup>。

---

<sup>22</sup> 日本語訳は山岡他(2018 : 138-140)による。以下同。



PPS1 : Notice, attend to H(his interests, wants, needs, goods)

聴者(の興味、欲求、ニーズ、持ち物)に気づき、注意をむけよ

PPS2 : Exaggerate(interest, approval, sympathy with H)

聴者への興味、賛意、共感を誇張せよ

PPS3 : Intensify interest to H

聴者への興味を強くせよ

PPS4 : Use in-group identity markers

仲間内であることを示す標識を用いよ

PPS5 : Seek agreement

一致を探せ

PPS6 : Avoid disagreement

不一致を避けよ

PPS7 : Presuppose/raise/assert common ground

共通基盤を想定せよ/喚起せよ/述べよ

PPS8 : Joke

冗談を言え

PPS9 : Assert or presuppose S's knowledge of and concern for H's wants

話者は聴者の欲求がわかっていて、そして気遣っていると述べよ、もしくは、それを前提せよ

PPS10 : Offer, promise

提供せよ、約束せよ

PPS11 : Be optimistic

楽観的であれ

PPS12 : Include both S and H in the activity

話者と聴者の両方を行動に取り込め

PPS13 : Give(or ask for)reasons

理由を示せ、もしくは述べよ

PPS14 : Assume or assert reciprocity

お互いさまであると見なせ、もしくは述べよ

PPS15 : Give gifts to H(goods, sympathy, understanding, cooperation)

贈り物(品物、共感、理解、協力)を聴者に贈与せよ

ネガティブ・ポライトネスは、“Negative politeness is redressive action addressed to the addressee’s negative face: his want to have his freedom of action unhindered and his attention unimpeded”(「相手の NF、すなわち行動の自由を邪魔されたくない、意志を侵害されたくないという欲求に配慮した緩和行為」)(B & L 1987 : 129 [訳文は堀他 2006 : x より])である。相手との距離を維持したり、相手への気遣いを表現したりする態度は、ネガティブ・ポライトネスの根幹である。ネガティブ・ポライトネスに働きかける方略として、B & L(1987 : 132-211)は 10 種類のネガティブ・ポライトネス・ストラテジー(negative politeness strategy ; 以下、NPS)を挙げている。

NPS1 : Be conventionally indirect

慣習的なやり方で間接的であれ

NPS2 : Question, hedge

質問せよ、ヘッジを用いよ

NPS3 : Be pessimistic

悲観的であれ

NPS4 : Minimize the imposition, Rx

負荷を最小化せよ

NPS5 : Give deference

敬意を示せ

NPS6 : apologize

謝罪せよ

NPS7 : Impersonalize S and H

話者と聴者を非人称化せよ

NPS8 : State the FTA as a general rule

FTA を一般的規則として述べよ

NPS9 : Nominalize

名詞化せよ

NPS10 : Go on record as incurring a debt, or as not indebting H

自分が借りを負うこと、相手に借りを負わせないことを明示せよ

本研究は、B & L(1987)のポライトネス理論が様々な言語の背後にあるポライトネスのメカニズムを解明する手法として普遍的であることを前提に、B & L(1987)のポライトネス理論を援用し、上述した 15 種類の PPS と 10 種類の NPS(すべてを使うわけではない)に照らし、JNS と CNS による「断り」の言語行動における FTA を緩和するための言語的ストラテジーについて比較する。言語的ストラテジーの違いおよび使用されたポライトネス・ストラテジーに反映される日中の「配慮」の示し方の違いを明らかにし、その差異を生じる原因を考察する。

### 2.2.3 「ポライトネス」と「配慮」、「配慮表現」について

本節では、本論文の中で高い頻度で使用する概念およびその共通点と相違点について述べる。まず、2.2.3.1 節では、「ポライトネス」と「配慮」の異同を明らかにし、本研究における「配慮」の捉え方を示す。次に、2.2.3.2 節では、山岡他(2018)が提案している「配慮表現」の定義を示し、「ポライトネス」と「配慮表現」を区別する。最後に、2.2.3.3 節では、「ポライトネスの原理」から派生した「配慮表現の原理」(山岡 2019)を示す。

#### 2.2.3.1 「ポライトネス」と「配慮」の異同

「ポライトネス」と「配慮」は多くの語用論研究者に用いられている。共通点は「ポライトネス」と「配慮」はともに、言語行動の選択をめぐる社会的言語行動を説明するもので、両者は普遍性を有している。「ポライトネス」の普遍性に関して、「その表示の仕方は文化によって異なるが、参加者相互がフェイスを尊重すること自体が普遍的である」(三牧 2013 : 290)とされる。一方、「配慮」の普遍性に関しては、その示し方は社会文化によって異なるが、参加者相互が円滑にコミュニケーションを取ること

自体は普遍的である。

相違点として、主に次の3点が挙げられる。

1 点目は、取り扱う範囲が異なる。ポライトネスに比べて配慮の取り扱う範囲はより広く、ポライトネスは配慮に内包されると考える。「ポライトネス」は主に対人関係調整に主眼を置き、上下や親疎の人間関係によって、親和意識を強調する「ポジティブ・ポライトネス」を取るか、あるいは遠慮意識を強調する「ネガティブ・ポライトネス」を取るかという言語ストラテジーである。一方「配慮」は、相手とほどよい距離を保つ遠慮意識を「近づかない配慮」、相手との親和性を増す親和意識を「近づく配慮」と捉えたい。また、「配慮」は言語行動における関係維持と意図の伝達という2つの機能があり、相手を不快にさせないように配慮することを「関係維持が優先された配慮」、自分の意図を明確に伝えることに配慮することを「意思伝達が優先された配慮」と捉えたい。コミュニケーションでは、情報伝達と対人関係調整のバランスをうまく取りながら会話をする能力が求められるため、ポライトネスの観点に加え、「配慮」の示し方の観点からの分析が必要である。

2 点目は、分析対象が異なる。「従来のポライトネス理論が話し手偏重であった」(三牧 2013 : 38)のに対し、「配慮」の示し方の観点からの分析は、話し手(断る側)に加えて、聞き手(断られる側/依頼側)の言語行動を重視し分析対象に入れる。この点は、次に述べる3点目へとつながる。断られる側/依頼側が断り発話をどのように受け取り理解したか、その結果としてその後の談話がどのように構造され展開したか、ということを相互行為の観点(2.4 節で詳述)から総合的に説明できなければならない。そのためには、談話レベルに分析の範囲を拡大し、「配慮」の示し方の観点から分析することが欠かせない。

3 点目は、分析レベルが異なる。従来のポライトネス理論は、「一文や一発話が中心であり、多くても数回の発話連鎖である。(中略)それで明らかになるのは、ポライトネスという現象全体の一部にすぎない」(三牧 2013 : 39)という指摘もあり、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の言語行動の特徴と相違点、および談話全体における対人意識のあり方を明らかにするためには、断る側によるポライトネスの選択という単一のレベルにとどまらず、断る側と断られる側/依頼側による経時的な複数の談話のやりとりという談話レベルまで、談話の展開構造や談話展開のスタイル、談話展開

に見られる配慮言語行動などの側面について、「配慮」の示し方の観点からの分析を行う必要がある。

以上が、本研究の問題意識である「配慮」の捉え方である。

### 2.2.3.2 「ポライトネス」と「配慮表現」の区別

「配慮表現」とは、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」(山岡他 2018 : 159)である。

「ポライトネス」と「配慮表現」との区別について、前者が言語行動の選択を巡る方略についてであるのに対し、後者は固定的な文脈で言語行動が制約された場合における表現の選択に関わると指摘している山岡他(2018 : 163)。例えば、言語行動を選択する際に、ポライトネスの原理の1つ「他者の利益を最大限にせよ」に照らした言語行動をとる際に、日本語の配慮表現「つまらないものですが」のように、他者の利益を小さく言う原理に照らして言語表現を選択することから「配慮表現の原理」が存在することを指摘した(山岡他同)。

### 2.2.3.3 配慮表現の原理

Leech(1983)による「ポライトネスの原理」6項目の原則群の2つの原則に対する、山岡他の「配慮表現の原理」を表2-2に示す。

表 2-2 負担と利益に関わる配慮表現の原理(山岡 2019 : 57)

	① ポライトネスの原理	② 配慮表現の原理
(A) 気配りの原則	(a)他者の負担を最小限にせよ	(a)他者の負担が大きいと述べよ
	(b)他者の利益を最大限にせよ	(b)他者の利益が小さいと述べよ
(B) 寛大性の原則	(a)自己の利益を最小限にせよ	(a)自己の利益が大きいと述べよ
	(b)自己の負担を最大限にせよ	(b)自己の負担が小さいと述べよ

相手に利益を与え、自分が負担を負った場合でも、相手に心理的負担を負わせることを配慮し、日本語の言語表現では「つまらないものですが」のように、行為の意識とは正反対に相手の利益や自分の負担は小さいと述べ、「ご面倒で恐縮ですが」のように、相手の負担は大きいと述べ、「大変ありがたい」のように自分の利益は大きいと述べる。これらの言語表現で配慮が相手に伝わることによって相手の心理的な負担が相対的に緩和される。

断りの理由を述べる際、日本語では「ちょっと用事がある」、「ちょっと予定がある」のような表現がよく使われる。それはどの配慮表現の原理を反映するのだろうか。また、日本語と比べて、中国語の断りではどのような言語表現が使用され、その言語表現がどの配慮表現の原理を反映するかについては、3.2.2 節にて分析する。

## 2.3 Langacker (2008) の「事態解釈 (Construal)」

プライトネス理論は、方策の普遍性を体系化した理論であり、発話内容の具体的な分析には、他の理論が必要と考える。例えば、先行研究の結果である、日本人が用いる {理由} は内容が曖昧であるのに対して中国人の用いる {理由} は具体的で種類が多い(蒙 2010)という対立現象などについて、「認知言語学(Cognitive Linguistics)」はその違いを説明するのに有効である。

認知言語学的研究とは、言語のあり方とそれを用いる人間の認知の営みの傾向性との関連を探るもので、「人間の認知的な営みには固有の傾向性が存在するという前提のもとで、ある状況が言語化されようとする場合、どのような表現の仕方が可能な選択肢としてありうるのか、そして、それら可能な選択肢の間の違いは、人間のいかなる認知的な営みにおける傾向性によって動機づけられるのか」(辻 2003 : Vii)を追求することが、基本的な関心である。

“The corresponding labels I will use, for broad classes of construal phenomena, are specificity, focusing, prominence, and perspective”(「本論では、事態解釈の多様な側面を、詳述性(specificity)、焦点化(focusing)、際立ち(prominence)、パースペクティヴ(perspective)に区分する」)(Langacker 2008 : 55 [山梨監訳 2011 : 71])。その中で、Langacker(2008)は、「詳述性(specificity)」を<事態解釈(construal)>の1つの側面として取り上げ、“One

dimension of construal is the level of precision and detail at which a situation is characterized” (「ある状況がどの程度正確に、そして詳細に記述されているかという点から、事態解釈の一面を明らかにすることができる」)(Langacker 2008 : 55 [山梨監訳 2011 : 71] ) と指摘し、“Schemas and elaborative relationships are essential in every aspect of language structure” (「スキーマ化の関係と精緻化の関係は、言語構造のあらゆる側面を考える上で非常に重要である」)(Langacker 2008 : 57 [山梨監訳 2011 : 73] )と述べている。Langacker(2008)によると、“By schematization, I mean the process of extracting the commonality in multiple experiences to arrive at a conception representing a higher level of abstraction.” (「スキーマ化とは、複数の経験から固有の共通点を抽出し、高次の抽象化に到達する認知プロセスである」)(Langacker 2008 : 17 [山梨監訳 2011 : 21] )。Langacker(2008)の例で言えば、hot という語を使うことで温度について述べることができるが、in the 90s, about 95 degrees, exactly 95.2 degrees と特定して記述することも可能である。両者の異なりを、「スキーマ化(schematization)」と「精緻化」(「事例化」とも言う)とする。hot という語のような具体性の低い言語表現は、大まかな特性と全体的な構成のみを明らかにする解像度の低い記述であることから、「スキーマ化」と言い、in the 90s, about 95 degrees などは、非常に分解された詳細な記述であることから、「精緻化」と言う。“A schematic characterization is instantiated by any number of more specific ones, each serving to elaborate its coarse-grained specifications” (「スキーマ的な特徴は、多くのより詳細な特性によって事例化(instantiation)されていき、その詳細な特性それぞれが大まかな記述を精緻化(elaboration)している」)(Langacker 2008 : 55 [山梨監訳 2011 : 72] )。さらに、Langacker(2008)は、“They also illustrate the general notion that language recruits, and thus intrinsically manifests in its own organization, a broad array of independently existing cognitive processes” (「言語は様々な認知処理を行い、その結果この認知処理が言語の構造の中に反映されている」)(Langacker 2008 : 16 [山梨監訳 2011 : 20] )と指摘している。

先行研究で触れた日中間の「断り」における {理由} の発話内容の具体性の相違は、こうした「事態解釈」の類型に関わると推察される。言語による「配慮」の示し方の相違と、その相違が生じる原因を認知的な違いから解明するために、Langacker(2008)の「事態解釈」の概念を日中の「断り」における {理由} の発話内容の具体性の分析

(3.2.2 節で詳述)に用いることとする。

## 2.4 相互行為的社会言語学(Interactional Sociolinguistics)

ポライトネス理論の多くは、『枠組みとしての普遍性』という優越性が評価され、異文化間語用論や中間言語語用論などの研究分野に頻繁に援用されている(李 2015 : 6)が、概念や分析対象単位が短いことから、「ポライトネスという現象全体の一部にすぎないと言わざるを得ない」と三牧(2013 : 39)は指摘する。従来のポライトネス理論は話し手側(断る側)偏重であり、断る側の 1 発話文についての研究が中心である。しかし、「断り」の言語行動は、話し手側(断る側)の断り発話に対して、聞き手側(断られる側／依頼側)自身が実際にその断り発話をどのように受け取り評価したか、その結果として会話がどのように展開して構成されているかが、「断り」の重要な分析ポイントであることから、断る側と断られる側／依頼側の両者の発話を見る必要がある。こうした相互行為(interaction)の観点から観察可能な理論が、「相互行為的社会言語学(Interactional Sociolinguistics)」である。

相互行為は、ほとんど意識化されず慣習化されているもので、異文化間のコミュニケーションで問題が生じて初めて顕著になる。相互行為とは、植野(2012 : 57)では「談話分析を通して言語と社会構造の相関関係を見出し、それが実際のコミュニケーションにどのような影響をもたらすかを観察するもので、(中略)会話者が共有する言語使用の規範は発話の産出を規定し、(中略)分析者は、会話者同士が理解し合い、コミュニケーションが円滑に行われていることを見極める」方法論である。Gumperz(1982)の相互行為的社会言語学は、コミュニケーションの中で行われる相互行為の解釈はコンテキストに依存しており、その発話内容を理解する鍵となるものを「文脈化の手がかり(contextualization cues)」と呼ぶ。「文脈化の手がかり」として、具体的にはあいづち、他者修復、応答要求の仕方と答え方、ターンの種類と回数のような会話の中の比較的ミクロな部分から、自己開示の深さ、話題展開のスタイル、発話量の分布のような会話全体に関わるマクロな部分にまで及ぶ。FitzGerald(2003)は、ターン・ティッキングと発話量、談話の組み立て、価値観の違いによる話し方のスタイルは話者の文化・社会的背景と密接に関係しているため、異文化コミュニケーションでは情報内容の誤



解だけではなく人間関係にまで影響を及ぼす様々な問題の原因となっていることを、実際の異文化接触会話データを示しながら指摘した。大谷(2015a : 4)によると、コミュニケーション・スタイルに関する従来の研究では、日本語と英語の話し方やスタイルは異なる類型に分類され、そこから生じる解釈の違いは、「情報伝達を阻害するだけでなく、対人関係の不全にまでつながりうる」とされる。特に、断りのコミュニケーションは、依頼側も断る側も会話参与者としてともに会話を構築しているにも関わらず、これまでの日本語と中国語の「断り」の対照研究で比較的多く行われてきたのはストラテジーや言語表現に関する研究にとどまっていた、言語行動全体についてはまだ研究されていない。

話し手(断る側)行動だけではなく、聞き手(断られる側／依頼側)行動の視点を加え、また、一文単位あるいはごく短い発話のやりとりから「依頼—断り」談話の全体に拡大して、JNS と CNS による依頼に対する「断り」の言語行動のあり方全体、および「断り」の言語行動に影響を及ぼした社会文化的前提の異同を明らかにするために、「相互行為的社会言語学(Interactional Sociolinguistics)」の枠組みを利用することが必要である。依頼に対する「断り」談話の展開構造(4 章)、談話の展開スタイル(5 章)、談話展開に見られる配慮言語行動(6 章)を分析項目とし、話し手側(断る側)と聞き手側(断られる側／依頼側)の双方の相互行為における経時的な複数の談話の連鎖、さらに談話全体にまで範囲を拡大して分析を行う。その上で、分析で得られた結果から明らかになった「断り」の言語行動における「配慮」の示し方を、どのように教育現場に還元できるのかを検討する。

## 2.5 分析方法

本研究では、アンケート調査と談話完成テスト調査、およびロールプレイ調査に基づく実験データとしての会話を分析する。談話分析(discourse analysis)<sup>23</sup>は、異なる理論的背景を持つ研究者により行われているため、様々なアプローチがある。本研究の研究方法として、談話分析のアプローチの 1 つである言語社会心理学的アプローチをと

---

<sup>23</sup> 談話分析は談話論(discourse theory)と呼ばれる研究分野に内包される。その他には、語用論(pragmatics)や会話分析(conversation analysis)などがある(金 2012)。

って量的・質的な分析を行う。

### 2.5.1 談話分析

コミュニケーションのために運用された発話のことを「談話(discourse)」と呼ぶ。談話分析は、「言語を見るのに、1つの文という枠を超えた、会話やテキストなどのより大きな言語単位を対象とする研究を指して用いられる場合がほとんどであり」(金 2012 : 489)、言葉がどのような機能を果たしているのかを談話という単位の中で見る研究である。言い換えれば、談話分析とは、実際に観察された談話データをもとに、そのしくみ(構造)とはたらき(機能)を解きほぐす学問である(橋内 1999)。熊谷(2018 : 249)によると、談話分析には、2つのアプローチがあり、1つは談話の構造や構成要素を明らかにしようとするもので、談話をまず様々なレベルのまとまりや単位に分割し、その分析を通して、談話全体の構造的特徴や単位の連鎖パターンを明らかにする。もう1つは、談話に伴随して頻繁に見られる現象、例えばあいづち、くり返し、フィラーなど、特定の現象に着目するアプローチである。本研究は前者に該当し、1 発話文という言語行動の意識・発話文レベル、発話文および発話文からなる依頼側と断る側によるやりとりという現実／自然に近い言語行動・談話レベルの言語運用に注目し、談話としてのまとまりを支えるストラテジーの機能や談話の展開構造、談話展開のスタイルおよび談話によって断りが達成されるプロセスを分析する。なお、依頼に対する「断り」の言語行動には、あいづちやフィラーなど談話に付随する現象も観察されるが、それら付随現象についての分析は今後の課題とする。

### 2.5.2 言語社会心理学的アプローチ

ここでは、宇佐美(1999)によって提唱された「人間の相互作用としての会話」分析手法の「言語社会心理学的アプローチ」を援用する。

「人間の相互作用としての会話」の分析を通して「言語使用の原則」ひいては「人間行動の原則」を解明することに主関心 (宇佐美 1999 : 42) があり、心理学における伝統的な実証的方法論に基づく、以下の(1)から(6)のプロセスが提示されている。

- (1)目的に応じて(男女差を見るのか分化差を見るのか等)、条件を統制してデータを収集する。
- (2)フェイス・シート、フォローアップ・アンケート(インタビュー)などで、必ずインフォーマントの背景的情報や、会話自体に対する感想などを収集し、五段階評定法を用いるなどして、何らかの定量的処理ができるようにする。また、自由記述なども参考になる。
- (3)定量的分析がしやすい形で文字化資料を作成する。
- (4)分析項目をコーディングして、定量的処理ができるようにする。
- (5)コーディング(分類など)の「信頼性」は二人のコーダー間の一致率(単純一致率に、偶然一致率を考慮した修正を加えたもの-(Cohen's Kappa))にて判断する。
- (6)コーディングの過程で記号化し得なかった特徴などを、必ず質的(定性的)な分析で確認・検討する。

(宇佐美 1999 : 52)

本研究では、データの収集やデータの整備には言語社会心理学的アプローチを採る。それは人間の相互作用としての「依頼-断り」の会話の分析を通して、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の言語行動の特徴と相違点を明らかにする、ひいては依頼に対する「断り」の言語行動における JNS と CNS の「配慮」の示し方、およびその背後にある「配慮」のメカニズムを解明することに主関心があるからである。また、DCT とロールプレイで条件を統制したデータを収集することで、今後各変数を操作した様々な角度からの追試験や検証が可能になるからである。データの整備の過程では、定量的処理ができるように、収集したデータを文字化し、分析項目に対するコーディングを行う。コーディングの信頼性は統計的手法を用いて判断する。一方で、発話機能の認定とそれに基づいて行うストラテジー、談話構造の分析、また、話題上の話し手・聞き手役割発話の認定とそれに基づいて行う談話展開のスタイルの分析には、談話分析の知見を応用する。これらを明らかにするためには、談話のしくみ(構造)とはたらき(機能)を解きほぐす談話分析で蓄積された知見が有効だからである。

「断り」の言語行動に関する従来の研究では、「断り」に見られる差に社会的変数がどのように関わるのかを明らかにするために、アンケートや DCT の研究方法を用

いる量的分析(quantitative analysis)が大半を占める。量的研究では、「対象を測定することで数量化されたデータを得、それを処理して結論を得る」(大谷 2019 : 21)ことができるが、しかし、「統計的調査によって得られる数値中心の情報は、個々の事例の特殊性や個別性を理解する上ではおのずから限界がある」(王 2015 : 90)。その見落としがちな部分を補うために、「質」そのものにおいて把握する試みとして、質的分析(qualitative analysis)の方法が提案できる。抱井(2019 : 101)は、「量的研究と質的研究をともに用いることで、それぞれのアプローチがもつ長所を活かし、短所を補い合うことができる」と指摘している。本研究は、量的研究と質的研究をともに用いることで、お互いに補い合うことにより「断り」言語行動の研究を行う。つまり、マクロな面では、DCT やロールプレイによって抽出された「断り」のデータを頻度や割合の数値に換算し、量的分析を通して一定程度の傾向性を分析する。同時にミクロな面では、「断り」の言語行動をありのままに観察し、記録したデータで使われるストラテジーの内容、談話展開のスタイル、配慮言語行動を質的に分析する。

## 2.6 本研究で扱うデータ

異文化間語用論や中間言語語用論では、母語話者や学習者からデータを収集する必要がある。言語行動の研究で扱っているデータ収集方法は、アンケート調査や DCT などの筆記のデータ収集方法もあれば、ロールプレイ、自然談話の録音(電話会話の録音)・録画など口頭インタラクションのデータ収集方法もあり、自己報告データもある。

本研究の分析で扱うデータは次の 3 種類である。

- (1)言語行動の意識・発話文レベルでの日本語と中国語の「断り」に見られるストラテジーの使用実態(どのように使っている)を明らかにするために、談話完成テストによるアンケート調査で収集したデータ。
- (2)断り方の選択に関わる断られる側の JNS と CNS の意識(どのように意識している)を明らかにするために、質問調査紙で収集したデータ。
- (3)現実／自然に近い言語行動・談話レベルでの JNS と CNS による「断り」の言語行動の談話構造、談話展開スタイルおよび、その談話展開に見られる配慮言語行

動を明らかにするために、ロールプレイ調査で収集したデータ。

なお、本研究で扱うデータの詳細(調査対象者、調査期間、調査方法など)は、各章で具体的に述べる。

## 2.7 本章のまとめ

本章では、分析・考察用の理論的枠組みと研究方法について述べた。まず本研究の属する分野、対照語用論およびその下位分野、異文化間語用論と中間言語語用論を概観した。次に、分析・考察に用いる種々の理論と概念、ポライトネス理論と事態解釈、相互行為的社会言語学を概観した。それから本研究での分析方法を述べた。本研究では、基本的には談話分析のアプローチをとるが、データの収集と分析の過程においては、言語社会心理学的アプローチを援用することを述べた。最後に、本研究で扱う 3 種類のデータを述べた。

次章以降、実際に「断り」の言語行動を分析した結果を示す。第 3 章では、言語行動の意識・発話文レベルにおける、断る側のストラテジーと断られる側の意識の日中対照の分析結果を示す。

## 第3章 断る側の戦略と断られる側の意識の日中

### 対照

#### 3.1 断る側の戦略と断られる側の意識について

「断り」は、相手の期待や好意を受け入れないことを相手に伝える発話機能を有する言語行動であるため B & L(1987)の FTA に強く関わり、人間関係を損なう恐れがある言語行動の1つとなる。「断り」により生じた相手との摩擦を解消するために、言語戦略の観点からは、「断る側」は断りの意思を伝えつつ、付随的に言い訳を述べたり、代案を提示したり、または謝罪を述べるなどの「関係修復行為」がしばしば行われている。言語形式の観点からは、断りを最後まで言い切らない形で、言いさし文により婉曲的に断ることも相手の負担の軽減への配慮表現の一方法である。なお、「配慮はどの言語文化においても働くものであるが、その配慮をどのように表現するかは、それぞれの言語や文化によって異なる」(藤原他 2009 : 86)ため、異なる社会背景や文化の中で育てられる JNS と CNS は断る際に、好まれる戦略や配慮表現には差異がある。

一方、断る側が断りの意思を表明した際、その断りに対する「断られる側」の反応があつてこそ「断り」の言語行動は成り立つ。断られる側の意識を明らかにする必要もあると言える。しかし、「断り」の先行研究には、断る側による戦略を分析する研究は数多くあるが、その断り方が断られる側にどのような印象で受け取られるかについての研究、つまり「断られる側」の研究は管見の限りほぼない。断る側の断り方だけではなく、断られる側がその断り方への解釈や受け入れやすさも母国の社会文化規範に影響されることから、断られる側の「断り」に関する日中言語意識の在り方について知見を得るためには、まず断る側の発話を分析する必要がある。

本章では、DCT 調査と意識調査の結果を分析し、「断り」の言語行動についての言語行動の意識・発話文レベルの分析結果を示す。まず 3.2 節では断る側を分析する。日中の依頼に対する「断り」の言語行動を共通の枠組みで比較するために、B & L(1987)のポライトネス理論を援用する。ポライトネス理論を用いて、「断り」において典型的

に現れうる {詫び} {理由} {結論} の言語的ストラテジーの使用状況(3.3.2.1 節)、対人関係を構築・維持するための重要な部分である断りの【終結部】の言語的ストラテジーの使用状況(3.3.2.2 節)、断った後の補償として {将来約束} と {代案提示} の言語的ストラテジーの使用状況(3.3.2.3 節)について分析する。その後、Langacker(2008)の「事態解釈(Construal)」の概念を用いて、{理由} の発話内容の具体性の異同を記述する。この2つの分析により、ストラテジーの使用傾向と、具体的な発話内容、および「配慮」の示し方の異同を明らかにする。次に、3.3 節では断られる側(依頼側)を分析する。断りに関する上述の異同は、異なる社会文化背景を持つ JNS と CNS の依頼側にとってどの程度受け入れやすいかを検証する。これらの目的を達成するために、本研究の課題1つ目に取り組む。

**研究課題1:** 言語行動の意識・発話文レベルにおける日中両言語の断り発話を比較し、認知や社会文化的差異とそれが反映するポライトネスの差異を明らかにする。また、断られる側の視点から、JNS と CNS にとって、ポジティブ・ポライトネスの断り方とネガティブ・ポライトネスの断り方ではどちらが受け入れやすいかという、「断り」に関する日中の意識の異なりを明らかにする。

## 3.2 断る側のストラテジー

本節では断る側に焦点を当て、依頼に対する断る側のストラテジーの日中対照の結果を示し、その結果について考察を行う。

### 3.2.1 研究方法

本節では、データの収集、分析の方法を述べ、分析用の意味公式の分類を示す。

#### 3.2.1.1 データの収集

データは高(2016)の DCT データを使用した。高(2016)は、会話双方の間の社会的変数(親疎関係や上下関係)が断りにどのような影響をもたらすかを調べるために、「親し

い友人に引越しの手伝いを頼まれて断る」と「先生からのアルバイトを紹介されて断る」という2つの場面を設定して調査を行った。上下関係や親疎関係が断り表現に影響をもたらすことは言うまでもないが、本章では、人間関係の要因は考慮せずに、マクロ的に日中両言語にはどのようなポライトネスと配慮表現の原理が使われるのかを観察する。「引越しの手伝いを頼まれて断る」という場面はこれまでの先行研究(元 2002、文 2006、黄・玉岡 2014)でも設定されており、また中日両国の大学生にとって起こりえる自然な場面であると考えたが、依頼と断りのやりとりは親しい間柄で起こりやすいため、今回は「親しい友人に引越しの手伝いを頼まれて断る」場面<sup>24</sup>のみ分析を行う。断りをどのように伝えるかについて、DCT データを分析する。

＜場面＞ あなたの親友が今週末に引越しします。彼／彼女はあなたに手伝って  
くれることを望んでいます。

友達：今週末引越ししなければならなくなったの、手伝ってくれる？

あなた： \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

調査は、2015 年の 5 月から 8 月にかけて、日本の神奈川県にある A 大学と中国の山東省にある B 大学で行った。研究倫理を遵守し、収集したデータは研究以外の目的では決して使用しないこと、個人情報には保たれることなどを事前に調査協力者に説明し、調査協力者から受諾を得た。調査協力者は、大学生の JNS20 人(男性 5 人、女性 15 人で、平均年齢は 20.3 歳)と、大学生の CNS20 人(男性 7 人、女性 13 人で、平均年齢は 21.7 歳)である。JNS には日本語で書かれた DCT 用紙(付録 I—1 日本語母語話者への調査票参照)に日本語で回答を、CNS には中国語で書かれた DCT 用紙(内容は日本語版と同じで、付録 I—2 中国語母語話者への調査票参照)に中国語で回答の協力を得た。また、調査協力者の意識を分析するために、DCT 調査を行った後の一週間以内に数名の調査協力者にフォローアップ・インタビューを行った。

<sup>24</sup> 引越しの地域や距離などによっては、友人ではなく引越し業者に頼む場合も考えられるため、設定した場面の自然さについては今後検討を加えたい。



### 3.2.1.2 分析方法

分析方法は、回答文を構成している意味公式を抽出し、その使用割合や意味内容を比較するというものである。李(2013)は、Beebe et al.(1990)と伊藤(2004)の意味公式の分類を利用し、それを修正・補足して断りの日中対照研究を行った。しかし、今回収集したデータを分析した中で、李(2013)の分類では捉えきれない発話があったため、{信念}、{非難}、{補償表明}の意味公式を追加した。本研究の分析に用いた意味公式を表 3-1 に提示した。各意味公式の意味機能の説明に加えて、調査で収集した日本語と中国語での用例も示す。実際の日本語データ、中国語データは付録Ⅱ 談話完成テスト資料を参照されたい。なお、表における中国語の例の日本語訳は筆者によるものである。「∅」は該当する項目がないことを示す。

表 3-1 意味公式の分類

意味公式	意味機能	日本語の例	中国語の例
{結論}	直接的で明確な断り	パスで;行けない;無理そう;手伝えないんだ	恐怕不能帮你忙啦(たぶん手伝いに行けない);去不了(行けない);不行耶(無理だね);没办法帮你搬家了(引越しを手伝うことはできない)
{理由}	相手の意向に添えない旨の説明	バイトだわ;その日忙しいから;今週末はちょっと用事があるから;その日は予定があるから	周末我家里有点事(週末は家にちょっと用事がある);我这周末有事,实在抽不开身(週末は用事があって、手が離せないから);周末我已经有了别的安排了,很重要(週末は既に予定があって、とても重要だから);周末我恰好有个重要活动需参加(週末はあいにく大事な活動に参加しなければならないから)

{詫び}	相手の意向に添えないことを負い目に感じている旨の表明	ごめん;ごめんなさい;ごめんね	对不起(すみません);不好意思(ごめんなさい);抱歉啊(ごめんね);实在抱歉/真不好意思(本当にごめん)
{代案提示}	問題解決の方法として自分から働きかける内容の代わりの案の提示	∅	要不我替你联系其他人(代わりに私が他の人に連絡するのはどう/どう思う?);我帮你找别的同学吧(代わりに私が他の学生を探すのはどうかな/どうでしょうか。)
	問題解決の方法として自分が回避する内容の代わりの案の提示	他の子にお願いしてほしい	∅
{将来約束}	積極的な約束	∅	下次有什么需要帮助一定去(今度何かがあったら絶対手伝いに行くよ);回头你收拾新家的时候一定去帮忙哈(あとで家を片付けるとき絶対手伝いに行くよ)
	消極的な約束	∅	改天补偿你(いつか補償する)
{共感}	相手の意向に添いたい心情の表明	∅	我真的很想帮你(本当に手伝いたいけど)
{条件}	承諾する可能性を述べること、断りの保	他の日なら大丈夫だと思う;それ以降の○	如果忙完,我尽量过去帮你(もし終わったら、できるだけ手伝いに行くよ);这样吧,有时间我一定

	留。条件によって、自分はできる場合とできない場合の両方の可能性があり、相手の意向にできるだけ添いたいという「誠意」や親切心を伝える	○日なら大丈夫だけど... どう？	去(時間があったら絶対行く、それでいい?) ; 下课后我立马赶过去, 好吗? (授業が終わってからすぐに手伝いに行くうよ。それでいい?) ; 开完会我就过去(ミーティングが終わったら行くよ) ; 要不我这几天帮你(それとも、この二三日手伝うのはどう?)
{信念}	行動の基礎となる態度の表明	∅	老朋友搬家我也不太好缺席, 对吧 <sup>25</sup> (付き合いが長い友人だから、引越しに手伝いに行かないのはよくないでしょうね)
{非難}	不満な気持ちの表明	∅	怎么不早说 <sup>26</sup> (もっと前に言ってくれ／なぜ早く言わないの?)
{補償表明} <sup>27</sup>	相手に負わせた負担を補償する行為提供の申し出	∅	不然晚上我给你带过去好的? (なんなら夜美味しいものでも持ってそっちに行くけど)

<sup>25</sup> 杉戸・尾崎(2006)は、言語行動の対人的側面にはへりくだり性・うやまい性・あらたまり性・近づき性があると指摘している。近づき性の例としては、「まあ、君だから気楽に言っちゃうけどね……。」を挙げている。ここでの“老朋友搬家我也不太好缺席, 对吧”(「付き合いが長い友人だから、引越しに手伝いに行かないのはよくないでしょうね」)は、話者が相手とのつながりを表明したり近づき性を実現したりするという配慮をしていると考える。

<sup>26</sup> 『もっと前に言ってくれ』というように相手を責めるような表現は、かなり親しい仲でもなかなか言えない」と八代他(2001 : 75)は指摘しているが、中国語でこのような表現は相手を責めるよりも惜しい気持ちや関心を示す表現であり、親しい仲でも使われる言葉である。

<sup>27</sup> 西尾(2012 : 76)は、「今度お礼させてください」を{補償表明}の例として挙げている。

意味公式の数え方について、例文を示しながら説明を行う。

(3) ごめん、その日予定合わないんだ。(JNS15F<sup>28</sup>)

{詫び}                      {理由}

(3)の場合、「ごめん」を{詫び}の意味公式として1回、「その日予定合わないんだ」を{理由}の意味公式として1回と数える。しかし、(4)のように、1つの発話に同種類の意味公式が数回出てくる場合もあるが、意味公式の分類という観点から、同様の意味公式が数回現れている場合も1回と数える。

(4) ごめんね。距離が遠いのと、時間がたくさんとれないから、行けない。(JNS2M)

{詫び}                      {理由} ①                      {理由} ②                      {結論}

(4)の場合、「ごめんね」を{詫び}の意味公式として1回、「行けない」を{結論}の意味公式として1回と数える。「距離が遠い」と「時間がたくさんとれない」を総合して{理由}の意味公式として1回と数える。

意味公式の使用割合の計算方法は、調査協力者の総数を分母として、抽出された意味公式の使用者数を分子とした。例えば、JNS20人のうち7人が{理由}の意味公式を使用する場合、{理由}の意味公式の使用割合は35%(7/20)となる。

### 3.2.2 結果と考察

まず、3.2.2.1節で意味公式全体の使用状況を示す。次に、3.2.2.2節で「断り」全体で典型的に現れうる{詫び}、{理由}、{結論}の3つの意味公式の使用状況を細かく見る。その後、3.2.2.3節で「断り」で対人関係を修復するための重要な部分である【終結部】を取り上げ、その意味公式の使用状況を見る。最後に、3.2.2.4節で【終結部】の特徴的な要素である{将来約束}と{条件}、{代案提示}について分析し、考察を行う。

---

<sup>28</sup> 末尾の数字と文字は、調査協力者の性別(M=男性・F=女性)、通し番号を順に示したものである。

### 3.2.2.1 「断り」において意味公式全体の使用状況

今回の調査で得られた JNS と CNS の「断り」の意味公式の使用頻度(人数)と割合(%)を表 3-2 にまとめた。意味公式は出現回数が多い順に並べている。中国語の「断り」に使われる意味公式の使用頻度と割合の 7 位を占めている意味公式には、{信念}と{非難}、{共感}、{補償表明} がある。それらの意味公式は各 1 回(各 5%)であるため、総括して「その他」と表示した。

表 3-2 「断り」に使われている意味公式の使用頻度(人数)と割合(%)

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	7 位
日本語	{理由} 18(90%)	{詫び} 13(65%)	{結論} 11(55%)	{条件} 2(10%)	{代案提示} 1(5%)	∅	∅
中国語	{理由} 20(100%)	{詫び} 13(65%)	{結論} 6(30%)	{条件} 5(25%)	{将来約束} 3(15%)	{代案提示} 2(10%)	その他 各 1(5%)

表 3-2 から分かるように、「断り」に使われている意味公式の種類について、日本語には {理由}、{詫び}、{結論}、{条件}、{代案提示} の 5 種類がある。中国語には {理由}、{詫び}、{結論}、{条件}、{将来約束}、{代案提示}、{信念}、{非難}、{共感}、{補償表明} の 10 種類があり、日本語における意味公式の種類より豊富である。しかし、その出現回数を多い順に並べて見ると、日本語と中国語ともに {理由}、{詫び}、{結論}、{条件} の順となる。また、日本語では {理由}、{詫び}、{結論} の意味公式は半数を超えるが、中国語では {理由} と {詫び} の意味公式が過半数を占める。

以下では、「断り」の意味公式で出現回数が多い {詫び}、{理由}、{結論} の 3 つに絞って詳しく結果を見る。

### 3.2.2.2 {詫び} {理由} {結論} の意味公式の使用状況

尾崎(2006 : 91)は依頼と勧めに対する JNS の断りを分析し、「典型的には、『すみません』、〇〇なので△△できません』のように、『詫び』と『理由説明』と『断りの述部』の 3 つの要素が現れることが期待される」と指摘しているが、これは本調査での

「断り」における意味公式の分析結果と一致する。尾崎(2006)のいう「詫び」、「理由説明」、「断りの述部」は、表 3-1 に列挙した意味公式の中の {詫び}、{理由}、{結論} に相当する。そこで本節では、「断り」において典型的に現れるこれら 3 つの意味公式に注目し、これらの使用頻度や意味内容を分析する。今回の調査で得られた日本語と中国語の {詫び}、{理由}、{結論} の意味公式の使用頻度(人数)と割合(%)を表 3-3 に示した。

表 3-3 {詫び} {理由} {結論} の意味公式の使用頻度(人数)と割合(%)

	{理由}	{詫び}	{結論}
日本語	18(90%)	13(65%)	<b>11(55%)</b>
中国語	20(100%)	13(65%)	<b>6(30%)</b>

まず、表 3-3 から分かるように、日中ともに {詫び} と {理由} が高頻度で用いられているのに対し、{結論} は若干少ない。{結論} において明確に断りを表明した割合は、日本語では約半数(55%)であったのに対し、中国語は 3 割(30%)であった。この結果から、親しい同輩とのコミュニケーションにおいて、CNS は JNS よりも {結論} を回避する傾向があると言える。『直接的な断り』を用いたのが半数程度であることから、日本人は断るとき、はっきり相手に自分の意向を伝える傾向があることを示している。親しい同輩にも気軽に断る傾向も見られる」と加納・梅(2003 : 37)も指摘しており、その傾向は本データの結果にも認められる。

次に、日中ともに最も多く用いられる意味公式である {理由} の発話内容を具体的に分析する。依頼を断る際、相手の期待に応じられない理由を述べることは日常会話でよく見られる。「会話の状況にもよろうが、何も理由を言わずに断るのと、理由を述べて断るのとでは、一般に後者の方が相手に対し配慮していると感じられることが多いのではないだろうか。理由説明を言うか言わないかも、相手に対する配慮として機能している」と尾崎(2006 : 95)は指摘しており、{理由} を使うことによって「断り」がもたらすフェイスへの侵害を緩和しようとする配慮の意識は日中間で共通していると考えられる。しかし、「断り」に使われる {理由} の内容的な相違点について、藤森(1996)は JNS が CNS よりも全体的に「曖昧型」をよく使用すると指摘している。「曖

味型」とは、「時間、場所、相手などについて明示的に言及しない、限定しない型である。日本語の場合、言い回しが定型化しているものが多い。」(藤森 1996 : 9)とされ、例として「(親しい相手に)『ちょっと今度の土曜日は用事があるんだ。』」(下線は藤森による)のような「用事がある」が挙げられる。それに対し、中国人は{理由}の説明が具体的になる傾向があると指摘されている(李 1999:185; 肖・陳 2008:138; 蒙 2010:17)。その指摘については、本研究の結果でもそうした傾向が支持された。具体例を挙げると、断り発話における{理由}の発話内容は、(5)、(6)<sup>29</sup>に示したように、両言語ではその具体性が明らかに異なる。

(5) a. 今週末はちょっと用事があるから行けない。ごめんね！ (JNS06F)

b. その日、用事があって手伝えない！ごめんね。 (JNS11F)

(6) a. 对不起，我周末姥姥要来，我好久没和姥姥一起吃饭了，实在抱歉，

下次有什么需要帮助的一定去。 (CNS01M)

(ごめん、週末祖母が来るんだ。祖母と一緒にご飯を食べるのは久しぶりだから、本当にごめん。次の機会には絶対手伝いに行くよ。)

b. 我周末要去辅导班代课，下午4点才能完，下课后我立马赶过去帮你，好吗？

抱歉啊！ (CNS10F)

(週末は塾があつて、午後4時に授業が終わるんだ。終わってからすぐに手伝いに行くよ。それでいい？ごめんね！)

JNS は、「用事がある」と一言で{理由}を説明するのに対し、CNS は“我周末姥姥要来，我好久没和姥姥一起吃饭了”(「週末祖母が来るんだ。祖母と一緒にご飯を食べるのは久しぶりだから」)、“我周末要去辅导班代课，下午4点才能完”(「週末は塾があつて、午後4時に授業が終わるんだ」)といった具体的な事例を列挙しながら{理由}を述べている。「用事がある」と「週末祖母が来るんだ。祖母と一緒にご飯を食べるのは久しぶりだから」、「週末は塾があつて、午後4時に授業が終わるんだ」という{理由}の関係は、Langacker(2008)の概念で説明すれば<事態解釈>の「スキーマ化」

<sup>29</sup> 下線は筆者によるものであり、分析で特に着目した部分である。以下同様。また、特に断らない場合、中国語の例文の訳文も筆者によるものである。

と「精緻化」に当たる。つまり、「用事がある」という表現は、「週末祖母が来るんだ。祖母と一緒にご飯を食べるのは久しぶりだから」、「週末は塾があつて、午後4時に授業が終わるんだ」ことのスキーマ化した記述であるのに対し、視点を変えれば、「週末祖母が来るんだ。祖母と一緒にご飯を食べるのは久しぶりだから」、「週末は塾があつて、午後4時に授業が終わるんだ」ことは、「用事がある」の精緻化した表現であり、具体的な記述となる。“As representation of conventional patterns, schemas provide the basis for assessing linguistic well-formedness”(「スキーマは、慣習化されたパターンの表示として機能し、言語的に適切であると評価するための基盤を規定している」)(Langacker 2008: 57 [山梨監訳 2011: 73])ため、「用事がある」あるいは「予定がある」というスキーマ化の{理由}は日本語に慣習化されており、使用されやすいと考えられる。

{理由}を述べていない調査協力者を除くと、JNSのほとんどはスキーマした表現「用事がある」(JNS7F、JNS13F、JNS17F、JNS18F)、「予定がある」(JNS8F、JNS12F、JNS15F、JNS19F)で理由を述べる。一方、CNSのほとんどは精緻化した表現で理由を述べる。その表現は以下の通りである。

- ・“这周末我一个老同学要来”(「今週末付き合いが長いクラスメートが来る」)(CNS3M)
- ・“周末我恰好有个重要的活动需参加”(「あいにく週末に参加しなければならない大事な活動がある」)(CNS4M)
- ・“下午老板找我讨论”(「午後に先生との相談がある」)(CNS6M)
- ・“这周有很重要的社团活动必须得参加”(「週末に参加しなければならない大事なサークルがある」)(CNS8F)
- ・“这周末有课啊”(「週末に授業がある」)(CNS13F)
- ・“我周末要开会”(「週末に会議がある」)(CNS17F)
- ・“这个周末我得准备考试”(「週末に試験の準備をしなければならない」)(CNS19F)

本分析により、＜事態解釈＞という認知の営みにおける日本語(「スキーマ化」)と中国語(「精緻化」)の違いが、{理由}の言語構造に対して重要な役割を果たしていることが分かる。



また、{理由}の言語表現には程度副詞の使用が頻繁に観察された。中国語では依頼を断る際に、(7)の下線部で示したように、程度の高さを表す副詞“很/太”(「とても」)が使用されている。

(7) a. 周末已经有很多安排了, 估计没有时间去帮你了。 (CNS05F)

(週末とてもたくさんの用事があって、手伝う時間はないかもしれないよ。)

b. 我需要考等级证书, 时间太紧张, 不好意思! (CNS11M)

(試験のため、時間がとてもきついから、ごめん!)

山岡(2019)は、ポライトネスの原理から派生した「配慮表現の原理」を提唱した。山岡(2019: 57)によると、「ポライトネス原理のうち、負担と利益にかかわる気配りの原則と寛大性の原則には、反比例的な原理である『配慮表現の原理』が存在する」。それは表 3-4 の通りである。

表 3-4 負担と利益に関わる配慮表現の原理(山岡 2019: 57) (表 2-2 再掲)

	③ ポライトネスの原理	④ 配慮表現の原理
(A) 気配りの原則	(a)他者の負担を最小限にせよ	(a)他者の負担が大きいと述べよ
	(b)他者の利益を最大限にせよ	(b)他者の利益が小さいと述べよ
(B) 寛大性の原則	(a)自己の利益を最小限にせよ	(a)自己の利益が大きいと述べよ
	(b)自己の負担を最大限にせよ	(b)自己の負担が小さいと述べよ

しかし、(7)における中国語の理由の述べ方は、配慮表現の原理(B②-b)「自己の負担が小さいと述べよ」の原則に反する。つまり、(7)においては、中国語は“周末已经有很多安排了”(「週末とてもたくさんの用事があって」)、“时间太紧张”(「時間がとてもきついから」)の部分で、高い程度を表す副詞を用いて「自己の負担が大きい」ことを強調している。それは、主観的な判断によって「行かない」のではなく、客観的事実としての「行けない」ことの説明である。つまり、断る際に自分がいかに大変な状況にあるかを説明し、断らざるを得ない客観的な理由を相手に伝えることによって、誤

解されないように配慮を示すという中国人の配慮心理が働いていると考えられる。

一方、副詞の「ちょっと」は日本語で好まれる表現としてよく知られている。断り表現でも、一定程度以上に慣習化されて使用されている。例えば、

(8) a. 今週末はちょっと用事があるから行けない。ごめんね！ (JNS05F)

b. 今週末はちょっと先約があつて…。それ以降の〇〇日なら大丈夫だけど…

どう？<sup>30</sup> (JNS20F)

山岡(2019)によると、日本語の「ちょっと」は本来持つ程度副詞の低程度の意味以外に、異なる二次的用法として対人配慮を表す用法があり、それは原義が完全に喪失して配慮機能に慣習化した用法である。原義から原義の喪失までのプロセスを、「①非配慮」→「②配慮拡張」→「③配慮特化」として図 3-1 のように示している。

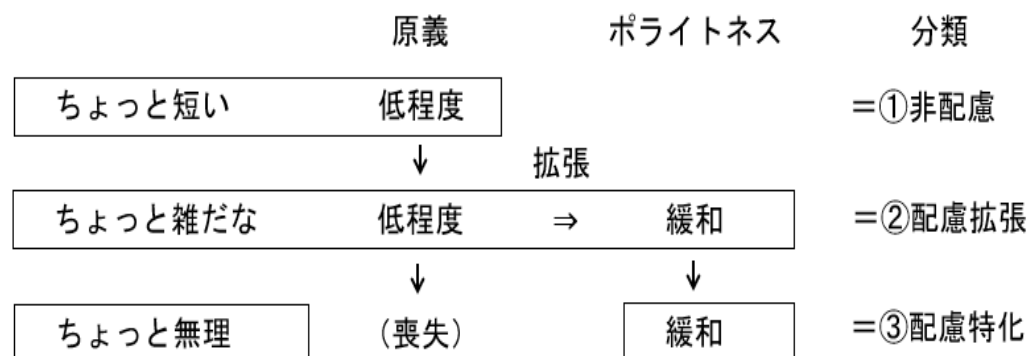


図 3-1 配慮表現「ちょっと」における原義とポライトネスの関係(山岡 2019 : 41)

まず、「ちよつと短い」における「ちよつと」は、低程度を表す本来の語義として使われる。ポライトネス機能は発生しないため、①非配慮に当たる。次に、「ちよつと雑だな」における「ちよつと」は、本来の低程度の意味を有したまま緩和というポライトネス機能に拡張し、相手の NF を脅かす《非難》の発話状況で相手との摩擦を緩和する配慮を動機づけとして用いられる。原義が生きたままポライトネスによる緩和の機

<sup>30</sup> 依頼された日に手伝いに行けないという意思を表明するため、「断り」として取り扱った。

能が託されたため、②配慮拡張となる。さらに、こうした緩和機能だけが残って慣習化し、原義であった低程度の意味は完全に喪失し、配慮機能に特化してある種の定型表現となった用法が、《断り》の発話状況で「ちょっと無理」における「ちょっと」である。つまり、(8)の「ちょっと用事がある」、「ちょっと先約があつて…」における「ちょっと」は、低程度の原義は完全に喪失し、断る際に相手との摩擦を緩和し、一定程度以上に慣習化された配慮表現として使われるわけである。原義が喪失して緩和の機能だけを担っているため、③配慮特化となる。

### 3.2.2.3 「断り」の【終結部】の意味公式の使用状況

伊藤(2010 : 39)は、「対人関係の不均衡を修復しようとするなら、発話の終え方に十分な配慮が必要である」と指摘しているように、【終結部】は対人関係を構築・維持するための重要な部分であると考えられるため、本節では日中の「断り」の【終結部】に使われている意味公式の種類と使用割合を示し、分析する。

表 3-5 は、「断り」の【終結部】に使われている意味公式の使用頻度(人数)と割合(%)を示したものである。なお、意味公式は出現回数が多い順に並べてあり、「／」は出現回数が同じであることを示している。つまり、{将来約束}、{条件}、{詫び} はそれぞれ 15%の割合で使用されている。{代案提示} と {理由} はそれぞれ 10%の割合で使用されている。{非難}、{信念}、{補償表明} はそれぞれ 5%の割合で使用されている。

表 3-5 【終結部】に使われている意味公式の使用頻度(人数)と割合(%)

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	7 位
日本語	{理由} 7(35%)	{結論} 6(30%)	{詫び} 4(20%)	{条件} 2(10%)	{代案提示} 1(5%)	∅	∅
中国語	{結論} 4(20%)	{将来約束}／{条件}／{詫び} 各 3(15%)			{代案提示}／{理由} 各 2(10%)		{非難}／{信念}／{補償表明} 各 1(5%)

図 3-2、図 3-3 は、意味公式別の使用人数をその全体に占める割合として図示したものである。

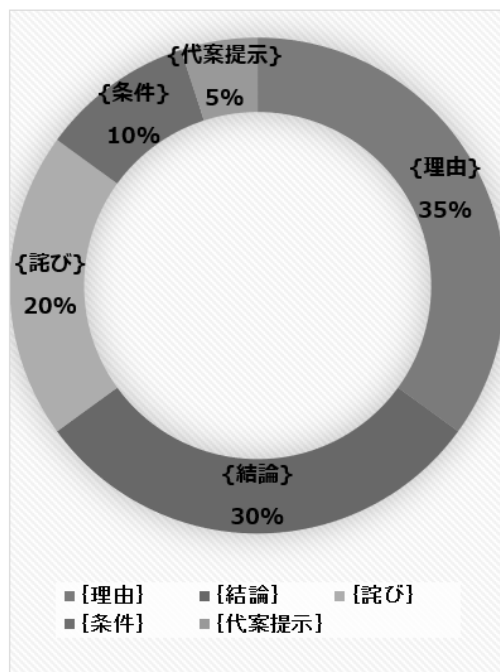


図3-2 日本語の断り表現の【終了部】の意味公式の種類と使用割合

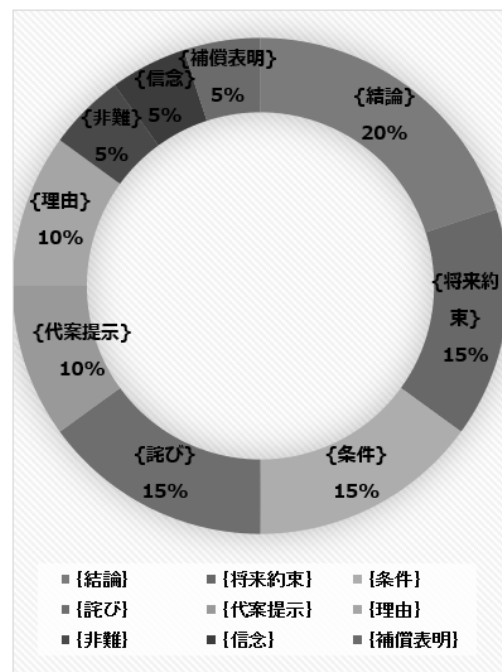


図3-3 中国語の断り表現の【終了部】の意味公式の種類と使用割合

図 3-2 と図 3-3 から分かるように、「断り」の【終結部】の意味公式の種類は日本語では 5 種類、中国語は 9 種類で、中国語が日本語より使用する言語的ストラテジーの点で多様性に富んでいる。日本語の「断り」の【終結部】では、{理由} と {結論}、{詫び} の意味公式が大きな割合を占めており、それらのストラテジーで断りの発話を終えたのは 85%である一方、中国語では 45%にとどまった。その代わりに中国語では 55%が {将来約束} か {条件}、{代案提示} の意味公式によって断りの発話を終えている。

3.2.2.1 節の「断り」において意味公式全体の使用状況と、本節の「断り」の【終結部】の意味公式の使用状況に対する分析の結果から、中国語は日本語よりも、多様且つ複雑な言語的ストラテジーを使用して配慮を行っていることが分かる。{将来約束} や {条件}、{代案提示} などの意味公式を使用することによって断りがもたらす相手の PF への侵害を軽減することができる。そこに熱意を示すという相手

の PF に働きかけることに重点が置かれている中国語の対人関係の姿勢としてポジティブ・ポライトネスが見られる。それに対して日本語の「断り」の【終結部】には、主に {理由}、{結論}、{詫び} の3つの意味公式に集中している。{将来約束} や {条件}、{代案提示} などの意味公式の不使用によって相手の NF を守ることができる。そこに相手との距離を保持するという相手の NF に働きかけるということに重点が置かれている日本語の対人関係の有様としてネガティブ・ポライトネスを示している姿勢が見られた。

本節では、日中の「断り」の【終結部】に使われている意味公式の使用状況を分析した。次節では、【終結部】の特徴的な要素である {将来約束}、{条件}、{代案提示} の3つの意味公式の使用状況を観察する。

### 3.2.2.4 {将来約束} {条件} {代案提示} の意味公式の使用状況

まず、{将来約束} の意味公式の使用状況を見る。今回の調査では、JNS は {将来約束} を1回も使用していないのに対して、CNS は断った後に補償として {将来約束} のストラテジーを使用する。例えば、

- (9) a. 对不起，我周末姥姥要来，我好久没和姥姥一起吃饭了，实在抱歉，

{詫び} {理由} {詫び}

下次有什么需要帮助一定去。 ((6a)の再掲) (CNS01M)

{将来約束}

(ごめん、週末祖母が来るんだ。祖母と一緒にご飯を食べるのは久しぶりだから、本当にごめん。次の機会には絶対／必ず手伝いに行くよ。)

- b. 这周末我一个老同学要来，恐怕不能帮你忙啦，回头你收拾新家的时候一定去帮

{理由} {結論} {将来約束}

忙哈。 (CNS03M)

(今週末付き合いが長いクラスメートが来るから、手伝いに行けないと思う。あとで家を片付けるときには絶対／必ず手伝いに行くよ。)

B & L(1987)のポライトネス理論は、15 種類の PPS を挙げている。そのうち、PPS10 : Offer, promise(「提供せよ、約束せよ」)は、「何らかの FTA の潜在的脅威を和らげるため、S は H と協力関係を強調する別の方法を選ぶこともある」(田中他訳 2011 : 172)と説明されている。(9)の下線部の“下次有什么需要帮助一定去”(「次の機会には絶対手伝いに行くよ」)、“回头你收拾新家的时候一定去帮忙哈”(「あとで家を片付けるときには絶対手伝いに行くよ」)のような将来約束には、断りがもたらすフェイスへの侵害を補償するとともに、相手との人間関係が切れないように積極的に維持・発展したいという配慮が窺われる。そして、その言語表現に“一定”(「絶対／必ず」)という副詞を加えることにより、協力したいという約束の決意を強調し、断るための決まり文句あるいは社交辞令ではなく実質的な「埋め合わせ」行為として積極的に相手を手伝おうとする意志の表明であると見なすことができる。生越(2012a : 179)は、「他の人を紹介したり、別の機会に手伝うことを約束したりすること」を、「断りの『埋め合わせ』をしようとしている」と捉える。「単に謝罪や理由を述べるだけでなく、『埋め合わせ』を表明することは、相手との良好な関係を維持したいという意志を明確に示すものであり、相手に対しより『配慮』した態度」(同上 : 179)と指摘している。しかし、今回の調査では、日本語では{将来約束}の意味公式は1回も使用されなかった。

PPS15 : Give gifts to H(goods, sympathy, understanding, cooperation)(「贈り物(品物、共感、理解、協力)を聴者に贈与せよ」)は、(10)における“不然晚上我给你带过去好吃的”(「なんなら夜美味しいものでも持ってそっちに行くけど」)のような「相手に物を奢る」という{補償表明}としての言語的ストラテジーが該当する。

(10) 我这周末有事，不然晚上我给你带过去好吃的?

(CNS16F)

{理由}

{補償表明}

(今週末は用事があるから、なんなら夜美味しいものでも持ってそっちに行くけど。)

蒙(2010 : 15)は、「中国人は相手との親しい関係を維持するため、断りの補償として「相手に物を奢る」というストラテジーを使用する」と述べている。(11)、(12)

は蒙(2010)の調査で得られた例である。

<仲のいい友達に英訳のチェックを頼まれて断る場合>

(11) 下次见面我请你吃冰棍做弥补啊。 【CCC14】 【女：25 歳】

(その代わりに、今度会う時アイスクャンデーを奢るよ。)

<親しい上司に休日出勤を頼まれて断る場合>

(12) 我今天晚上努力一下，把事情争取今天做完，明天的时间请您去喝酒，怎么样？

【CCB33】 【男：24 歳】

(今晚ちょっと努力して今日中に全部終わらせようと思います。代わりに、明日  
お酒を奢ります。いかがでしょうか。)<sup>31</sup>

蒙(2010 : 15 例(20)、(22))

“身在中国，要想关系好，吃吃请请不可少。”<sup>32</sup> (「中国でよい人間関係を作るならば、奢ることは決して欠かせないものである。」)(張 2012 : 8 [日本語訳は筆者による]) という話はよく知られている。中国人は、断った後、お詫びの気持ちを込めて実質的な「埋め合わせ」行為として「相手に物を奢る」という申し出の言語的ストラテジーを使用することによって配慮を示す意識がある。今回の断りによるフェイスへの侵害の補償のみではなく、相手との関係が切れないように、今後さらに発展させたいという配慮を一層重要視する。一方、「日本人にとって、話題と関係ないことで補償をする（奢るなど）は失礼に当たる気がします」(JNS15F)というフォローアップ・インタビューの結果からは、断る際に中国人が好意で使用している「相手に物を奢る」というストラテジーは日本人に許容されないリスクがあることが窺われる。

<sup>31</sup> 蒙(2010 : 15)がつけた日本語訳である。しかし、「今晚頑張って今日中に仕事を全部終わらせるつもりです。お詫びに明日お酒を奢ります。いかがでしょうか」と訳したほうがより自然な日本語であると考えられる。

<sup>32</sup> 原文は次の通りである。“吃请之中出关系，懂得吃请文化，你就掌握了中国式人际关系的钥匙。所以，身在中国，要想关系好，吃吃请请不可少。” (「奢ったり奢られたりする中で関係が作られる。奢る文化をうまく理解できれば、中国式の人間関係を築くことの鍵を握ることができる。そのため、中国で、よい人間関係を作るならば、奢ることは決して欠かせないものである。」)(張 2012 : 8 [日本語訳は筆者による])

次に、{条件} の意味公式の使用状況を見る。今回の調査では日中ともに {条件} の言語的ストラテジーを使用しているが、その意味内容やそこに現れるポライトネスには質的な差異が見られる。

(13) a. ごめんね、その日は予定があるから行けないんだ。他の日なら大丈夫だと思う。

(JNS08F)

{詫び}                      {理由}                      {結論}                      {条件}

b. 今週末はちょっと先約があつて…。それ以降の〇〇日なら大丈夫だけど…どう？

(JNS20F)

{理由}    {条件}

(14) a. 我周末有事。如果忙完，我尽量过去帮你。 (CNS07M)

{理由}                      {条件}

(週末は用事がある。もし終わったら、できるだけ手伝いに行くよ。)

b. 不好意思啊，我周末有别的安排了。要不我这几天帮你？ (CNS15F)

{詫び}                      {理由}                      {条件}

(ごめんね。週末はすでに予定があるから。それとも、この二三日手伝うのはどう？)

c. 我周末要开会，开完会我就过去。 (CNS17F)

{理由}                      {条件}

(週末はミーティングがあるんだ。ミーティングが終わったら行くよ。)

B & L(1987)のポライトネス理論の 15 種類の PPS には、PPS9: Assert or presuppose S's knowledge of and concern for H's wants(「話者は聴者の欲求がわかっていて、そして気遣っていると述べよ、もしくは、それを前提とせよ」)が挙げられている。{条件} は相手の欲求を満たす気遣いのため、ポジティブ・ポライトネスである。{条件} の意味内容から見れば、日本語では断りの理由を述べてから、「他の日」(13a)、「それ以降の〇〇日」(13b)のように「別の日」を関係修復の条件として出している。中国語では、日本語と同様にまず断りの理由を述べた後、「もし終わったら、できるだけ手伝いに行くよ」(14a)、「ミーティングが終わったら行くよ」(14c)のように、「依頼された日の用事



が終わる」を関係修復の条件として出している。断るものの何とかして手伝いたいという気持ちが出ている。中国語の {条件} の意味内容は、予定があるにも関わらず最大限に手伝ってあげようという相手への好意を表現することで、その期待や願望に添えたい仲間意識を強調している。「それとも、この二三日手伝うのはどう？」(14b)という「別の日」を条件として出すことも、「他の日」(13a)、「それ以降の〇〇日」(13b)という言い方よりは具体性があるため、より誠意や親切心を表しているのではないかと考えられる。

他にも、【終結部】ではないが、中国語のデータでは(15)、(16)のような {条件} の意味公式の使用が見られる。(15)では、{条件} の言語表現に“一定”(「絶対／必ず」)という副詞の使用により、積極的に相手を手伝おうとする意志が強調される。(16)では、(14a)と(14c)と同様に、「終わってからすぐ手伝いに行くよ。それでいい？」のように、「依頼された日の用事が終わる」を関係修復の条件として出している。

(15) 我可能没有时间。这样吧，有时间我一定去，老友搬家我也不太好缺席，对吧。

(CNS09F)

{理由}                      {条件}                      {信念}

(時間がないかもしれない。時間があったら絶対行く、それでいい？付き合いが長い友人だから、引越しに手伝いに行かないのはよくないでしょうね。)

(16) 我周末要去辅导班代课，下午4点才能完。下课后我立马赶过去帮你，好吗？抱歉啊！((6)再掲)

(CNS10F)

{理由}                      {条件}                      {詫び}

(週末は塾があつて、午後4時に授業が終わるんだ。終わってからすぐに手伝いに行くよ。それでいい？ごめんね！)

本分析により、JNS と CNS はともに相手の PF を配慮し、ポジティブ・ポライトネスの断り方として {条件} を出している。その {条件} の内容を見ると、JNS の {条件} と比べて、CNS の {条件} には「依頼された日の用事が終わる」という具体的な内容や“一定”(「絶対／必ず」)という強い意志を表す言語表現が含まれているため、よりポジティブ・ポライトネスを表していることが分かる。

最後に、{代案提示}の意味公式の使用状況を見る。「断り」における代案提示(statement of alternative)とは、問題解決の方法として他の方法を提示する方略である(藤原 2004)。今回の調査では、日中ともに {代案提示} のストラテジーを使用しているが、上述した {条件} の意味公式と同様に、その {代案提示} の意味内容やそこに現れるポライトネスには質的な差異が見られる。

(17) ごめん、今週末は予定があるから、他の子にお願いしてほしい。 (JNS12F)

{詫び}                      {理由}                      {代案提示}

(18) a. 真不好意思，周末我恰好有个重要活动需参加，要不我替你联系其他人？

(CNS04M)

{詫び}                      {理由}                      {代案提示}

(本当にごめん。週末はあいにく大事な活動に参加しなければならないから、代わりに私が他の人に連絡するのはどう／どう思う？)

b. 不好意思啊，我有别的事了，我帮你问问其他朋友吧。 (CNS18F)

{詫び}                      {理由}                      {代案提示}

(ごめんね、他の用事があるから、代わりに私が他の友達に聞くのはどうかな／どうでしょうか。)

{代案提示} の意味内容から見れば、中国語では「依頼事を受けた側が自分自身の力で依頼内容を実現できない場合、自分自身の『関係(グワンシー)』にさらに依頼していき、面子(メンツ)にかけて実現していく」(沖他 2018 : 85)。「中国社会では、互惠関係にある人を『関係(グワンシー)』と呼ぶ」(同 : 84)。積極的に相手に依頼し、相手は自身の面子(メンツ)にかけて実現していくという繰り返しの中で、「関係(グワンシー)」は情緒的にも結ばれていく(薛・坂本 2014)。“要不我替你联系其他人？”(「代わりに私が他の人に連絡するのはどう／どう思う？」)、“我帮你问问其他朋友吧。”(「代わりに私が他の友達に聞くのはどうかな／どうでしょうか。」)のように、PPS9 : Assert or presuppose S's knowledge of and concern for H's wants(「話者は聴者の欲求がわかっていて、そして気遣っていると述べよ、もしくは、それを前提とせよ」)に基づいて実質的な「埋め合わせ」行動を行い、最大限にポライトネ

スを表現している。一方で、「日本社会では、相手からの依頼を実現するのは、受けた当人までであることが多く、自分ができないことをさらに他者に頼んで実現させる場合のほうが少ない」(沖他 2018 : 85)ため、「他の子にお願いしてほしい」という言い方のように、相手の意志に干渉しないNPSを使用している。

{代案提示}の言語形式から見れば、日本語の「他の子にお願いしてほしい」における「～ほしい」は、相手からの反応を要求せず自分の願望を表出する陳述文である。中国語の{代案提示}の提示を行っている言語形式は、相手からの反応を引き出すための疑問文である。“要不我替你联系其他人?”における“要不～?”(「～はどう／どう思う?」)と“我帮你问问其他朋吧。”における“～吧。”(「～はどうかな／どうでしょうか。」)で表される。疑問文には様々な機能があり、また談話の種類によっても働きが異なる。これらの代案提示では、話し手が自分の意志・思いつきを案として示して、聞き手の意見や賛同、確認などの反応を求めるという機能が中心である。しかし、一方的に勧めるというより、この{代案提示}を受けるかどうかという選択の余地を相手に与える表現は、相手の負担を軽減する効果がある丁寧な配慮に当たり、相手の領域を侵害しないというNPS4 : Minimize the imposition, Rx(「負担を最小化せよ」)に基づき、最大限の配慮を表現している。

### 3.2.3 断る側のストラテジーのまとめ

以上、断る側の視点から、言語行動の意識・発話文レベルにおける日中両言語の断り発話を比較した。その結果、断る側に使われるストラテジーは認知や文化によって差異があり、日中間に異なる断りの意識が働いていることが分かった。

まず、日中両言語ともに{詫び}{理由}{結論}を高い頻度で使用しているが、中国語は日本語よりも直接的な断りを回避する傾向がある。また、断りの理由を説明する際に、CNSは「精緻化」という＜事態解釈＞を行うことにより言語構造を成り立たせ、事例を挙げつつ断りの理由を詳述する傾向がある。「自己の負担が大きい」という配慮の原理を援用し、程度の高さを表す副詞“很”、“太”(「とても」)を使用して自分がいかに大変な状況にあるかを相手に伝えることによって配慮を示している。一方、JNSは「スキーマ化」という＜事態解釈＞を行うことにより言語構造を成

り立たせ、「ちょっと用事／予定がある」のように断りの理由を簡潔にする傾向がある。低程度 of 原義が完全に喪失し、一定程度以上に慣習化された配慮表現として副詞「ちょっと」を使用して理由説明を行っている。

次に、断りの【終結部】においては、CNS は {将来約束}、{条件} や {代案提示} などの意味公式を使うことによって、相手の PF に働きかけるストラテジー、つまり実質的な「埋め合わせ」行動が積極的に提案される。そこには、CNS の相手との親和性を増す「近づく配慮」が示される。それに対して、JNS は {理由} と {結論}、{詫び} の 3 つの意味公式で断りの発話を済ませ、相手の PF に働きかけるストラテジー、つまり実質的な「埋め合わせ」行動はほとんど提案されていない。そこには、相手とのほどよい距離を保つ「近づかない配慮」が示される。言語表現においては、CNS は“一定”(「絶対／必ず」)という副詞を使用し、相手を助けたいという気持ちを強調することによってポジティブ・ポライトネスの配慮を示している一方で、“要不～?”／“～吧。”(「～はどう?」、「～はどうか／どうでしょうか。」)という疑問形で、相手の意向を尋ねながら代案を提供し、それを引き受けるか否かという決定権を相手に委ねるといったネガティブ・ポライトネスの配慮も観察された。

「配慮」の示し方の観点から以上の結果をまとめると、断る側のストラテジーについて、JNS は「スキーマ化」された理由を述べる傾向があり、実質的な「埋め合わせ」行動はほとんど提案されていない。それは NF に配慮したネガティブ・ポライトネスが優先された「配慮」の示し方であり、「近づかない」という配慮の属性が反映されている。それに対して、CNS は「精緻化」された理由を述べる傾向があり、実質的な「埋め合わせ」行動が積極的に提案されている。それは PF に配慮したポジティブ・ポライトネスが優先された「配慮」の示し方であり、「近づく」という配慮の属性が反映された結果ということが分かった。

### 3.3 断られる側の意識

3.2 節では、断る側のストラテジーについて分析した。JNS と CNS の断る側のストラテジーには、{詫び} {理由} {結論} の意味公式が典型的に用いられたことと、JNS に比べて、CNS は【終結部】で、{将来約束} や {代案提示}、{条件} などの

意味公式の使用が特徴的であった。この結果を受けて、本節では、断る側の断り方が断られる側にどのような印象で受け取られるのかを明らかにする。

3.2 節の調査では JNS の断る側には {将来約束} の意味公式は 1 回も使用されていないため、本節の断られる側（依頼側）の意識調査には {代案提示} と {条件} の 2 種類の意味公式の使い方に絞り調査する。断られる側の視点から、JNS と CNS にとって、ポジティブ・ポライトネスの断り方とネガティブ・ポライトネスの断り方ではどちらが受け入れやすいかという、断られる側の「断り」に関する日中言語意識の在り方を明らかにする。無論、言語行動には個人差があり、断られる側が断りをどのように受け止めるかは人によって違う点があることは否めない。しかし、複数の調査対象者に対して意識調査を行うことにより、ある程度の傾向を見出すことができると思う。

### 3.3.1 研究方法

本節では、意識調査紙の作成、データの整備方法を述べる。

#### 3.3.1.1 調査方法

CNS と JNS の断り方におけるポライトネスの示し方の差異は、{代案提示} と {条件} の意味公式に最も反映されると考えられる。そのため、3.2 節で収集した「親しい友人に引越しの手伝いを頼まれて断る」という場面における CNS、JNS の「断り」の発話例を {代案提示} と {条件} の意味公式から分類し、2 つのセットに分けて意識調査(付録Ⅲ 意識調査票参照)を行った。

セット 1 は、{代案提示} の使い方に対する母語話者の受け入れの傾向に関する調査で、{代案提示} の使い方によって 3 つの選択肢を設定した。

- a. ごめん、その日はもう用事があるって…
- b. 本当にごめん。週末はあいにく大事な活動に参加しなければならないから、代わりに私が他の人に連絡するのはどう？
- c. ごめん、今週末は予定があるから、他の子にお願いしてほしい。

a は、{代案提示} 無しの断り方である。b は、「代わりに私が他の人に連絡するのはどう？」のように、相手の PF を配慮し積極的に自分から働きかける内容の {代案提示} が含まれるポジティブ・ポライトネスの断り方である。c は、「他の子にお願いしてほしい。」のように、相手の NF を配慮し自分は回避する内容の {代案提示} が含まれるネガティブ・ポライトネスの断り方である。

セット 2 は、{条件} の使い方に対する母語話者の受け入れの傾向に関する調査で、{条件} の使い方によって 3 つの選択肢を設定した。

- a. 週末は塾があって、午後 4 時授業が終わるんだ。終わってからすぐに手伝いに行くよ。それでいい？ごめんね！
- b. ごめんね、その日は予定があるから行けないんだ。他の日なら大丈夫だと思う。
- c. 今週末はちょっと用事があるから行けない。ごめんね！

a は、「依頼された日の用事が終わる」を {条件} にした、相手の PF を配慮した、ポジティブ・ポライトネスの断り方である。b は、「他の日」を {条件} にした、a と比べて相対的に相手の NF を配慮した、ネガティブ・ポライトネスの断り方である。c は、{条件} 無しの断り方である。異なる社会文化背景を持つ CNS と JNS は、選択肢<sup>33</sup>のような正反対なポライトネスの示し方や対人関係のあり様に対して、受け入れの傾向が異なると考えられる。

### 3.3.1.2 データの収集

2017 年 8 月に、CNS20 人(男性 8 人、女性 12 人で、平均年齢は 29.9 歳)を対象に、中国語による意識調査(付録Ⅲ—1 中国語母語話者への意識調査票参照)を行った。そして、JNS20 人(男性 4 人、女性 16 人で、平均年齢は 30.9 歳)を対象に、日本語による意識調査(付録Ⅲ—2 日本語母語話者への意識調査票参照参照)を行った。3.2

---

<sup>33</sup> 列挙した選択肢はすべて 3.2 節の調査で得られたデータであるが、調査協力者にとって自然な断り方かどうかについて検討する余地がある。また、a、b、c の選択肢をいずれも使わない場合も考えられるため、それらは今後の課題とする。

節で行われた DCT 調査と同様に「週末に引越しの手伝いを依頼する」という場面を設定した。調査協力者<sup>34</sup>に対し、親しい友人にその依頼を断られた際の断り発話(上述のセット 1 とセット 2 と、それらの a、b、c の 3 つの選択肢)を受け入れやすい順に並べるように指示し、またそのように並べた理由を書くように指示した。この質問は、断られる側として相手の断り方をどう感じるかを尋ねたものである。その得られた回答から、相手の断り方をどう受け止めるかという断られる側の意識の一部を知ることができる。

### 3.3.2 結果と考察

次の表 3-5 と表 3-6、表 3-7、表 3-8 は調査協力者の回答を整理した結果で、CNS と JNS が受け入れやすい順に並べた配列のパターンとその占める割合を示している。

#### 3.3.2.1 {代案提示} の使い方に対する母語話者の受け入れの傾向

{代案提示}の使い方に対する CNS の調査結果を表 3-6 に示す。表内の記号「>」は、受け入れやすい順位を示す。例えば、「b>c>a」は、b は最も受け入れやすい断り方で、a は最も受け入れ難い断り方の表明である。

表 3-6 CNS の調査結果

番号	配列のパターン	人数(人)	比率(%)
①	b>c>a	9	45
②	b>a>c	7	35
③	a>b>c	4	20

表 3-6 から分かるように、CNS には、受け入れやすい順に並べた配列のパターン

<sup>34</sup> 調査協力者の内訳は、付録Ⅳを参照されたい。20 代、30 代の人を主な調査協力者として調査を行ったが、できるだけ年齢層の広いデータを得るため、40 代、50 代の人も含めた。しかし、20 代前後と比較すると、30 代以降の場合「引越しの手伝いを頼む／頼まれる」という行為自体が減少する可能性がある。そのため、調査協力者の選定について再考する余地がある。

は 3 種類ある。「 $b > c > a$ 」が最も多く選択され、次いで「 $b > a > c$ 」、「 $a > b > c$ 」は最も少なかった。

20 人のうち 16 人(80%、①+②)は  $b$  を最も受け入れやすい断り方として選んでいる。主な理由は以下の通りである。

- ・『代わりに私が他の人に連絡するのはどう』という代案は手伝いたいという誠意が感じられる」(CNS3M)
- ・「直接的な拒絶ではなく、同時に解決の方案を提供してくれて、手伝いたいという誠意が感じられる」(CNS9F)
- ・「まず手伝えないことに陳謝の意を深く表明して、それに理由を詳しく説明し、また『代わりに私が他の人に連絡するのはどう』という代案は心から手伝いたいという気持ちが感じられて、手伝いに来られなくても、その断りが理解できる」(CNS19F)

残りの 13 人にも、これらと類似した理由が見られた。

最も受け入れ難い断り方として  $c$  を選んだ人は 11 人(55%、②+③)で、 $a$  を選んだ人は 9 人(45%)であり、それほど差が見られなかった。「 $a$  と  $c$  の意味の違いをあまり感じない」という理由(CNS3M、CNS4M)にも裏付けられている。 $a$  が  $c$  より受け入れやすいと回答した理由は、以下の通りである。

- ・「語感からいうと、 $a$  は婉曲的で断りを言いにくい感じがし、 $c$  は硬い」  
(CNS2F、CNS11F、CNS14M)
- ・「自分が望ましくないことは人には押し付けない」(CNS10M)
- ・「親しい友人として手伝ってくれないことはまだしも、他の人に聞かせるのは、  
(自分の依頼が)放り出されたような感じがして気持ち悪い」  
(CNS13F、CNS19M)

一方、 $a$  が最も受け入れ難いと回答した理由は以下の通りである。



- ・「ただ時間がないと言われて、大事にされていない感じがする」(CNS5F)
- ・「cは少なくとも他の解決方法を言ってくれたので、断りの感をを柔らかくすることができる。aは最も直接的で硬い表現である」(CNS7F、CNS17F、CNS20M)

その他、CNS3MとCNS4Mは「aとcの意味の違いをあまり感じない」と回答したが、aが最も受け入れ難い断り方として選択した。CNS1M、CNS9M、CNS15Fは、aを最も受け入れ難い断り方として選択したが、理由については言及しなかった。

4人(20%)が「a>b>c」を選んでいる。その理由は以下の通りである。

- ・「親しい友人なら、直接断った方がよい。理由を説明しすぎるとかえってよそよそしい感じがする」(CNS6F、CNS16M)
- ・「理由をくどく説明するのは要らない。助けてもいいし、助けなくてもいい」(CNS12F)
- ・「aは事実を言い、直接断っているのでもいい。bは理由を十分に説明してくれるのはいいが、他の人に聞いてもらう必要はない。cは冷たくて気持ち悪い」(CNS18F)

このことから、ごく一部の中国人は、親しいほどはっきりした断り方が最もよいと考えていることが分かる。

本調査結果により、CNSには、断りの理由を詳しく説明されることで手伝えないことの真実性を感じることで、また断る側から何か相手にしてあげるというPFに配慮した内容の代案を提示された断り方を好むことが分かる。このような回答者の意識から、依頼を断られた場合でも、手伝いたいという断る側の「誠意」や親切心が重要視されることが窺える。その一方で、理由説明無しに、回避する内容の代案を言われた場合、大事にされなかった印象を受け、そのような回答は受け入れ難く、時として{代案提示}無しより人間関係に悪い影響を与えるリスクがある。本調査では、断られる側として、CNSはポジティブ・ポライトネスの断り方を受け入れやすく、ネガティブ・ポライトネスの断り方に賛同できないということが分かった。

次に、{代案提示} の使い方に対する JNS の調査結果を見る。

表 3-7 JNS の調査結果

番号	配列のパターン	人数(人)	比率(%)
①	$a > c > b$	8	40
②	$b > a > c$	6	30
③	$a > b > c$	3	15
④	$c > b > a$	2	10
⑤	$c > a > b$	1	5

表 3-7 から分かるように、JNS は配列パターンは 5 種類があり、CNS の 3 種類の配列パターンより多様である。「 $a > c > b$ 」が最も多く選択されたが、それを選んだ CNS は 1 人もいなかった。「 $b > a > c$ 」を選択したのは 6 人で、「 $a > c > b$ 」を選んだ人より 2 人が少なかった。「 $a > c > b$ 」と「 $b > a > c$ 」の区別は、選択肢  $b$  の位置の違いである。20 人のうち、6 人(30%)は  $b$  を最も受け入れやすい断り方として選択したのに対し、9 人(45%、①+⑤)は  $b$  を最も受け入れ難い断り方として選択した。この調査結果から、同じ文化的背景を持っていても、断り方の受け入れやすさの判断基準は正反対となり、そして、その割合はおおよそ半々ほどであることが分かる。

$b$  が最も受け入れやすいと回答した理由は、以下の通りである。

- ・「本当に申し訳ないと思っているのが伝わりやすい。他の人に連絡するという新しい案を提示している点も良い」(JNS1F)
- ・「断られても、相手が他の選択肢を提供してくれる」(JNS2F)
- ・「わざわざ他の人に連絡してくれることに好感を覚える」(JNS13F)
- ・「明確に理由を教えてくれた上に、代案も提示してくれたことで受け入れやすい」(JNS14M)

残りの 2 人は直接 {代案提示} について言及しなかったが、 $b$  が最も受け入れやすいと回答した理由は、以下の通りである。

- ・「cは『他の子に頼んで』というのが突き放されているような感じがする。bとaを比べると、行けない理由を説明しているbのほうが受け入れやすい」(JNS10F)
- ・「a. お手伝いしたいのだけれどどうしても予定を変更できない思いが相手に伝わる。b. 日本人の一般的な断りの言葉、はっきりとは言わなく何となく相手に推察して欲しい。c. 私の世代でははっきりと断る言葉を使わない。(親しい友人との間では)」(JNS19F)

その一方で、bが最も受け入れ難いと回答した理由は、以下の通りである。

- ・「あっさりしている方がいい」(JNS3F)、「わざわざ他の人に連絡を取ってもらうのも申し訳ないし、他の人との関係を壊すこと(無理を言うこと)への負担を感じる」(JNS7F)
- ・「そこまでしなくていい」(JNS9M)
- ・「代わりの人を探すことまで友人にやってもらうのは自分の引越しののに申し訳ない」(JNS12F、JNS17M)
- ・「自分の引越しで他人に面倒を掛けるのに、それを他者経由で更に第三者に依頼するという行動に抵抗がある。頼むのであれば、自分自身で直接頼みたい」(JNS18F)
- ・「理屈っぽい」(JNS11F、JNS15F、JNS16F)

また、bが最も受け入れ難いと回答しなかったが、以下のような否定的な意見もある。

- ・「丁寧だが、私が望んでいるかわからないことにまで言及するのは、踏み込みすぎているのではないかと思う」(JNS4F)
- ・「親切もしくははややおせっかいすぎて、そう言われても自分なら遠慮する」(JNS5F)

- ・「少し親切すぎる気がして負い目を感じてしまう。そして友人を介して他の人に頼むより直接自分で頼んだ方は対人関係がシンプルになりそう」(JNS20M)

20 人のうち過半数の人(11 人、55%、①+③)は a を最も受け入れやすい断り方として選んでいる。主な理由は以下の通りである。

- ・「あっさりしている方がいい／さっぱりしている」(JNS3F、JNS9M)
- ・「最も無難ではないかと感じる」<sup>35</sup>(JNS4F)
- ・「最も自然な断り方だと思う／一番一般的で受け入れやすい」(JNS5F、JNS12F)
- ・「言い切りの形になっていないため、こちらから『ダメなんだね。無理を言っごめんね……』と話を終えやすい」(JNS7F)
- ・「他の人の予定は分からないので、b や c の断り方はしません」(JNS8F)
- ・「親しい友人なので、こちらのお願いを重く受け止めずに軽く断ってくれた方が受け入れやすい」(JNS11F、JNS17M)

残りの 2 人ははっきりした理由を挙げなかったが、以下のように回答している。

- ・「親しい子だから、断られても何も不快でない。大事な活動に参加すると言われる必要もない」(JNS11F)
- ・「a と c はシンプルでいい。b は理屈っぽい」(JNS15F)

また、9 人(45%、②+③)は c を最も受け入れ難い断り方として選んでいる。CNS が挙げた理由と同様で、以下の通りである。

- ・「少し冷たい対応な気がする」(JNS1F、JNS13F)

<sup>35</sup> 三宅(2011 : 15)は、「言葉遣いがパターン化する傾向は、対人関係のとり方に安全性を求めることと無縁ではあるまい」と指摘した。「最も無難ではないかと感じる」という理由(JNS4F)から、対人関係の安全性を考慮して、「用事があつて…」という高度にパターン化された断りの形式が選ばれたのである。したがって、これも「最も自然な断り方」として JNS5F と JNS12F に選ばれたと考えられる。

- ・「何か投げられた感じがする」(JNS2F)、「ぶっくらぼうな感じがして、突き放されているように思ってしまう」(JNS4F、JNS10F)
- ・「余計な言葉に感じる」(JNS5F)
- ・「きつく聞こえる」(JNS8F)

その他、「私の世代でははっきりと断る言葉を使わない(親しい友人との間では)」(JNS19F)という理由が見られた。JNS14M はc を最も受け入れ難い断り方として選んだが、理由は言及しなかった。

本調査結果から、JNS は、「断ることによる迷惑」や「代案提示などで相手の選択・事情に踏み込むことの迷惑」を避けようとし、あっさり・さっぱりした断り方を好む傾向があることが分かる。このような回答者の意識から、相手から {代案提示} を積極的に提供してくれることを好意として受け止める JNS がいる一方、踏み込みすぎ、余計なお世話のように感じる JNS も多いことが窺える。本分析により、断られる側として、JNS はネガティブ・ポライトネスの断り方を受け入れやすく、ポジティブ・ポライトネスの断り方には賛同できない、ということが分かった。

### 3.3.2.2 【条件】の使い方に対する母語話者の受け入れの傾向

まず、{条件} の使い方に対する CNS の調査結果を表 3-8 に示す。

表 3-8 CNS の調査結果

番号	配列のパターン	人数(人)	比率(%)
①	a>b>c	17	85
②	a>c>b	3	15

表 3-8 で示されたように、CNS が受け入れやすい順に選択した配列のパターンは 2 つに分けられた。最も多く選択されたのは「a>b>c」(17 人、85%)で、極めて少ない人(3 人、15%)が「a>c>b」を選んだ。しかし、どちらのパターンを選んでも、CNS 全員は a を最も受け入れやすい断り方として選択した。

「a>b>c」を選んだ人は、以下のような理由を回答している。

- ・「a は自分が行けない理由を説明し、『終わってからすぐ手伝いに行く』という言い方に手伝いたいという誠意やが感じられたから、b の『他の日』の言い方より感じがいい」(CNS3F)
- ・「a は時間通りに手伝えない理由をはっきり説明し、それに自分の事が終わってからすぐ手伝いに来ることを言われて理解しやすい。b は手伝いはできるが、週末はダメだと言われて理解できる。c は助ける誠意があるかどうかは判断できない」(CNS9M)
- ・「a は事実を述べ、遅くても手伝いに来るといわれて誠意が感じられ、親切心からくる言葉は嬉しい。b は理解できる。c の『ちょっと用事がある』というのはぶっきらぼうで、親しい友人の感じがしない」(CNS10F)
- ・「a は用事があると言われたが、できるだけ手伝ってくれる誠意が感じられる。b は今日はダメだと言われたが、手伝ってくれる気持ちが分かる。c は私のことを気にかけていない感じがする」(CNS13M)
- ・「a は確かに用事があって来られないが、『終わってからすぐ手伝いに行く』と言われたら、その誠意が感じられ、手伝いに来るかなと思う。b はいい加減な気がして、他の日なら他のことで断られるかもしれない。c は冷たくて、友人のことを大事にしてくれない感じがする」(CNS18M、CNS19F)

このような回答者の意識から、断りの理由が明確に説明され、積極的な {条件} を提示して最大限に手伝いたいという「誠意」や親切心を表明されることが、CNS にとって最も受け入れやすい断り方であることが窺える。それにより、断られる側として CNS は、ポジティブ・ポライトネスの断り方を受け入れやすく、ネガティブ・ポライトネスの断り方には賛同できない、ということが分かる。

c が b より受け入れやすいと 3 人が選択した。その理由は「c は理解できるが、b は『他の日』と言われて、引越しの期日は既に決まっているし、おかしい」(CNS6M、CNS16F、CNS17M)とする回答があった。

次に、{条件} の使い方に対する JNS の調査結果を見る。

表 3-9 JNS の調査結果

番号	配列のパターン	人数(人)	比率(%)
①	$a > b > c$	7	35
②	$b > a > c$	4	20
③	$b > c > a$	3	15
④	$a > c > b$	2	10
⑤	$c > b > a$	2	10
⑥	a? (断っていないのでは?) $b > c$	1	5
⑦	全部受け入れやすい	1	5

CNS の一致率が高かった選択に対し、JNS が選択した配列パターンは分散している。これは、JNS にとって受け入れやすい断り方の判断基準は人によって大きく異なり、CNS より複雑であることを示唆している。

しかし、最も受け入れやすい配列は「 $a > b > c$ 」で、また、a が最も受け入れやすい断り方である(9 人、45%、①+④)ことは、日中ともに共通であった。「 $a > b > c$ 」を選んだ人は、以下のような理由を回答している。

- ・「a は手伝ってくれる意思が感じられる。b は具体的な理由は述べていないが、『他の日なら』と言ってくれているので、まだ手伝ってくれる意思が感じられる。しかし、c は『行けない』というだけでぶっきらぼうな感じがする」(JNS1F)
- ・「少しでも手伝ってあげようという気持ちが伝わる」(JNS3F)
- ・「a：相手が断るだけでなく、来てくれようとしている意思が分かるため受け入れやすい。b：他の日の提示で断るための方便でなく、実際に用事があるのが分かり、受け入れやすい」(JNS7F)
- ・「a：なんとかして手伝いたい気持ちが出ている。b：代案を提示している。c：とくに悪い印象は受けないが、a、b よりは選択順が下になる」(JNS8F)
- ・「a：用事があるにも関わらず、来てくれようとするところに好感を覚える。b：

他の日でも来てくれようとしてくれるから。c : 仕方がないと思う」(JNS13F)

- ・「できることを少しでもしてくれようとするのがうれしい」(JNS14M)
- ・「aは相手が自分のために都合を合わせようとしてくれているため少し申し訳ない気持ちもするが実際言われるとうれしい。bも自分に提案してくれているためうれしい。親切だと感じる。cは普通の断り方だと思うし、自分が断るときにもcのように言う。正直a、b、cのどれで断られても不満はない」(JNS20M)

加えて、aが最も受け入れやすいと回答した理由は、以下の通りである。

- ・「予定があるにも関わらず手伝いに来てくれることを伝えているからaはとても良いと思う」(JNS6F)
- ・「どうしても変更できない予定があっても終わった後で手伝おうと言う気持ちが伝わる」(JNS19F)

このような回答者の意識からは、JNSはCNSと同様、積極的な{条件}を提出して最大限に手伝いたいという「誠意」や親切が表明された断り方を好む傾向があることが窺える。話者自身の予定の中で{条件}を積極的に出している場合、第三者には言及せず、JNSはCNSと同様に、ポジティブ・ポライトネスの断り方を好む傾向がある、ということが分かる。

aを最も受け入れやすい断り方として選んだ人が9人(45%、①+④)であるのに対し、aを最も受け入れ難い断り方として選んだ人は5人(25%、③+⑤)である。その理由は以下の通りである。

- ・「自分の予定を細かく話していて、『私は忙しいけど、あなたのために手伝う』というような押し付けがましさを感じてしまう」(JNS4F)
- ・「くどい、別にそこまでしなくていい」(JNS9M、JNS16M)
- ・「理屈っぽい」(JNS15F)
- ・「親しい間柄なら、きっぱり断ってくれた方がこちらの気持ちも楽」(JNS17M)



このような回答者の意識から、CNS 全員に好まれる、手伝いたいという気持ちを積極的に示す断り方は、JNS にとってはくどく、押し付けがましいと解釈されてる恐れがあることが示唆される。

また、c の {条件} 無しで、直接的な断り方を最も受け入れ難い断り方として選択した JNS は 12 人(60%、①+②+⑥)で、CNS は 17 人(85%)であった。これにより、CNS は JNS より直接的な断り方を嫌うことが分かる。

### 3.3.3 断られる側の意識のまとめ

以上、断られる側の視点から、「断り」に関する日中の意識の異なりを論じた。まず、CNS はポジティブ・ポライトネスの断り方を好み、しかもその選択の一致率が高かったのに対し、JNS が好む断り方は人によって大きく異なり、時として相反している。また、CNS は、ポジティブ・ポライトネスの断り方を受け入れやすく、ネガティブ・ポライトネスの断り方に賛同できない。CNS は、{理由}がはっきりと説明されて手伝えないということの真実性が感じられることを重視し、積極的に{代案提示}や{条件}を提示し手伝いたいという「誠意」や親切心が感じられる断り方を好む傾向がある。反対に、ネガティブ・ポライトネスの断り方に対しては、冷たい、硬すぎる、自分のことを大事にしてくれないなどと感じて賛同できない傾向がある。

一方、JNS は、相手の「誠意」や親切心に加え、相手にあまり気を遣わせないように配慮している。セット 2 の選択肢 a のように、話者自身の予定の中で {条件} を積極的に出している場合、第三者について言及せず、JNS は CNS と同様にポジティブ・ポライトネスの断り方を好む傾向がある。しかし、セット 1 の選択肢 b のように、{代案提示} として第三者が話題に出ている場合、その {代案提示} はやりすぎ、あるいは余計なお世話だと感じる人が少なくない。また、その親切心に悪気はなくとも、これから依頼するかもしれない第三者の予定を狂わせてしまう可能性も考慮することから、申し訳なさを感じ、それが心的負担となり、ネガティブ・ポライトネスの断り方を好む傾向がある。つまり、ポジティブ・ポライトネスの側面の強い断り方であっても、話者間のみで完結するのであれば、日本人にとって受け入れやすさは高まると予想できる。そのため、積極的に {代案提示} や {条件} などを相手に提供したとしても、その {代

案提示}や{条件}が相手に気を遣わせないような配慮が現実場面では必要となろう。

### 3.4 本章のまとめ

本章では、まず、断る側の視点から、B & L(1987)のポライトネス理論とLangacker(2008)の「事態解釈(Construal)」の概念を援用し、DCT 調査の方法で、日中両言語の「断り」のストラテジーを比較した。そして、断られる側の視点から、質問調査の方法で、「断り」に関する日中の意識について分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

断る側の視点からは、まず、認知の面から言うと、JNS は「スキーマ化」という＜事態解釈＞を行うことにより言語構造を成り立たせ、断りの理由を簡潔にする傾向がある。一方、CNS は「精緻化」という＜事態解釈＞を行うことにより言語構造を成り立たせ、事例を挙げつつ断りの理由を詳述する傾向がある。次に、社会文化の面から言うと、相手との関係を一層親密にしたいという「近づく」気持ちを強調することは中国語にとっては配慮であり、そのため CNS の断る側は相手の PF に働きかけるストラテジー、つまり実質的な「埋め合わせ」行動を積極的に提案し、ポジティブ・ポライトネスを好む傾向がある。一方、自分からの {代案提示} などが相手の迷惑になるか否かを考慮し、あまりに相手に気を遣わせずに一定の距離を保つという「近づかない」ことは日本語にとっては配慮であり、そのため JNS の断る側は相手の PF に働きかけるストラテジー、つまり実質的な「埋め合わせ」行動をほとんど提案せず、定型文やネガティブ・ポライトネスを好む傾向がある。このように、日本語と中国語では、その断り方に明らかな違いがあり、認知的・社会文化的差異とそれが反映するポライトネスや「配慮」の示し方の差異が明らかになった。

断られる側の視点からは、「断り」に関する日中の意識の異なりについて、CNS はポジティブ・ポライトネスの断り方を好み、しかもその選択の一致率が高かった。それに対して、JNS はポジティブ・ポライトネスの断り方を好む場合もあるが、相手に気を遣わせてしまうことを考慮し、ネガティブ・ポライトネスの断り方を好む場合もある。さらに、JNS が好む断り方は人によって大きく異なり、時として相反していることも分かった。本分析によって、本研究の1つ目の課題「言語行動の意識・発話文

レベルにおける日中両言語の断り発話を比較し、認知や社会文化的差異とそれが反映するポライトネスの差異を明らかにする。また、断られる側の視点から、JNS と CNS にとって、ポジティブ・ポライトネスの断り方とネガティブ・ポライトネスの断り方ではどちらが受け入れやすいかという、「断り」に関する日中の意識の異なりを明らかにする」、という課題を解明した。

なお、前文でも述べたように、本章では、人間関係などの発話状況的な要素は考慮せず、言語の体系的に日中両言語にはどのようなポライトネスと配慮の原則が使われるのかを見るため、人間関係を親しい友人に設定して分析を行った。しかし、言語行動は人間関係によって大きく左右されるため、今後は人間関係による日中間の「断り」の言語行動の差異をさらに研究する余地がある。また、今回は日中の大学生・大学院生それぞれ 20 名のデータについて分析を行ったが、さらに分析対象とするデータを増やし、統計的に分析することや、類例を複数示すことによって、より信頼性の高い傾向を提示する必要がある。さらに、本章では、DCT 調査という言語行動意識調査を通して話し手が頭の中で考える行動のイメージを示した。しかし、意識と実態(現実の言語使用)には乖離があり、現実の「断り」の言語行動で DCT の結果と同じような傾向が出るかどうかは不明である。加えて、DCT 調査により得たデータは話し手が話したい内容をひとまとまりの発話にして継続的に盛り込むという特徴があるが、実際の談話が展開していくプロセスにおける断る側と依頼側とのやりとりは観察できていない。

それらの欠点を補うために、次章からは、ロールプレイのデータを用い、比較対照分析の観点から、現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中「断り」の言語行動の展開構造(4 章)、談話展開のスタイル(5 章)、およびその談話展開に見られる配慮言語行動(6 章)の異同について考察する。DCT 調査により得た結果を検証しながら、談話レベルにおける日中の「断り」の言語行動の特徴、および「配慮」のメカニズムを明らかにする。

## 第4章 再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造 の日中対照

### 4.1 談話の展開構造とは

私たちは日常生活において、依頼を断らなければならないという状況にしばしば直面する。しかし、断り方によっては人間関係に大きな影響を与える可能性があるため、断りという行為は断りたいという情報伝達と人間関係の維持が同時に要求される非常に難しい行為である。日本語教育での断りの指導に関する教材では、「はっきりと断るべきではない」「理由も詳細まで述べる必要はない」という点が強調される傾向にある(中井他 2018 : 188)。そのため、断る際の例文として「～はちょっと...。」「それが...。」「難しいかもしれない」などの言語形式の提示にとどまっているものも多い。しかし、「日本語の文型を習得さえすれば、日本人とのコミュニケーションも円滑に図れる、というものではない」(辻他 2016 : 10)という指摘もある。

断りに関する従来の研究においては、依頼に対する1度目の断り発話に注目したものが主流であり、意味公式による個々の断りのストラテジーや言語形式の分析に焦点を当てたものが多い。しかし、実際の断りはそれほど単純ではなく、例えば、丁寧に婉曲的に断り表現を用いて断る場合、その婉曲的な断り方がかえって相手からの再依頼を誘発することになるという問題も生じている。こうした再依頼に対して断りを述べる際には互いの人間関係を損なう恐れがあるため、これまで断りにおける研究は「最後まで断りを貫いた合意形成」に重点を置くもの(施 2005、2007、ハヤティ 2017)が多い。本研究での「合意形成」とは、依頼側と被依頼側の意見が最終的に一致することである。さらに、「最後まで断りを貫いた合意形成」とは、被依頼側が最初から最後まで断りの意図を貫いた場合に、依頼側はもうこれ以上再依頼せず「あーそーかー、分かったじゃあ他(ほか)の人を当たってみることにしますね」などの発話をもって依頼の会話を収束し、被依頼側がそれに同意する場合を指す。この場合、依頼側は会話を主導するのに対して被依頼側は問題解決に協力的な態度を示さないのが特徴であり、「消極的合意形成」に属する。

反対に、「最初は断るが最後に受諾した合意形成」も考えられる。「最初は断るが最後に受諾した合意形成」とは、被依頼側は断るが、依頼側とのやりとりのうちに何らかのきっかけで最後に受諾に変化した場合を指す。被依頼側あるいは依頼側が問題解決に積極的な態度を示し、相手側もそれに合わせて互いに調整しながら合意を形成するのが「積極的合意形成」で、相手側が仕方なく受け入れるのが「消極的合意形成」である。最終的には受諾に至るにしても、いくつかのやりとりを経て最後に合意が形成される合意形成も断りの研究に入れるべきであろう。こうした「最初は断るが最後に受諾した合意形成」にはまだ解明されていない点がある。あらゆる「依頼—断り」の談話構造およびメカニズムを明らかにするには、「最後まで断りを貫いた合意形成」に限らず、「最初は断るが最後に受諾した合意形成」に着目した研究も重要である。なお、本研究で言う「談話構造」とは、「依頼—断り」の会話を発話機能に基づいて分割された、構成要素の組み合わせのことである。

JNS の断る側と CJL の断る側の再依頼から合意形成に至る「断り」の談話構造に違いがある場合、理由の 1 つとして考えられるのは人間関係の構築についての捉え方が日中の間で異なることである。こうした背景から、本章では、JNS の依頼側の再依頼に対し、最初は断るが最後に受諾した場合に、JNS と CJL の被依頼側における、再依頼から合意形成に至る断りの談話に着目し、談話の展開構造の異同を記述するために、「上下関係」(4.4.2.1 節で詳述)と「互惠関係」(4.4.2.2 節で詳述)という人間関係の概念を援用し、ロールプレイ調査の結果を分析する。分析結果から、日中の再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造に見られる「配慮」の示し方の違いを明らかにし、CJL と JNS が日中接触場面において誤解されやすい点について考える。なお、本章は再依頼後に受諾をして合意形成に至る談話が分析の対象であるため、「断る側」ではなく「被依頼側」という用語が分かりやすいと考え、「依頼側」と「被依頼側」という用語を用いることとする。

## 4.2 分析対象と目的

JNS の依頼側の再依頼に対して最初は断るが最後に受諾した場合、JNS と CJL の被依頼側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造の違いを明らか

にするために、4.2.1 では、まず依頼に対する「断り」談話の展開構造を整理し、依頼に対する「断り」の相互行為を定義する。その上で、本研究の分析対象を規定する。4.2.2 では、先行研究の問題点を指摘し、本章の研究目的と研究課題を述べる。

#### 4.2.1 依頼に対する「断り」談話の展開構造と構成要素

「談話には一定の構造があることは（中略）、日本語の分析においては基本的な考え方として定着している」（三宅 2019 : 167）。「断り」談話のやりとり全体を分析するには、断りがどのような構造を持っているか、どのようなストラテジーによって展開、成立するかを考える必要がある。施(2007 : 32)によれば、断りの談話は、『断り目的達成まで』と『断り目的達成後』の二つの段階に分ける」ことができる。「断り目的達成までの段階」とは、「最初の『依頼に関する発話』が現れたときから、最初の『断りへの了解を示す』発話が発せられたところまで」（同上 : 27）である。「断り目的達成後の段階」とは、「最初の『断りの了解を示す』発話が現れた直後から、『断り談話』が終わるまで」（同上 : 27）である。なお、「断りの了解を示す」発話は、「依頼側が最初に発した、相手の断りたい意図を認め、もうこれ以上再依頼をしないことを伝える発話」（同上 : 32）を意味する。本章では、この「断りの了解を示す」発話に当たる部分を「受け入れ部」とする。

中垣(2014)は、勧誘に対する断りの談話を以下のように分けている。



図 4-1 勧誘に対する「断り」の談話構造(中垣 2014 : 172)

異なる働きかけ、つまり「勧誘」や「依頼」に対する断りの言語行動には違いがあるとも言える。しかし、最初は断るが最終的に受諾して合意形成に至る会話において、ためらいや断りなどによって「再勧誘」や「再依頼」を誘発してしまう可能性があることや、その「再勧誘」や「再依頼」に対する断りは「関係維持と意図伝達の両方に

配慮が求められる」(尾崎 2006 : 90)ことから言えば、「勧誘」に対する断りや「依頼」に対する断りは、同じ断りの言語行動として類似する部分がある。そのため、本章では、施(2007)と中垣(2014)を参考にし、依頼に対する「断り」談話の展開構造を段階的に捉え、さらに各段階の構造を発話機能（談話展開上に果たす機能）に基づき部分的に詳細化するものを「構成要素」として図 4-2 に示し、各段階と各構成要素の定義について説明する。

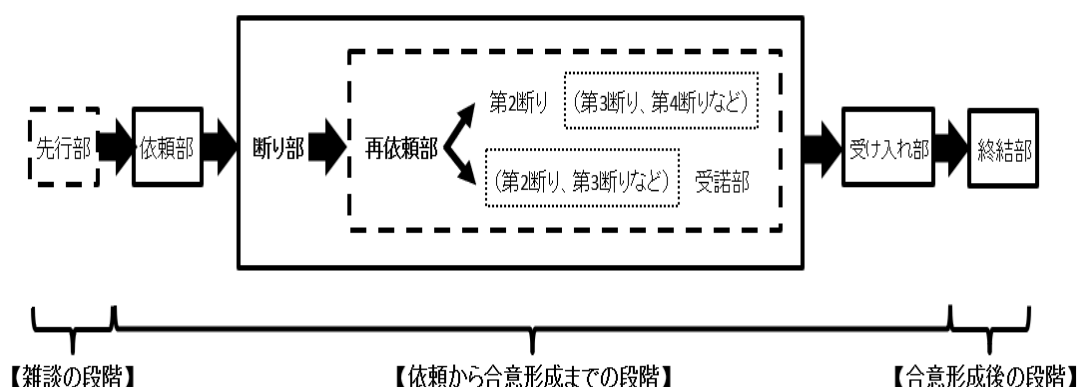


図 4-2 依頼に対する「断り」談話の展開構造

#### (1) 【雑談の段階】

依頼発話が始まる前の準備段階

- ① 「先行部」：依頼が唐突にならないように、また依頼被依頼側を依頼目的に関する話へと引き込むために、依頼発話に先立って依頼事項をめぐる事柄に関する雑談をお互いに交わす部分。この部分は現れない場合があるため破線で囲む。

#### (2) 【依頼から合意形成までの段階】

依頼発話が出てから、依頼側が被依頼側の意図（断り／受諾）を受け入れるまでの段階

- ② 「依頼部」：依頼側の依頼発話。
- ③ 「断り部」：依頼発話に対する拒否を示す発話。「依頼部」に対する初めての断りの発話は「初出断り」とする。

- ④「再依頼部」：「断り部」に内包され、被依頼側が断ったのち続けて依頼して被依頼側を応諾に向かわせようとする発話。この部分は現れない場合があるため破線で囲む。
- ⑤「第2断り(第3断り、第4断りなど)」：「再依頼部」があった場合、その後に再度の断りを第2断りと判定する。また、第2断りの後に再依頼が出現し、その後に断りが表出されれば、その断りを「第3断り」と判定し、さらに第4、第5断りなどについても同様に判定する。第3断り、第4断りなどは現れない場合があるため破線で囲む。
- ⑥「受諾部」：再依頼に対する被依頼側の受諾発話。第2断り(第3断り、第4断りなど)は現れない場合があるため破線で囲む。
- ⑦「受け入れ部」：依頼側の発話で、被依頼側が表明した意図(断り／受諾)を受け入れる発話。

### (3)【合意形成後の段階】

依頼側が被依頼側の意図を認めてから依頼についての話題が終わるまでの段階

- ⑧「終結部」：依頼を終了させる発話。

上記の展開構造より、本章では、依頼に対する「断り」の相互行為を「依頼発話<sup>36</sup>を受けてから最後に被依頼側の意図(断り／受諾)が依頼側に認められ、依頼側はもうこれ以上再依頼せず、依頼の話題が終わるまでのやりとり」と定義する。

本章では、図 4-2 に整理した依頼に対する「断り」談話の展開構造や、その展開構造により規定した依頼に対する「断り」の相互行為の定義に基づいて、断りのコミュニケーションの再依頼から合意形成に至る段階における依頼側と断る側のやりとりを抽出し、そのうち「最初は断るが最後に受諾した合意形成」の展開構造を分析対象とする。JNS の依頼に対し、JNS が被依頼側、CJL が被依頼側の場合、それぞれの最初の断りから最後の受諾に変化した展開がどのように構造されているかについて、依頼側と被依頼側の用いる発話機能を分析して探る。

---

<sup>36</sup> 依頼側の依頼発話に先立つ【雑談の段階】は、文化や人間関係、事態の緊急度などによって必須ではなく、現れない場合もある。



## 4.2.2 研究目的と研究課題

「1.2.2 『断り』に関する現実／自然に近い言語行動・談話レベルの研究」で概観した先行研究では、再依頼から合意形成に至る断り談話の展開構造の一端が明らかになっているが、そのほとんどは、本章の「はじめに」でも述べたように、「最後まで断りを貫いた合意形成」に着目したものである。しかし、再依頼に対して最初は断るが依頼側との一連のやりとりのうちに最後に受諾する合意形成もあり得る。最後に受諾の合意形成に至るからこそ、依頼側と被依頼側の間における問題が解決できる。ゆえに、「最初は断るが最後に受諾した合意形成」についてのさらなる研究の必要性がある。

上述した先行研究のように、「断り」に関する現実／自然に近い言語行動・談話レベルの研究では、母語場面での対照研究に焦点が当てられてきた。これらを参考にすれば、母語場面での断りの特徴をある程度把握することは可能である。しかし、母語場面での対照だけでは、学習者の学習実態を捉えることは難しい。なぜならば、学習者は接触場面で必ずしも母語場面と同じ振る舞いをとるとは限らないからである。母語場面の特徴だけを見てそれを教育あるいは学習目標とするのは不十分である。日本語母語場面における JNS の断る側の言語行動と比較しながら日中接触場面の分析をすることによってこそ、CJL の断る側の言語行動の特徴が指摘でき、CJL にとってより効果的に教科書での提示が可能となる。

本章では、JNS と CJL が接触場面でのコミュニケーション上の誤解や不愉快さなどを減らすための一環として、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、本研究の2つ目の課題に取り組む。

**研究課題 2：**現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、JNS の断る側と CJL の断る側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を明らかにする。また、展開構造に違いがある場合、その要因を人間関係の構築の観点から明らかにする。

## 4.3 データと分析方法

4.3.1 節では調査協力者の選び方および分析資料としての会話の抽出方法を述べる。続いて、4.3.2 節では抽出された会話を文字化する方法を述べる。最後に、4.3.3 節では談話構造を分析する方法を述べる。

### 4.3.1 調査協力者と会話資料

本章では、CJL と JNS を比較可能なコーパスである多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language : I-JAS<sup>37</sup>)(国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター)に収録されている、「断り」の場面(アルバイト先でホール担当から調理担当に変わるように依頼され断る)の計 69 組ロールプレイ<sup>38</sup>(ロールプレイカードは付録 V—1 日本語版のロールプレイカード 被依頼側の日本語母語話者へのロールプレイカード)のデータを抽出した。日本語母語場面は、依頼側の役を演じた JNS の調査実施研究者 2 名<sup>39</sup>(女性、国立国語研究所に属する)と、被依頼側の役を演じた JNS の調査協力者の 20 代から 30 代までの大学生・大学院生 33 名(男性 15 名、女性 18 名)による計 33 組の会話である。日中接触場面は、依頼側の役を演じた JNS の調査実施研究者 2 名(女性、国立国語研究所に属する)と、被依頼側の役を演じた CJL の調査協力者の中上級<sup>40</sup>大学生・大学院生の中国の教室環境学習者 36 名(男性 10 名、女性 26 名)による計 36 組の会話である。被依頼側の役は JNS、CJL とともに、大学生・

<sup>37</sup> I-JAS は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language)」の略で、12 言語の異なる母語を持つ日本語学習者の発話データと作文データを横断的に収集し、収録したコーパスである。また、学習者のデータと比較するために、日本語教育に関与したことのない JNS50 名のデータもある。詳しくは <https://chunagon.ninjal.ac.jp/static/ijas/about.html> を参照されたい。

<sup>38</sup> ロールプレイカードは付録 V—1 日本語版のロールプレイカード 被依頼側の日本語母語話者へのロールプレイカードを参照されたい。

<sup>39</sup> ロールプレイは、学習者の日本語によるコミュニケーションの能力、交渉能力を観察する目的で実施される。そのため、実施に向けて、依頼側の役を演じた調査実施研究者の JNS は、被験者の断りをすぐに受け入れるのではなく、何度かやりとりをする(迫田他 2016a)。

<sup>40</sup> SPOT(Simple Performance-Oriented Test)は TTB(Tsukuba Test-Battery of Japanese)の 1 つで言語知識と言語運用の両面から日本語能力を測定するものである(迫田他 2016b)。SPOT の成績区分は、下記のページで示されている基準を参考に、「60-80 : 中級学習者」「80-90 : 上級学習者」として認定可能と考える。今回の調査では、SPOT の成績が 70 以上の学習者を調査協力者の中上級学習者とする。詳しくは <http://ttbj-tsukuba.org/p1.html#pageLink01>(2019 年 9 月 2 日閲覧)を参照されたい。

大学院生としたのは、分析結果を中国の高等教育機関での日本語教育に応用することを目指すため、大学生・大学院生のコミュニケーションの特徴を明らかにする必要があると考えたためである。

具体的な分析資料は、抽出したデータのうち、4.2.1 節で整理した依頼に対する「断り」談話の展開構造より、「再依頼部」から「受け入れ部」まで、つまり再依頼から合意形成に至る段階における依頼側と断る側のやりとりである。そのうち、再依頼に対し、「最後まで断りを貫いた合意形成」の会話は計 55 組で、「最初は断るが最後に受諾した合意形成」の会話は計 14 組である(JNS が被依頼側の場合の 5 組と、CJL が被依頼側の場合の 9 組)。本章では、この 14 組の会話資料を分析対象とし、最初は断るが最後に受諾した場合、被依頼側の JNS と CJL における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を比較する。

会話は会話参加者の年齢、性別、社会的背景などに影響される。本章では年齢差や社会的背景による影響を極力少なくするために、被依頼側の調査協力者を 20 代から 30 代までの学生のデータに限定した。また、性差による影響を懸念し、女性同士による会話例のみ扱うことにした。

### 4.3.2 会話資料の文字化の方法

I-JAS にはプレインテキスト(文字化したデータ)が備えられており、表記方法と記号は I-JAS の基本方針(迫田 2016b : 170-173 参照)と同一である。

表 4-1 書き起こしデータで用いる記号一覧

意味	記号	記号の名称
あいづち	< >	山カッコ
間・ポーズ	、	読点
長音	ー	長音
複数の読みのある場合のフリガナ	( )	小カッコ

ただし、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を探るために、本章では

文字化した資料に以下のような作業を加えた。まず、話者が交代する箇所(あいつちを除く)を 1 つの発話の区切りとして改行し、各発話番号をアラビア数字で表す。また、I-JAS のデータと対応させるため、調査者の依頼側を「C」、調査協力者の被依頼側を「K」と記し、調査協力者の ID は I-JAS の ID をそのまま使用した。本章の分析で特に注意した箇所は太字で表記した。

### 4.3.3 分析方法

分析手順は次の通りである。まず、分析対象である 14 組(JNS が被依頼側の場合の 5 組と、CJL が被依頼側の場合の 9 組)の会話資料から、図 4-2 の依頼に対する「断り」談話の展開構造に照らして、再依頼から受け入れまでの段階の談話を抽出する。次に、抽出した再依頼から受け入れまでの段階の談話を、4.2.1 節で整理した各構成要素の定義に基づき部分的に分割する。

その後、量的手法を用い、最初は断るが最後に受諾した場合、JNS と CJL の被依頼側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を比較し、その傾向を示す。それから、質的手法を用い、具体例を取り上げながら談話の展開構造における各部分の内容まで分析し、JNS と CJL の被依頼側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造の質的な相違を指摘する。

## 4.4 結果と考察

まず、4.4.1 節では JNS が被依頼側、CJL が被依頼側の場合、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を比較する結果を示す。次に、4.4.2 節では日中間異なる展開構造に至る要因、代案の使用について考察を行う。

依頼という行為は、話し手が自分の利益のために強制力を伴わずに相手に何らかの負担をかける行為要求であるため、一旦断られた場合には再依頼は回避される傾向にある。しかし、本章の場面は依頼側(店長)は自分自身の利益のためではなく店の運営のために依頼を行うので、一度断られても「まーね、みんな自信があるなんて言う人

はないから大丈夫ですよ、あのすごく人気があるしあのセンスがいいので、是非ね、あの1人厨房の方でいなくなったから、そっちに入ってほしいんですよ」のように諦めずに相手側から受諾を得ようと再依頼の会話が多く見られた。再依頼に対し、「最初は断るが最後に受諾した合意形成」の会話は、JNS が被依頼側の場合の5組に対して、CJL が被依頼側の場合は9組である。

#### 4.4.1 再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造

再依頼に対して最初は断るが最後に受諾した場合、JNS と CJL の被依頼側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を表 4-2 に示す。

表 4-2 「最初は断るが最後に受諾した合意形成」の「断り」談話  
の展開構造および各展開型の使用人数と割合

	「依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型	「被依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型
JNS が被依頼側	4/5(80.0%)	1/5(20.0%)
CJL が被依頼側	2/9(22.2%)	7/9(77.8%)

表 4-2 で示したように、「最初は断るが最後に受諾した合意形成」の断り談話の展開構造の中では、JNS が被依頼側の場合、80.0%が「依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型である。それに対して、CJL が被依頼側の場合、「被依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型が 77.8%を占めており、両場面は対照的な結果を示す。以下、具体例を取り上げながら、再依頼に対して最初は断るが最後に受諾した場合の、JNS と CJL の被依頼側における再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を比較する。

#### 4.4.1.1 日本語母語話者が被依頼側の場合

##### 会話1【依頼側：Cの調査実施研究者 被依頼側：KのJNS16】

	発話	談話の構成要素
11-C	まあまあそれは一料理長が、え、ちょっとずつ教えるので	「再依頼部」
12-K	料理ですかーすごく、センスがないって家族にも言われて ますしー〈うん〉、あと一あのお客さんと接するのがすご く好きなんですなー〈うーん〉、なので一あの一調理の方 (ほう)に入ってしまうとお客さん、の一顔見ることもで きないしー〈んー〉あの仕事の楽しさが一なくなっていま うと、私は思ってるのでー	「第2断り」
13-C	あそう〈はい〉、でもね一料理長がね〈はい〉あなたなら 絶対できるってこうなんか、あ一の(連体詞)あ一の(連体詞) 子なら大丈夫って言ってる(ゆってる)んだけどー	「第3依頼」
14-K	きっと私のごは、料理を食べたことがないから料理長は おっしゃってるのかもしれないですねー	「第3断り」
15-C	まあでもほら、そこで料理長に鍛えられれば〈はいー〉、 あなた腕上がるわよ	「第4依頼」
16-K	{笑} そうですかねー、でも接客と料理と、言う(ゆう)の はすごくもうぜんぜん違うのでー〈うーん〉、その料理を 作るの、お仕事で、ここに来ると、言う(ゆう)になると一 ちょっと気が重いかなー	「第4断り」
17-C	あーそう	
18-K	って思ってます	
19-C	例えばじゃあ〈はいー〉週の半分調理で半分ホールとかど う	「第5依頼」 (依頼側が {代案提示} をする)
20-K	んー半分ですかー、んー、まあ半分と言う(ゆう)よりはち よっと少なめにしてもらえるんだったら〈あー〉、いいか	

---

な、あの三分の二接客で三分の一調理だったら、あの一ま  
あお店も困ってることなのでー〈んー〉、たす、あの一助、  
けなきやと言う(ゆう)のもあるのでー

21-C んー、あそう？

22-K それだったらはい

「受諾部」

---

25-C あ、ありがとうございます〈はい〉じゃちょっとそれで調  
整さしてもらいますね

---

「受け入れ部」

会話1は、JNSが被依頼側の場合における、「依頼側の{代案提示}による合意形成」の展開型の1例である。19で依頼側JNSのCは、3回の再依頼をしても被依頼側JNSのKから受諾する見通しがないと判断し、「じゃあ週の半分調理で半分ホールとかどう」という代案を提出し、Kの意見を求める。その代案を受けたKは、20で「んー、半分ですかーんー」と躊躇いながら受け入れがたい様子を示し、間髪入れずに話を続け、「まあ半分というよりはちょっと少なめにしてもらえるんだったら、いいかな、あの三分の二接客で三分の一調理だったら」という受け入れの条件を提示した。その後、「まあお店も困ってることなのでー〈んー〉、たす、あの一助けなきやというのもあるのでー」という依頼側への理解を示し、最後に「それだったらはい」と仕方なくCの代案を受け止めることにより消極的合意が形成された。このように、JNSが被依頼側の場合、再依頼から合意形成に至る断りの談話の展開構造は、「再依頼部」⇒「第2断り」⇒・・・⇒「第n依頼」(依頼側が{代案提示}をする)⇒「受諾部」⇒「受け入れ部」で、「依頼側の{代案提示}による合意形成」の展開型が多く見られた(80.0%)。つまり、何回かの「依頼—断り」のやりとりを経ているにも関わらず、JNSの被依頼側は積極的に代案提示をせず、その代案提示を依頼側に任せる傾向がある。依頼側からの代案提示をきっかけとして、被依頼側がその代案提示を受け入れれば、合意が形成される。

その他の「依頼側の{代案提示}による合意形成」の展開型には、(19)から(21)のように、依頼を受けた当人である被依頼側に関する内容の代案を出し、被依頼側がそれらの代案に賛同することによって合意形成に至るケースがある。

(19) まあじゃあさ、ホールと調理、半々でもいいわよ。

(依頼側：C の調査実施研究者 被依頼側：K の JNS03)

(20) じゃあ全部ではなくって、その、例えば週に一回だけのローケーションで、みんなで1人ずつこうヘルプに入ってもらってゆうのはどうですか？

(依頼側：C の調査実施研究者 被依頼側：K の JNS07)

(21) 例えばなんですけど、あの、ま、例えば今週五入ってもらってる、で、あの、みんなで、こう、順繰りに？あの、例えば、週一で〈んー〉調理に1人ずつ入ってもらうとか、そういう方法はどうですか？

(依頼側：C の調査実施研究者 被依頼側：K の JNS15)

JNS が被依頼側の場合に、「被依頼側の {代案提示} による合意形成」のケースが1例あった。その展開構造は、会話2の「再依頼部」⇒「第2断り」⇒・・・「第n依頼」⇒「第n断り」(のちに被依頼側が {代案提示} をする)⇒「受諾部」⇒「受け入れ部」である。

#### 会話2【依頼側：C の調査実施研究者 被依頼側：K の JNS43】

発話	談話の構成要素
09-C あーそうなんです、そうかーそうかー、何人(なんにん)かに、ね、お願いをしてるんですけど〈あー〉、みんなやっぱり料理苦手だっという方(かた)が多くて	「再依頼部」
10-K あーそうですか〈うーん〉、あのほんとに苦手で〈はい〉えーとあまり、そうですね、ま、な、何(なん)だろう、た、ただ、えーどどれくらい、あの一のことを〈うん〉き、期待されているのかわからないんですけど	「第2断り」
11-C まあ最初は、ね？作るのいちいきなりってのは難しいと思うので〈はい〉マニュアルを見ながらこう少しずつ覚えていって〈あーはーはーはー〉一応まあベテランの人もいるので〈はい〉あの一指導を受けながら〈あー〉とというようなふうに考えてはいるんですけど	「第3依頼」



12-K	あの一おそらくそちらにシフトを全部してしまうと 〈うん〉私もな、な、やっぱりモチベーションとかが〈う んうんうんうんうんうん〉 大切だと思うので仕事には	「第3 断り」 (のちに被依 頼側が {代 案提示} を する)
13-C	確かに楽しいと言って(ゆって)くれてるのはありがた いので	
14-K	はいはい、なんかこんあの一組み合わせることはでき ないですか? その	
15-C	あーそれはでも	
16-K	フロアも、の日もあれば 〈うんうんうんうんうん〉 見 たいなことができるんであれば 〈はいはい〉、あうまた だ、しゅ本当に調理苦手なので、〈はい〉 あの実際使っ ていただけないかもしれないというのがあるので 〈は いはい〉、ましちょっとやってみるという感じで 〈うん うんうん〉、それでも大丈夫であれば 〈うん〉、そのま 例えばキッチンでですか 〈はいはい〉、何日(なんにち) と接客何日(なんにち)見たいな感じで 〈うんうんうん うんうんうん〉 とかはだめですかね	
17-C	あそれでもありがたいです	
18-K	あーそうですか 〈はい〉、それだったら	
19-C	なんとか	
20-K	あーそうですね	
21-C	やって、たてもらえますか?	
22-K	はいはいはい	「受諾部」
23-C	はい、じゃあえっとちょっとその(連体詞)割合はまた 〈はい〉 後日相談ということで、あの考えてみます、 いいですか	「受け入れ部」
24-K	お願いしますはい	
25-C	はい、ありがとうございます	

被依頼側 JNS の K は 2 回断ったが、依頼側 JNS の C に再依頼をされ、「やっぱりモチベーションとかが大切だと思うので仕事には」と断りの理由を述べながら婉曲的に断った後、補償戦略として「なんかこんあの一組み合わせることはできないですか？」という代案を提示した。15 で依頼側 C の話が終わらないうちに、16 で K は割り込み「フロアも、の日もあれば見たいなことができるのであれば」、「それでも大丈夫であれば」、「～とかはだめですかね」のように C の意見を聞きながら積極的に説明をしている。21 で C の確認に対し、22 で K は「はいはいはい」と快く受諾した。そして、最後に 23 で C の受け入れの話をもって、「被依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型が形成されている。

以上から分かるように、JNS が被依頼側の場合、「最初は断るが最後に受諾した合意形成」の展開構造には、会話 2 のように被依頼側が問題解決に積極的に代案提示をし依頼側もその代案に合わせる「積極的合意形成」もあれば、会話 1 のように依頼側が問題解決に積極的に代案提示をし、被依頼側が仕方なく受け入れた「消極的合意形成」もある。いずれにせよ、JNS が被依頼側の場合、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造には、「依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型が優勢である。依頼側からの代案提示か、被依頼側からの代案提示かに関わらず、JNS からの {代案提示} の内容はその発話の場にいる人物のみに言及したのが特徴である。

#### 4.4.1.2 中国人日本語学習者が被依頼側の場合

CJL が被依頼側の場合、何度も断りをしたとしても相手から再依頼をされれば、CJL の被依頼側は、断るのちに {代案提示} の戦略を採用するという、「被依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型が多かった(77.8%)。つまり、被依頼側からの代案提示をきっかけとして、依頼側がその代案提示を受け入れた際に合意が形成される。その展開構造は、会話 3 や会話 4 に見られるように、「再依頼部」⇒「第 2 断り」⇒・・・「第 n 依頼」⇒「第 n 断り」(のちに被依頼側が {代案提示} をする)⇒「受け入れ部」である。

会話 3【依頼側：C の調査実施研究者 被依頼側：K の C JL24】

	発話	談話の構成要素
09-C	んーだけどころ調理の人が一急にー〈あ〉1人辞めちゃったんですよ	「再依頼部」
10-K	あーそうなんだえっと〈はい〉だが私がえっと料理にとっても弱いので、お一客、お客様が大切なので、もし私があー、えと美味しく料理を作ったらえっと彼らもとても一あもうおこ、あおこー怒りられる(怒られる)こともある、こともあると思います、その時はとても大変なと(だと)思いますから	「第2断り」
11-C	でもやっぱり最初から上手にできる人はいないので〈はい〉あの先輩に、調理の先輩に教えてもらって簡単なところから練習してもらったらいいかかなと思うんだけどどう？	「第3依頼」
12-K	でもでも私がちょっと料理が、料理を作るのがちょっと好きではないえっと今、えっと日本語があ日本語の会話がちょっと練習したいので〈はい〉そのもしちゅお客様の注文を受けたりお客様と話し(話)すことができると思います	「第3断り」
13-C	あーそうですか〈あー〉CMさんは、あの料理を食べるのが好きだから、その食べるのが好きな人は上手に作れると思ったんですけどね	
14-K	あーでも	
15-C	難しいですか？	「第4依頼」
16-K	はいとても難しいとおます(思います)、えとでも友達の一王さんが〈はい〉料理がとてもあーりょ上手と 思います〈あ、はいはい〉もしよかったら私が彼女と 相談したりえっと紹介いたします〈あ〉、いいですか？	「第4断り」 (のちに被依頼側が{代案提示}をする)

---

17-C あの料理が上手な友達を紹介してくれるんですか？

18-K あーはいいいですか？

19-C あーそれはいい話ですね

「受け入れ部」

---

被依頼側 CNS の K は、3 回の断りにも関わらず、依頼側 CNS の C に再依頼をされても、16 で「はいとても難しいと思います」と断言して依頼を明確に断った後、補償戦略として「料理がとても上手だと思います」と述べて料理上手な友達を紹介するという形で代案を提示し、「もしよかったら〜」「〜いいですか」と意見を求めることによって、C を応答側の位置に置いた。C は 17 で情報を確認してから、19 で「それはいい話ですね」と積極的に K の代案を受け止めることによって、「被依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型を形成した。会話 3 のように、被依頼側が問題解決に積極的に {代案提示} をし、依頼側もその代案に合わせる「積極的合意形成」もあれば、次の会話 4 のように、被依頼側は問題解決に積極的に {代案提示} をし、依頼側が疑問や不安を持ちながらもその代案提示を受け入れる「消極的合意形成」もある。

#### 会話 4【依頼側：C の調査実施研究者 被依頼側：K の CJL11】

発話	談話の構成要素
17-C そうかーまあでもなーあの、料理長のあー料理長の劉さんがねとても上手だから〈はい〉きっと上手に教えてくれると思うよ	「再依頼部」
18-K はいあの店長、料理を、料理をあんー、あのうー料理をあのうー勉強してー〈うん〉時間がーかかる、うんーそれに私はあの一、あの平日んーんー、あのお客様をしゅったい(接待)して、あーんあんとてももてる、〈うんうんうん〉もてるです〈うんうんうん〉あの一、あのお客様の中で人気があります〈うん〉あーもし私はあの一んーあの一あんー、料理を、んーもし私はあの店、店で顔、出さないとあの、うん、お客様、お客様が、お客様のあーん数はあんー減っているかもしれないよ {笑}	「第 2 断り」

---

19-C	{笑} そうだなーそれは確かにそうだ君はとっても 人気があるし、あのお客様も来てくれるからあ、君 がいなかったらお客様も減るかもしれないなー 〈はい〉 でもなー、でも料理が作れなかったらねー 〈はい〉 お客様も食べることができないしーんー 困ったなあそうだ	「第3 依頼」
20-K	店長 〈うん〉 あの一 〈はい〉 んー、あの私は 〈うん〉 あの一、あーん同僚の 〈うん〉 王さんは 〈うん〉、 あの一あー料理が上手 〈うん〉 上手だ 〈うん〉 あのだと、と聞きました 〈うん〉 あの一彼はたぶん その（連体詞）仕事があの一、んー、何と言って （なんといつて）あのたぶあん、彼はあの一それに彼、 彼の一あーん、あの将来の夢は 〈うん〉 店長と同じ 〈うん〉 んー料理店をんーつど、つど、何て(なんて) いる(言う)、あの一私はあ、彼はあーんあの一、 あー、あ素晴らしいあの一あーん人選ですはい	「第3 断り」 (被依頼側が {代案提示} を する)
21-C	うんなるほど王さんがいるんだね 〈はい〉 本当にいい 人かい？	
22-K	はい、はい	
23-C	CM と同じくらい、あの一元気が良くて頭も良くて 〈は い〉 働いてくれるかい？	
24-K	はい、料理が上手	
25-C	で、料理が上手ー 〈はい〉 分かったじゃあしょうがない なあ本当は君にしてほしかったけどまあ君が人気があ るから、仕方がないなあ、よし分かったじゃあ王さん今 度連れて来てください	「受け入れ部」

18 で被依頼側 CNS の K は、依頼側 CNS の C の再依頼に対し、断りの理由を述べながら婉曲的に断った。それを受けて C は 19 でまず K の話に同感を示した後、「でも料理が作れなかったらねーお客様も食べることができないしーんー困ったなあそうだ」と困っている様子を示し、再依頼を仕向けている。その再依頼に対し、K は受諾か断るかを直接に答えずに、20 で「料理が上手だと聞きました」と述べ、同僚の王さんを推薦するという形で代案を提示した。{代案提示}を受けた C は、21 で「うんなるほど王さんがいるんだね、本当にいい人かい?」、23 で「CM さんと同じくらい、あの一元気が良くて頭も良くて働いてくれるかい?」というふうに、薦められた王さんについて続けて確認を行った。この確認は、薦められた第三者である王さんについての確認だけではなく、王さんを薦める人、つまり K に対して、C が不信感を持っているように見受けられる。その後、24 で「はい、料理が上手」と K から肯定的な答えを得られたとしても、C は 25 で「しょうがないなあ」、「仕方がないなあ」のように 2 回咄き、不本意ながら K からの {代案提示} を受け入れることによって、「消極的合意形成」に至った。

その他の「被依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開型には、(22)から(24)のように「友達」「妹」「クラスメート」という身近な人物を紹介するという代案を出し、依頼側からの賛同を得ることによって合意形成に至るケースがある。

(22) 「んー、すみません、でも、私はえー、**妹**が、ありますので〈うんうん〉、彼、彼女の、えんー料理を作るのはとても、えん上手です〈うんうん〉、ですから私は、あん彼あ彼女を紹介して、んーここで、料理をつくんー作一りーます」  
(CJL44)

(23) 「私の**友達**あー、が、料理が上手で、料理を作るのは上手です。はい、紹介、でも紹介し、差しえ、差し上げてもいいですか」  
(CCM47)

(24) 「あー実はー私はーあるーうー**クラスメート**はー料理は上手だとーきえたんだけど、彼を紹介しましょうか、〈お〉してみましようか」  
(CCM52)

この点は、3.2.2.3 節の談話完成テスト調査で示されたものと同じ結果である。親友から引越しの手伝いという依頼事を受けた側は、自分自身の力で依頼内容を実現できない場合、調査協力者の CNS は断った後に(25) ((18)再掲) のような {代案} を出している。

(25) a. 真不好意思，周末我恰好有个重要活动需参加，要不我替你联系其他人？

(CNS04M)

{詫び}                      {理由}                      {代案}

(本当にごめん。週末はあいにく大事な活動に参加しなければならないから、  
代わりに私が他の人に連絡するのはどう／どう思う？)

b. 不好意思啊，我有别的事了，我帮你问问其他朋友吧。 (CNS18F)

{詫び}              {理由}              {代案}

(ごめんね、他の用事があるから、代わりに私が他の友達に聞くのはどうかな／  
どうでしょうか。)

CNS には、(25a) “其他人”(「他の人」)、(25b) “朋友”(「友達」)を紹介するという代案を出し、依頼側からの賛同を得ることによって合意形成に至るケースがある。言語行動の意識・発話レベルか、現実／自然に近い言語行動・談話レベルか、また上司か同輩の友達かという点に関わらず、CJL あるいは CNS は、断る際に「関係(グッンシー)」の間柄にある人物にさらに依頼し、その人物を紹介するという {代案} を提示するストラテジーをよく使用していることが分かる。

被依頼側が CJL の場合、「依頼側の {代案提示} による合意形成」のケースは 2 例ある。その展開構造は、具体的に会話 5 の「再依頼部」⇒「第 2 断り」⇒・・・⇒「第 n 依頼」(依頼側が {代案提示} をする)⇒「受諾部」⇒「受け入れ部」である。

会話 5【依頼側：C の調査実施研究者 被依頼側：K の CCM05】

発話	談話の構成要素
07-C あーえーと、そうだねー、あの【人名 1】さんなんか、 に、料理が好きだし食べることが好きだしー〈はい〉美 味しい物が好きな人は一料理が上手に作れると思うん だよねー	「再依頼部」
08-K いえ私実は私料理の事は全然知りませんでした、でも 私、あーなんか、んー、その(連体詞)料理は、いちもん (一応)好きですけど〈はい〉でも私は接客のほうがかもっ と上手なんです、そのお、客さんと一緒に話して〈はい〉 その一店の料理を推薦、することが私のほうは、もっと 上手だと思います〈ああ〉だから、その、その(連体詞) 料理のことは、ん、ちょっとね私にとっては店長は他(ほ か)の人に頼まれてもいいですか？	「第 2 断り」 (のちに被依 頼側が {代 案提示} をす る)
09-C ああー、【人名 1】さんあの接客とても上手でー、あの もうお客さんからも評判がいいんだけどー〈はい〉あの やっぱりちょっと、料理の、スタッフ？シェフのスタッ フが辞めてしまったから大変なんですよ、で、えっとー ちょっと最初は難しいかもしれないですけど、あの先輩 にしっかり教えてもらって、あの簡単な仕事から、や ってみるーのはだめかな	「第 3 依頼」 (依頼側が {代案提示} をする)
10-K んー、私は、んーやっぱり接客のほうが好きですけど、 〈はい〉でも店長が言われたら〈はい〉私ーちょっとは やってみようかなー〈うん〉でも、んーその(連体詞)先 輩から〈はい〉教える時間はありますか？	
11-C はいはい、うん	
12-K んーじゃあ私先輩から、その(連体詞)料理のことをせ、 あーせんらい(先輩)から、んー先輩は私のこと教えて、 私はその(連体詞)料理のことを勉強します、これから勉 強します	「受諾部」



- 
- 13-C あ、いいですか？
- 14-K でも一時間はちょっと掛かりますがー〈はい〉んー、  
だいたい、んー一週間も後で〈はい〉そのしこと(仕事)  
をし、してもいいですか？
- 15-C あー、じゃあ、えっとその(連体詞)先輩に私が話しとく  
ので〈はい〉あのちょっとずついろんなことを〈はいは  
い〉ちょっとずつ簡単な事からしていったって〈はい〉勉強  
してもらうことにしましょうか
- 16-K はい
- 17-C はいわかりました
- 18-K それでいいですか？
- 19-C はいいいですよ、ありがとうございます
- 20-K あ大丈夫です〈はい〉たぶん私も、その食べるほうが  
ほんと好きですけど〈はい〉でも、自分で、作れば、ん  
ー作ればいいなー、私は今思っています
- 21-C あ、そうですかー〈はい〉じゃあちょっと頑張ってやっ  
てみてください
- 22-K はいはいはい 「受け入れ部」
- 23-C はいお願いしまーす
- 24-K 大丈夫です
- 25-C はいありがとうございましたー
- 

08 で被依頼側 CNS の K は、依頼側の CNS の C の再依頼に対し、断りの理由説明をした後、「店長は他(ほか)の人に頼まれてもいいですか」という代案を持ち出したが、K からの反応はない。09 で C は、まず K に対して肯定的な評価を示し、「あの先輩にしっかり教えてもらって、あの簡単な仕事から、やってみる一のはだめかな」と K の意向を聞きながら代案提示をした。その代案に対し、K は最初「んー、私は、んーやっぱり接客のほうが好きですけど、〈はい〉でも店長が言われたら〈はい〉私ーちょっ

とはやってみようかなー」と仕方なく受け入れるように見えるが、12では「んーじゃあ私先輩から、その(連体詞)料理のことをせ、あーせんらい(先輩)から、んー先輩は私のこと教えて、私はその」(連体詞)料理のことを勉強します、これから勉強します」と受諾した。最後に、Kは20で「たぶん私も、その食べるほうがほんと好きですけど〈はい〉でも、自分で、作れば、んー作ればいいなー、私は今思っています」と積極的な態度に切り替えることによって、最後に「積極的合意形成」に至った。

以上から分かるように、CJLが被依頼側の場合、「最初は断るが最後に受諾した合意形成」の展開型には、被依頼側が問題解決に積極的に代案提示をし、依頼側がその代案に合わせる「積極的合意形成」もあれば(会話3、会話5)、依頼側が仕方なくその代案を受け入れた「消極的合意形成」もある(会話4)。いずれにせよ、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造には、「被依頼側の{代案提示}による合意形成」の展開型が優勢である。また、CJLからの{代案提示}の内容は、身内や友人という第三者に言及する傾向が分かる。

#### 4.4.2 代案の使用に関する考察

上記の分析から、代案の使用は再依頼から合意形成に至る断りの会話の展開構造の相違につながっていることが示唆される。代案の使用について、4.4.2.1節では被依頼側が{代案提示}をするか否かを「上下関係」の観点から考察し、4.4.2.2節では{代案提示}で第三者に言及するか否かを「互惠関係」の観点から考察を行う。

##### 4.4.2.1 被依頼側が{代案提示}をするか否かについて

やりとりする中で被依頼側が{代案提示}をするか否かという点で、JNSとCJLの間で質的な差異があった。今回の調査結果では、JNSが被依頼側の場合、JNSの被依頼側は積極的な代案提示を行わず、代案提示を依頼側に任せ、依頼側による代案提示に賛同するという「依頼側の{代案提示}による合意形成」の展開構造が多い。それに対して、CJLが被依頼側の場合、CJLの被依頼側は積極的な代案提示を行い、依頼側が被依頼側による代案提示に賛同するという「被依頼側の{代案提示}による合意

形成」の展開構造が多い。この結果は、蒙(2010)が DCT 調査から得た結論を検証することができた。蒙(2010)は、日本人会社員と中国人会社員を対象に、会社における依頼に対する断りの場面を調査した結果、「中国人社員は日本人社員に比べて {代案} を使用することが多い」(蒙 2010 : 17)ことを指摘している。今回 I-JAS のロールプレイのデータによる分析結果からもその傾向が窺える。

このような差異が生じる 1 つの要因として考えられるのは、社会の「上下関係」の厳しさである。日本は、世界的に見ても「上下関係の厳しい」(迫田他 2017 : 50)国で、上下関係を重要視している。そのため、「日本語の談話行為では、目上である聞き手に意見したり話し手の態度や感情を表明したりするのも控えるべきこと」(楠本 1995 : 7)とされている。「職場や学校での『先輩後輩』意識を根強くもち」(野村 2000 : 9)、アルバイト場面においても上下関係が影響していると考えられる。上司や目上には、自分の考えを主張しづらい雰囲気があるため、JNS の被依頼側はあまり積極的に代案提示をせず、代案提示を上司である依頼側に任せ、それに合わせることによって合意を形成する傾向にある。それに対して、「中国人は個人主義的志向があり、縦社会の観点で自分の立場を考えることはあまりしない」(本名・羅 2018 : 30)。つまり、上下関係はあるが、上下関係より個人的な感情を大事にする。このような母国文化の影響を受けて、CJL の被依頼側は、上下関係より自己意志の表明を優先するため、上司の依頼側に代案を提示するのではないだろうか。また、Chen et al.(1995)は CNS の代案の使用について、「代案」は直接的な衝突を避ける方法であり、被依頼側が相手のニーズを考えて提案することによって、自分の「誠意」や親切心を表すことも相手の面子を保つこともでき、また「断り」の相手の面目を脅かす力を和らげてくれる、と述べている。相手(店長)からの頼みを断らなくてはならない場合、問題解決のために有益と考えられる代案を出すことは CJL にとって、話者自身の「面子(メンツ)」(事を実現させる能力評価を指す)にかけて依頼されたことに協力を実現していく配慮である。同時に断りに伴う摩擦を修復する配慮にもつながる。

#### 4.4.2.2 {代案提示}で第三者に言及するか否かについて

代案の内容という点で、その {代案提示} で第三者に言及するか否か、CJL と JNS の間で質的な差異があった。CJL の被依頼側は、(22)、(23)、(24)のように、第三者の身近な友達や妹、クラスメートが手伝えると想定して彼らを紹介するという代案を提示するが、JNS の被依頼側の {代案提示} には、そのようなケースは見られなかった。

中国社会では、積極的に相手に依頼し、相手は自身の面子(メンツ)にかけて実現していくという繰り返しの中で、「関係(グワンシー)」は情緒的に結ばれていく(薛・坂本 2014)。沖他(2018 : 80)は、「中国社会では、依頼し合うことが『関係(グワンシー)』と呼ばれる社会的きずなを築く手立てとして機能している」と指摘している。つまり、「身内や友人同士は『頼り頼られ』が基本である」(井上 2013 : 131)中国人は、適度に「貸し」「借り」のやりとりを行うことによって「互惠関係」を構築する。『互惠関係』とは、実利を相互に与えることを目的として個人間で構築され、両者ともに、互いにそうした関係にあると認識している人間関係のことを指す。相手に対して、金品や手間を用立てる場合、自分も困ったときいには相手も見合わたった用立てをすること、また、それを両者がわきまえてその人間関係を構築しているのが『互惠関係』である(沖他 2018 : 84)。そのため、断る際に、「関係(グワンシー)」の間柄では、自身の代わりにより適切だと思われる人物にさらに依頼しその人物を紹介するという {代案} を提示することは、相手を助けようとする気持ちを示しながら問題を解決するための手段の 1 つとして好意的に受け入れられており、＜代わり紹介＞に抵抗がない<sup>41</sup>。依頼事を受けたが自力で実現できない場合、CJL の被依頼側は、相手の依頼を認めて普段から自分と「貸し」「借り」という互惠関係のある身内や友人という第三者への依頼を自分のことにすることにより、積極的に相手の PF に訴えかけた内容の代案が多いのである。加えて、依頼されることは自分の面子が評価されたことを意味し、依頼された第三者は、「関係(グワンシー)」に入る意思があれば、相手が起こした依頼を受容する

<sup>41</sup> 無論その {代案提示} の現実性や、代案を提示することはただ話を早く終わらせたいのではないだろうかという疑問がわくかもしれない。しかし、3.3 節の断られる側の意識調査を行ったところ、CNS の中には「『代わりに私が他の人に連絡するのはどう』という代案は手伝いたいという誠意が感じられる」(CNS3M)、「(略)『代わりに私が他の人に連絡するのはどう』という代案は心から手伝いたいという気持ちが感じられて、手伝いに来られなくても、その断りが理解できる」(CNS19F)という意見があった。そこに、断りの代わりに第三者を含む代案を提示することは CNS にとって好意に受けられることを思い知らされる。

ことによってさらに自分の「関係網」を広げることができる。

積極的に依頼し合うことによって人間関係を構築していく互惠関係構築の文化がある中国に対して、相手に頼むことからまず始める互惠関係構築の文化がない日本<sup>42</sup>では、他者に迷惑をかけずにまず「自分で解決していく姿勢(自助)」(沖他 2018 : 86)が暗黙のルールとして守られる。沖他(2018 : 86)によると、「日本社会では、(中略)、家族以外の、社会人としての人間関係のなかでは、重要な個人的依頼はできるだけ回避されるのが特徴である。それが友人であっても、あるいは、友人であるからこそ頼めない、という事態も生じてくる。(中略)『人には迷惑をかけないようにする』ことがよしとされ、その範囲は、親しい友人であっても当然のこととされ、場合によってはもっともウチの集団である家族に対しても精神的な姿勢として守られていく」。生越(2012a : 182)は日韓の「配慮」の示し方について研究したが、そこでも同様のことが指摘されている。

日本で＜代わりの紹介＞が少ない背景には、日本での人間関係のあり方が関係しているのではないだろうか。日本では他の人に負担かけることを避ける傾向があり、その中ではいろいろなことを頼み頼まれるような濃密な人間関係は成立しにくい。自分の代わりを他の人に頼めばその人に負担を掛けることになるので、＜代わり紹介＞という方法を取りにくいのだろう。

＜代わりの紹介＞の内容の{代案提示}は、もう 1 人の第三者を巻き込ませることで、依頼側と被依頼側の問題が依頼側と被依頼側、さらに友達あるいは妹、クラスメートという三者の問題になり、その第三者に負担を掛けることになる。加えて、第三者からの承諾の保証はなく、他人の立場に配慮しない提案者に無責任さを生じせしめる行為でもあるために、JNS の被依頼側は、第三者に言及する代案提示をせず、より直接的な対応をとる。

---

<sup>42</sup> 「互惠関係は、個人と個人で結ばれていくものであるのに対して、日本の社会文化においては、相手に迷惑をかけず自分で解決していく姿勢(自助)と同時に、困らないように共同体として助け合いのしくみをつくっていく姿勢(共助)が見受けられる」(沖他 2018 : 86)。

## 4.5 本章のまとめ

本章では、店長からの仕事内容の変更を断る場面で、再依頼から合意形成に至るプロセスにおける「断り」談話の展開構造を比較しながら分析した。その結果、JNS である店長の再依頼に対して最初は断るが最後に受諾した場合、JNS と CJL の被依頼側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造に共通点と相違点が観察できた。

まず、被依頼側が JNS か、あるいは CJL かを問わず、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造には、「積極的合意形成」と「消極的合意形成」がある。また、「消極的合意形成」から「積極的合意形成」に切り替わる場合もある。一方、相違点として、JNS が被依頼側の場合、「再依頼部」⇒「第 2 断り」⇒・・・⇒「第 n 依頼」(依頼側が {代案提示} をする)⇒「受諾部」⇒「受け入れ部」の展開のように、「依頼側の {代案提示} による合意形成」の展開構造で合意形成に至る場合が多い。また、その {代案提示} の内容は、その発話の場にいる登場人物に限られた。それは上下関係／自助が優先された「配慮」の示し方であり、「近づかない」という配慮の属性が反映されている。一方、CJL が被依頼側の場合、「再依頼部」⇒「第 2 断り」⇒・・・「第 n 依頼」⇒「第 n 断り」(のちに被依頼側が {代案提示} をする)⇒「受け入れ部」の展開のように、「被依頼側が {代案提示} による合意形成」の展開構造で合意形成に至る場合が多い。また、その {代案提示} の内容は、自分と親密な関係にある身内や友人など、第三の人物に言及した。それは自己意志／互惠関係が優先された「配慮」の示し方であり、「近づく」という配慮の属性が反映された結果である。したがって、代案の使用は、再依頼から合意形成に至る断りの談話の展開構造に影響するということが示唆された。以上の結果により、本研究の 2 つ目の課題「現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、JNS の断る側と CJL の断る側における、再依頼から合意形成に至る『断り』談話の展開構造を明らかにする。また、展開構造に違いがある場合、その要因を人間関係の構築の観点から明らかにする」、という課題を解明した。

再依頼は、「依頼」の言語行動の一部に位置づけられ、再依頼から合意形成に至る断り談話の展開構造を見ることで、「依頼—断り」の会話の全体像およびメカニズムを明

らかにすることの一助となると考える。学習者の言語行為が目標言語の語用論的規範と異なるために発話意図やポライトネスの伝達に失敗すること(語用論的失敗)<sup>43</sup>が考えられる。ここで、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造および、再依頼から合意形成に至るプロセスにおける、JNS と CJL の被依頼側の言語行動の特徴を踏まえ、日中接触場面の問題点を検討する。JNS の依頼側から、CJL の被依頼側の{代案提示}を見ると、ただの逃げ道、あるいは無責任な印象を受け、誤解される恐れがあると予想される。このような小さな誤解が徐々に不信感へとつながっていく。一方、JNS の被依頼側からの{代案提示}がないと、CJL の依頼側は、問題解決や人間関係の修復に積極的でない印象を受ける恐れがある。本章の結果から、異文化間コミュニケーションでは、言語そのものの誤りよりも、言語行動規範の違いの根源となる文化的背景の相違をよく理解し、それに注意を払いつつより良いコミュニケーションや人間関係の構築を図っていくことが期待される。

本章は分析対象が 14 組のみであり、また分析場面や人間関係も限られているため、結果を一般化するにはさらにデータ、場面や人間関係のバリエーションを増やす必要がある。また、代案を提示して依頼が受諾される場合(本研究の場合)もあれば、断りが成立する場合(最後まで断りを貫く場合)もあることが考えられる。したがって、最終的に断りが成立しても、その過程で再依頼を含む談話展開、特に代案提示後のやりとりの比較が必要である。その比較によって、再依頼から依頼が成立したことの意義を考察することができ、依頼も断りもコントロールできるようになるだろう。今後は、構造面からの考察をさらに進める必要がある。さらに、各母語の談話展開の特徴は、外国語学習時には母語干渉によって負の転移を起こして相互に誤解を引き起こす場合があるが、中国語母語場面のデータを含め、CJL の言語行動において母語干渉(語用論的転移)があるか否かを検証することを今後の課題とする。

---

<sup>43</sup> 語用論的失敗とは、「学習者が場面に不適切な発話をしてしまい、発話意図や聞き手への配慮の伝達に失敗すること」(清水 2018 : 51)をいう。

## 第5章 依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの日中 対照

### 5.1 談話展開のスタイルとは

国際化が進むとともに、異文化間コミュニケーションが活発に行われ、コミュニケーションのストラテジーや会話のルール、また異文化に対する考え方やその理解といった、様々な対照研究がなされてきた。近年特に多くなされてきた日英の対照研究からは、言語や文化による働きかけ方、談話展開における参加者の相互行為的特徴、また談話展開のスタイルが異なることが明らかになっている。

「聞き手」とは、「発話の意図された受け手」(『語用論キーターム事典』2014、ニコラス・E. アロット)を指す。日本語の会話での聞き手の役割の重要性から、1980年代以降の談話分析や語用論の確立に伴い、聞き手行動としてのあいづちに関する研究が数多くなされており、水谷(1988)は、日本語会話の特徴の1つとして聞き手があいづちを頻繁に打って話の流れに積極的に参加していることを指摘し、日本語会話の性格を「共話」という語を用いて表した。高梨・榎本(2009: 5)は、「コミュニケーションのプロセスは送信者(「話し手」)と受信者(「聞き手」)の間のやりの働きかけに受動的に応答する存在として捉えられていることが多かった」と指摘している。しかし、聞き手は、「うん」「はい」といったあいづち的な反応を発するほか、相手の発話を繰り返したり先取りをしたりしながら会話に参加する。コミュニケーションのプロセスにおける聞き手の役割について村田(2018: iii)は、「私的であれ公的であれ、会話の中で『聞き手』は話し手に対する単なるサポート役ではなく、共に会話を構築し、相互行為を通して人間関係の根幹を支える大きな存在である」と指摘している。聞き手の役割の重要性によって、「あいづちだけでなく、話し手の話に適合した反応や働きかけを返す相互行為の過程を聞き手行動の範囲に入れて分析することが可能」(植野 2012: 58)である。植野(2017)は日本人の聞き手行動を分析し、「聞くことは話すことの一部であり、聞き手であることと話し手であることの境界は極めて曖昧である。日本語会話における聞き方は、話し手と聞き手が独立した役割をもって構成する英語会話とは、



異なってしまうべきである」(同上：116)と指摘している。

大谷(2015a)は、参加者の話題への関与方法の観点から初対面会話の談話展開のスタイルを分析した。その結果、日本語母語場面では2割以上見られた *monologue style*、つまり、「1つの話題の枠組みの中で、1人が『話し手』となって話し続けるスタイル」(大谷 2015b:213)の話題展開は英語母語場面ではほとんど見られないと指摘している。初対面会話の談話展開のスタイルの違いは日本語話者と英語話者の聞き手の働き方の違いによるものであると考察し、日本人が英語の会話に参加できずにマイナスの評価を受ける原因の一端がこの談話展開のスタイルの違いにあると指摘している。言い換えれば、談話を展開させるために会話参加者がどのように関与するかによって談話展開のスタイルが異なる場合がある。

楊(2015)は初対面会話の分析の中で、「聞き手」よりもその役割を広く捉える「話題上の聞き手」という概念を新たに提示している。「話題上の聞き手」は、「相手の発話を話題の流れの中で理解し、話題について語る相手をサポートする役割を果たし、あいつちのほか、評価、質問などの実質的な発話も行う」(同上：65)。また、話題上の聞き手行動によって談話展開のスタイルも異なる(西川 2005、串田 2009、植野 2012)。談話展開のスタイルの相違は、「単に情報の伝達を阻害するだけではなく、よりよい人間関係の構築をも阻害する要因となる可能性がある」(大谷 2015a：7)。したがって、異なる社会文化で育てられる日本人と中国人には、談話を展開させる方法に何らかの違いがあり、その相違のために、談話展開のスタイルが異なり、何らかの誤解を招きかねないことが考えられる。

本研究では「談話展開のスタイル」を、『依頼—断り』の会話を話題上の話し手役割発話・聞き手役割発話に基づいて帰納され、話題上の話し手役割発話・聞き手役割発話の分布の様相によって分類された談話スタイル」と定義する。談話展開のスタイル、つまり話題上の話し手役割発話・聞き手役割発話(5.4.2.1 節で詳述)の分布の様相を分析するためには、河(2012)が提案している「自他志向」(5.6.2 節で詳述)という相互作用における言語行動の自己と他者の心理的欲求の概念を使うことが有効であると考えられる。本章では、「依頼—断り」のコミュニケーションのプロセスにおいて、会話参加者の断る側と依頼側がどのように会話に参加するかを「自他志向」の概念と関連付けてより細かい分析を行うことを通して、日本語と中国語の談話展開のスタイルの

特徴を明らかにする。

## 5.2 問題意識と研究動機

私たちは日常生活において、依頼を断らなければならないという状況にしばしば直面する。山口(1997 : 39)は、「依頼」と「断り」について次のような指摘を行っている(下線は筆者による)。

「依頼」は、話し手が自分の利益のために聞き手に働きかけることにより、両者間の均衡な状態を敢えて危険に晒す発話行為であるとする、と、「断り」は依頼などの発話行為により、聞き手によって均衡を崩されかけた状態を決定的にする危険性を持つ発話行為である。(中略)このように、この 2 つの発話行為は働きかけの方向性や行為の性質という点では正反対のものといえるが、一連のディスコースを形成し得るものとも考えられる。

初対面会話だけではなく、このように、働きかけの方向性や行為の性質という点では正反対の 2 つの発話行為から形成しうる依頼に対する「断り」の談話では、依頼側と断る側がいかに関与するかによって話題上の話し手役割発話・聞き手役割発話の分布の様相が異なり、談話展開のスタイルが異なることが考えられる。そこで、日本語と中国語の「断り」の会話例<sup>44</sup>を取り上げ、その談話が展開していくプロセスにおける話題上の話し手役割発話・聞き手役割発話の分布の様相を見ることを通して、依頼側と断る側がどのように関与するかを観察する。

<sup>44</sup> 会話例の表記のうち、1 文字目のアルファベットは母語(J : 日本語母語話者、C : 中国語母語話者)である。2 文字目の数字は調査協力者の番号であり、日中それぞれ J1～J40、C1～C40 の通し番号で示す。発話者が交替する箇所を 1 つの発話の区切りとし、発話者の前の数字は、会話冒頭からのターンの通し番号である。なお、本章で使用了文字化表記法は下記の通りである(談話が展開していくプロセスにおいて、依頼側と断る側がいかに関与するかを見るため、4 章の表記方法に以下の表記を追加した)。

[	音声为重なり始めている時点を示す
→	2 つの発話が途切れなく密着していることを示す
:	音の引き伸ばしを示し、: の数は音の相対的長さを示す
↑	上昇イントネーションを示す
?	中国語で疑問文であることを示す

## 会話例 1 日本語の会話

05	J35	JJ さんもしでしたら 調理のほうに 担当変わってもらってことはできませんかね：
06	J36	え：ちょっとそれは難しいですね
07	J35	あそう
08	J36	え 料理あんまり得意じゃないんですよ
09	J35	あ そうなんだ あの：まあ せつかくこう覚えるチャンスでもあるのかなってちょっと思ったりして こう仕事の幅を広げるっていうね 意味でも ちょっと手伝ってもらえると助かるんだけど
10	J36	やあでもほんとちょっと 料理は あんまり自信がないんでそれにあの：今お客さん がたくさん来てくれていて そのお客さんとこう接するのが え：楽しいなと(h)思ってるんで
11	J35	あ：そうなんだ：まあ 料理 調理自体じゃなくても ちょっとね あの 材料を揃えて野菜洗ったり 下ごしらえで↑ちょっと切るだけとかでも そういうこともちょっと 難しいですかね：：
12	J36	そうですね：

会話例 1 はコーパス I-JAS からの日本語の断りの会話例で、料理店の店長である J35 が依頼を導入した後のやりとりである。J35 の依頼に対し、06 で J36 が「え：ちょっとそれは難しいですね」と話題上の話し手役割発話をして躊躇いながら断っている。07 で J35 は「あそう」と話題上の聞き手役割発話をして理解を示し、08 で J36 は「え料理あんまり得意じゃないんですよ」と話題上の話し手役割発話をして自らの発話に対してさらに補足している。それに対し、09 で J35 は「あ そうなんだ」と話題上の聞き手役割発話をして理解を示しながら再依頼を試みたが、再び断られる。そして、11 で J35 は「あ そうなんだ」と話題上の聞き手役割発話をして理解を示し、情報や意見を提供した後、「そういうこともちょっと 難しいですかね：：」と述べて相手の意思を確認したが、それに対して J36 は「そうですね」と話題上の話し手役割発話をして相手の再依頼を断る。この会話例 1 のように、日本語の断り会話では、依頼側と

断る側が協調的に会話に参加することによって、話題上の話し手役割発話と話題上の聞き手役割発話が相互に生起している様相が観察される。

同様の場面における中国語の断りの会話<sup>45</sup>では、店長である C21 の依頼に対し、06 で C22 が「私ぜんぜん料理ができなくて 本当に」と話題上の話し手役割発話を話し出したところ、07 で C21 が間髪入れずに「大丈夫です 教える人がいるんですよ」と話題上の話し手役割発話をして新しい情報を持ち出している。08 で C22 の話題上の話し手役割発話が終わらないうちに、09 で C21 は「いや 勘違いですよ」と話題上の話し手役割発話をして割り込み、「シェフではなくて 手伝いの人手が足りないです」という情報を付け加える。それに対し、10 で C22 は「でも手伝いをしたら時間が奪われるかもしれないと思いますが 学校での勉強も忙しいです」と話題上の話し手役割発話をして理由説明で言い返す。この会話例2のように、中国語の断り会話では、依頼側と断る側が競合的に会話に参加することによって、話題上の話し手役割をめぐった競争している様相が観察される。

## 会話例2 中国語の会話

			日本語訳
05	C21	想让你去那做帮手 你去那还可以学两个厨艺不是	手伝いに行ってもらいたいです そっちに行ったら料理も勉強できるんじゃないでしょうか
06	C22	我{笑}一点都不会做饭 真的	私 {笑} ぜんぜん料理ができなくて 本当に
07	C21	没事 有人教你	大丈夫です 教える人がいるんですよ
08	C22	我做的饭是根本就是不能吃的 那种 并且{笑}并且我	私が作った料理は食べられないほどまずいです それに {笑} それに私

<sup>45</sup> 筆者が収集したデータであり、5.4.1 節で詳述する。中国語の会話の日本語訳は、原文理解の目安として筆者が直訳した。

---

→ 09 C21 不 你误会了 不是让你去当 いや 勘違いですよ シェフ  
主厨 就是他那缺一个帮手 ではなくて 手伝いの人手が  
足りないです

---

10 C22 帮手: 嗯 但是我觉得做帮手 手伝い: うん でも手伝いを  
可能会占用我比较多的时间 したら時間が奪われるかもし  
我在学校学习压力也挺大的 れないと思いますが 学校で  
の勉強も忙しいです

---

日本語の会話例 1 では、依頼側は断る側の発話に理解を示したり、意思を確かめたりするという話題上の聞き手役割発話をしながら依頼の話を進めたりする配慮が見られる。それに対して、中国語の会話例 2 では、05 から 10 まで、依頼側も断る側ともに自身の考えをより直接的に主張しているように、話題上の話し手役割発話をしながら相手に働きかける一方、互いに相手の語りに対し共感や理解、確認を行うなどの話題上の聞き手役割発話による相手への配慮が見られない。日中接触場面では、このように談話参与の仕方が異なる両者が交わった場合、話が円滑に進まない可能性が高い。中国人からすれば、意思疎通を欠いてしまう懸念が生じかねない。一方、日本人からすれば、相手にターンを奪われたりサポートをもらえなかったりする場合に圧迫感や不安を感じる可能性があり、加えて、中国人を無配慮な人だと誤解する恐れさえある。この誤解が出てくる理由の 1 つとして考えられるのは、JNS と CNS が相互作用における言語行動の内的要因である心理的欲求への求め方が異なることである。

本節では問題意識を述べた。次節では、談話展開のスタイルに関する先行研究を概観した上で、本章の研究目的を述べる。

### 5.3 談話展開のスタイルに関する先行研究と研究目的

談話展開のスタイルについては数多くの研究がなされている。それらは聞き手行動に基づく「働きかけ型」と「非働きかけ型」、また言語行動の目標に基づく「目的達成型」と「対人配慮型」という分類に大別できる。

### 5.3.1 「働きかけ型」と「非働きかけ型」について

異文化間コミュニケーションで参加者が前提とする会話の構築方法やスタイルに関する研究は、従来、聞き手行動に焦点を当て、初対面会話の分析を中心になされてきた。これらの研究では談話展開のスタイルの特徴について様々な用語で説明されてきたが、「働きかけ型」<sup>46</sup>と「非働きかけ型」というスタイルの差異としてまとめることができるだろう。申(2006)は、2 者間の初対面会話をデータとして日本語と韓国語での情報のやりとりにおける受信側の働きを分析した。分析の結果、日本語はあいづちや感想を中心とした共話的なスタイル、韓国語は情報要求や意見を中心とした積極的に談話展開に参加する対話的なスタイルであることが明らかになった。大谷(2015b)は、3 者間の初対面会話場面における日英の話題展開のスタイルの相違について、聞き手側の働きかけの違いから分析した。その結果、英語では聞き手側が積極的に話題の展開に関与するスタイルの「働きかけ型」が多用されているのに対し、日本語では消極的な聞き手の関与「非働きかけ型」が多用され、聞き手の話題展開への参与が英語に比較してかなり少ないと指摘している。楊(2015)は、2 者間初対面会話における話題上の聞き手行動の中日比較をした。「話題上の聞き手」という概念を新たに提起し、「話題上の聞き手は、相手の発話を話題の流れの中で理解し、話題について語る相手をサポートする役割を果たし、あいづちのほか、評価、質問などの実質的な発話も行う」(同：67)と述べている。そして、1 つの話題が展開していくプロセスにおいて、日本語母語場面では話題上の話し手と聞き手が比較的固定的であるのに対して、中国語母語場面では会話参加者の双方が話し手役割をめぐって交渉する場面も多く見られたと報告している。

### 5.3.2 「目的達成型」と「対人配慮型」について

「私たちは普段のコミュニケーションでは、自分の意図がきちんと相手に伝わるように(情報伝達)、しかしそのために相手を不快にさせないように(対人関係調整)、この両者のバランスをうまく取りながら会話をしている」(清水 2018 : 38)。話し手が「当

---

<sup>46</sup> 大谷(2015b)では、聞き手側が積極的に話題の展開に関与するスタイルを「働きかけ型」とし、その一方、消極的な聞き手の関与を「非働きかけ型」としている。

該の言語行動の目的を効果的に達成する」という指向性と「相手との関係を良好に保つ」という 2 つの指向性を併せ持っているとの考えは、ザトラウスキー(1993 : 75)や熊谷(1995、2000)、梶本(2004 : 22)で述べられており、本研究もこの考えに従って議論を進める。

木下(2006 : 103)は「断り」の言語行動の目標について、「(a)相手の意向に添えない旨を伝える、(b)対人関係を損なわない、の 2 点に集約される」と指摘し、「これらの目標を達成するために用いられる戦略は非優先構造を構成するために複雑化しやすく、また、その内容は社会文化的規範に左右される度合いも大きい」(同上 : 103)と指摘している。言語が異なれば、「情報伝達」と「対人関係調整」のバランスの取り方は同じではなかろう。堀田・堀江(2012)は、JNS と日本語学習者の「断り」行動におけるヘッジの使用に見られる相違を分析し、「日本語のコミュニケーションにおいて、『聞き手への配慮』の優先順位が韓国語・中国語のコミュニケーションにおいてよりも相対的に高い」(同 : 17)と述べている。つまり、日本語では韓国語・中国語より「対人配慮」が優先される。また、黄(2016)は、CNS と JNS の誘い談話における再勧誘の言語行動を比較した結果から、CNS は積極的に自分を強く押し出す「目的達成型」で、JNS は無理強いをしない「対人配慮型」であることを指摘している。

先行研究から分かるように、日本語の談話展開のスタイルは消極的な聞き手関与の「非働きかけ型」の傾向があり、相手を不快にさせないように配慮する「対人配慮型」が優先される。それに対して、英語や中国語の談話展開のスタイルは積極的な聞き手関与の「働きかけ型」の傾向があり、自分の意図を明確に伝える「目的達成型」が優先される。中国人が無配慮と思われかねない行動も、日本語とは異なる中国語の談話展開のスタイルの影響を受けている可能性があると考えられるため、本章では上述した談話展開のスタイルが、依頼に対する「断り」の言語行動で具体的にどう実現されているかを探る。

### 5.3.3 研究目的と研究課題

従来、「断り」に関する日中対照研究は、日本語と中国語の断りの戦略や断りに用いられる言語形式について、つまり断る側の言語行動を中心に研究してきた。

しかし、依頼と断りのやりとりは1回で終わるとは限らず、また、「断り」の言語行動は断る側が一方的に決定するのではなく、断る側と依頼側の協働行為として構成されるが、会話全般における依頼側と断る側の相互行為の実態は明らかにはなっていない。異文化間においては、依頼側と断る側のやりとりの違いによってその談話展開のスタイルに差異があるため、人に与える印象に差が出ており、ひいては人間関係を影響する恐れがある。そのため、「断り」の言語行動の研究は、依頼側の言語行動を含み、談話展開における依頼側と断る側の言語的相互行為を分析し、その上で談話展開のスタイルの特徴を明らかにすることが必要である。本章では、依頼に対する「断り」のロールプレイのデータの分析を通して、先行研究が提示した談話展開のスタイルが「断り」の言語行動で具体的にどのように再現されるかを明らかにすることを目的とし、本研究の3つ目の課題に取り組む。

**研究課題 3：**現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、話題上の話し手・聞き手の役割交替の様相の分析を通して、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの特徴を探る。また、談話展開のスタイルの違いには JNS と CNS のどのような心理的欲求が反映されているかを明らかにする。

## 5.4 研究方法

5.4.1 節では分析資料としたデータの収集方法を述べる。5.4.2 節では話題上の話し手役割と聞き手役割発話のコーディング方法、および役割交替の判定方法について述べる。

### 5.4.1 データ

本章では、同一の条件の下での断る側と依頼側における交渉実態を観察するため、日中各 20 組のロールプレイのデータを調査対象とする。JNS 同士による日本語の会話データは、I-JAS(国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター)における、依頼側の役を演じた JNS の調査実施研究者 2 名(女性、国立国語研究所に属する)と、被依頼側



の役を演じた JNS の調査協力者の 20 代から 30 代までの大学生・大学院生 20 名(男性 9 名、女性 11 名)間の「断り」の場面(アルバイト先でホール担当から調理担当に変わるように依頼され断る)のロールプレイのデータを用いた。

CNS 同士による中国語の会話データは、中国語のロールプレイは I-JAS にはないため、I-JAS における JNS 同士のロールプレイと同じ設定で、筆者が中国語版のロールプレイカードを作成し、2019 年 3 月に、中国の教育機関(O 大学)で、日本語学習経験のない母語が中国語の 20 代の学生 40 名(男性 8 名、女性 32 名)を対象としてデータを収集した<sup>47</sup>。日本語版のロールプレイカードは付録 V-1、中国語版のロールプレイカードは付録 V-2 を参照されたい。中国語版のロールプレイカードについて、断る側のロールカードは迫田他(2016: 221)におけるロールプレイ翻訳版―“角色扮演(2)”をそのまま使用した。一方、日本語のロールプレイでは、依頼側は調査実施研究者が演じるために、依頼側のロールカードはない。そのため、依頼側のロールカードは、筆者が断る側のロールカードの内容を参考に“角色扮演(1)”(付録 V-2 中国語版のロールプレイカード 依頼側のロールプレイカード参照)として作成した。

I-JAS では、「断り」という機能を見るために JNS の調査実施研究者はロールプレイの依頼側として、JNS の調査協力者(依頼される側)と 2 人組で「依頼―断り」のロールプレイを行ったものを録音している。しかし、筆者はすでにこのロールプレイのデータを読んでいること、また何年も日本語を勉強した経験から中国語で話す際であっても日本語の影響を受ける恐れがあることを鑑みて、依頼側としてロールプレイを行うことは不適切であると判断し、CNS の調査協力者同士でロールプレイを実施することにした。調査協力者には、中国語版のロールプレイカードを与え、具体的な会話の展開は協力者自身の判断に委ねた<sup>48</sup>。筆者はそれを録音した。研究倫理を遵守し、収集したデータは研究以外の目的では決して使用しないこと、個人情報には保たれることなどを事前に調査協力者に説明し、調査協力者から受諾を得た。

<sup>47</sup> 談話展開のスタイルには性差による差異がある。I-JAS における日本語のデータは調査実施研究者 2 名(女、国立国語研究所に属する)が依頼側で、調査者協力者が断る側であるのに対し、中国語データは依頼側も断る側も調査協力者である。日本語データの依頼側は固定された 2 名の研究者であるため、依頼側の談話がある程度同一のスタイルになる可能性は否めないが、この点については今後の課題とする。

<sup>48</sup> 会話参加者が置かれている状況の内容だけを設定した。会話の時間は制限しなかった。

## 5.4.2 コーディングの方法

話題上の話し手役割と聞き手役割発話のコーディング方法、および役割交替の判定方法について述べる。

### 5.4.2.1 話題上の話し手役割・聞き手役割発話のコーディング方法

コーディングは、相手の発話が完了していない間の「聞いていることを示す」あいづちを除く、依頼から合意形成までの段階におけるすべての発話を対象とする。依頼に対する「断り」の談話展開における役割交替の生起状況を見るため、まず、依頼側と断る側によるすべての発話を、「話題上の話し手役割発話」と「話題上の聞き手役割発話」に帰納する。楊(2015)の定義を参考に、話題上の話し手・聞き手役割発話の判断基準を表 5-1 に示す。

表 5-1 話題上の話し手・聞き手役割の発話の判定基準(楊 2015 を筆者が整理)

発話	発話の性質
情報や意見を提供する発話	話題上の話し手役割発話 (以下【話】と略す)
自らの情報・意見提供の発話に対して、さらに繰り返しや言い換え、評価を行う発話	
相手の評価や確認発話に対して肯定または否定の応答をする発話	
情報や意見を求める発話	話題上の聞き手役割発話 (以下【聞】と略す)
相手の情報・意見提供の発話に対して、繰り返し、言い換え、先取り、評価を行う発話、理解や確認を行う発話	

次に、会話の構造的単位「ターン」<sup>49</sup>について「話者が交替することではっきりと明示されるもので、他者の音声言語の連続によって区切られる音声言語の連続」という定義にしたがい、会話をターンごとに区切る。1つのターンに複数の発話がありそれらの発話の役割が異なる場合(例えば、1つのターンに複数の発話があり、それらの複数の発話には話題上の話し手役割発話と聞き手役割発話が併存している場合)、ターンの受け継ぎという観点から、後続するターンの発話も考慮してターン全体の主たる役割を1つに決める。

話題上の話し手・聞き手役割発話のコーディングの例を次の会話例3に示し、説明を行う。

### 会話例3 話題上の話し手役割発話と聞き手役割発話のコーディング

---

- 03 J1 えっと：JJ さんすいません ちょっと今日はお願いがあつて来てもらったんですけど えっと今ホールの仕事をや 接客のほうをやってもらってますよね でえっと：実は え キッチンの人が1人辞めてしまったので あの：そっちのヘルプをお願いしたいんですが できますか↑ 【聞】
- 04 J2 えっと そうですね 僕は料理ほうが苦手なんで できれば ちょっと {笑} [お断りしたいんですけど] 【話】
- 05 J1 [そうですか↑まあでもあの 料理のほうは あのマニュアルもあるし 少しずつ覚えていってもらえれば それでいいんですけどね] 【話】
- 06 J2 え：：そうですねでも まあ元々その接客の仕事やりたいなと思って あの ここのアルバイトも応募して で今その仕事に大分慣れてきて結構常連さんお客さんとちょっと {笑} [お話ししたりしたりとか することもあつて できたらそっちのほうで 続けていきたいなっていうふうに {笑} 思ってるんですよね] 【話】
- 

<sup>49</sup> 「ターン」についての記述は、生田(2012)と楊(2015)の記述を参照した。

---

07	J1	[そっか そうか：{笑} ん：そうですね でも まあねえ料理できると人生これから得ですけど {笑} どうですか↑	【聞】
08	J2	{笑} そうですね：：ん：：：そう：：：：：：	【話】
09	J1	やっぱりでも	【聞】
10	J2	でもやっぱり今 料理のほうについていうとちょっと {笑}	【話】
11	J1	そっか 気が乗らない↑	【聞】
12	J2	できれば {笑} 接客のほう続けて：いきたいなっていう	【話】

---

13	J1	あ：そーか：分かった じゃあ他の人を当たってみることにしますね <sup>50</sup>	
----	----	---	--

---

08 行目で「{笑} そうですね：：ん：：：そう：：：：：：：」という J2 の発話がある。この前半部分の「{笑} そうですね：：」は、J1 の意見提供の発話に対して理解を行う発話であるため、【聞】に該当する。この後半部分の「ん：：：そう：：：：：：：」は、I-JAS における音声データのイントネーションによって、理解発話ではなく、07 行目の J1 の確認発話「どうですか↑」に対する断りの意思を示す発話であると判断できるため、【話】に該当する。このように、1 つのターンに複数の発話がありそれらの発話の役割が異なる（【聞】と【話】がある）場合、ターンの受け継ぎ（「ん：：：そう：：：：～」は先行するターン「どうですか↑」への断りである）という観点から、後続するターンの発話（後続するターン「やっぱりでも」は気配り発話の「やっぱりでもダメですかね」の省略と見なすことができ、それは J2 の「ん：：：そう：：～」という断りの意思への確認である）も考慮したターン全体の主たる役割を【話】にコーディングする。

話題上の話し手・聞き手役割発話のコーディングの信頼性は、第一認定者(筆者)と第二認定者(日中両場面ともそれぞれ大学院生の母語話者 1 人)の間の判定の一致率にて判断する。表 5-1 の話題上の話し手・聞き手役割発話の判断基準およびコーディングの単位に照らして、全体の 2 割(全ペア 40 組のうち 8 組、その中で日本語の会話と

---

<sup>50</sup> このターンの前で依頼側は断る側の意思を認め、このターンでは「依頼—断り」の交渉は済んでいるため、役割を示さない。

中国語の会話各4組)の分析資料を筆者と協力者それぞれがコーディングし、その一致率を求めた結果、中国語の会話は90%、日本語の会話は87%であった。一致しなかった箇所は協議により認定し、残りのデータについては筆者が認定した。

#### 5.4.2.2 話題上の役割交替の判定方法

話題上の役割交替について、楊(2015:72)によると、「役割交替が起こらない場合は、『1A 話し手役割発話→2B 聞き手役割発話→3A 話し手役割発話→4B 聞き手役割発話』のように、話し手役割発話と聞き手役割発話が交互に生起する。一方、役割交替が起こる場合は、『1A 話し手役割発話→2B 話し手役割発話』や『1A 話し手役割発話→2B 聞き手役割発話→3A 聞き手役割発話』のように、後続のターンの役割は先行ターンの役割と同じである」。本研究も、先行ターンと同じ役割を持つターンを「同一役割連続生起」と捉えることとする。

### 5.5 分析結果

まず5.5.1節で「同一役割連続生起」の生起頻度から日中話題上の役割交替の様相を示す。次に5.5.2節で、この役割交替の様相が談話展開のスタイルにどのように関わるかを探る。「話題上の話し手役割発話」と「話題上の聞き手役割の発話」の生起状況を手がかりに、日中談話展開のスタイルについて5.5.2.1節で質的分析を、5.5.2.2節で量的分析を行う。

#### 5.5.1 談話が展開していくプロセスにおける話題上の役割交替

話題上の話し手と聞き手役割交替が生起した頻度については、表5-2に示すように、話題上の役割交替が生起する回数は、日中ともに、役割交替生起ありより役割交替生起無しのほうが多い。しかし、役割交替生起無しのターンについて、日本語では79%に達しているのに対し、中国語では全体の約半分(55%)にとどまっている。この結果から、断りの談話が展開していくプロセスにおける話題上の役割交替は、中国語では

日本語よりも頻繁に起こっており、「同一役割連続生起」が多いと言える。

表 5-2 話題上の役割交替の生起状況の日中比較(実数と割合)

	役割交替生起無し	役割交替生起あり	ターン総数
日本語	<b>242(79%)</b>	64(21%)	306(100%)
中国語	<b>120(55%)</b>	98(45%)	218(100%)

次に、話題上の役割交替が起こっている場合、それは話題上の話し手から聞き手への交替か、あるいは話題上の聞き手から話し手への交替かについて検討する。表 5-3 は、話題上の役割交替が起こっている場合に、日本語と中国語それぞれの談話における役割交替状況を示したものである。

表 5-3 話題上の役割交替状況の日中比較(実数と割合)

	話し手役割→ 聞き手役割	聞き手役割→ 話し手役割	役割交替 生起総数
日本語	28(44%)	<b>36(56%)</b>	64(100%)
中国語	20(20%)	<b>78(80%)</b>	98(100%)

表 5-3 に示す通り、日中ともに、聞き手だった参加者が自分のターンで話し手役割の発話をすることによって役割が交替する場合が多い。しかし、全体に占める割合には差異が見られ、中国語では、日本語よりも多く、80%に上った。この結果から、中国語では、断りの談話が展開していくプロセスにおいて、依頼側も断る側も話題上の聞き手として相手の話をサポートすることが少なく、その代わりに話し手役割をめぐって競合している場合が多いと言える。

## 5.5.2 談話展開のスタイル

次いで、役割交替の様相が談話展開のスタイルにどのように関わるかを探るために、「話題上の話し手役割発話」と「話題上の聞き手役割の発話」の生起状況を手がかりに、談話展開のスタイルを分析する。5.5.2.1 節では談話展開のスタイルを質的に分析して類型化した結果を示す。5.5.2.2 節ではそれぞれ類型化した談話展開のスタイルの割合の日中比較をした量的分析を行い、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の言語行動における談話展開のスタイルの傾向性を示す。

### 5.5.2.1 談話展開のスタイルの質的分析

楊(2015)は、女子大学生・大学院生同士の初対面会話を話題上の話し手・聞き手役割の観点から分析し、話題上の話し手役割発話と聞き手役割発話の生起状況の特徴を類型化した。その結果、大きく(1)役割固定型、(2)協調的役割交替型、(3)役割回帰型、(4)話し手役割競合型の4つの話題展開のパターンに分類した。しかし、本研究ではこの分類に若干の修正を加えた。まず、本研究のデータでは(2)協調的役割交替型が見られなかった。また、(3)役割回帰型は、さらに「協調的役割回帰型」と「一時競合的役割回帰型」に分けることができた。以下、楊(2015)の分類を参考にしてそれぞれのパターンの会話例を取り上げて分析する。

#### (1)役割固定型

役割固定型は、話題が導入されてから収束するまでのプロセスにおいて、一方が話題上の話し手、もう一方が話題上の聞き手として参入し、役割の入れ替わりが生起しないパターンである。会話例4は日本語の会話の1例である。J35は担当変更についてJ36に「調理のほうに担当変わってもらってことはできませんかね」と意見を聞きながら話題を導入した。この話題は12まで続き、13で依頼の話題が終わる。依頼の話題の導入から終結までのプロセスにおいて、J35は聞き手、J36は話し手として会話に参入し、話し手と聞き手の役割は固定的である。

会話例 4 日本語の会話 役割固定型(会話例 1 再掲)

			役割	
			J35	J36
05	J35	JJ さんもしできたら 調理のほうに 担当変 わってもらってことはできませんかね：	【聞】	
06	J36	え：ちょっとそれは難しいですね		【話】
07	J35	あそう	【聞】	
08	J36	え 料理あんまり得意じゃないんですよ		【話】
09	J35	あ そうなんだ あの：まあ せっかくこう覚え るチャンスでもあるのかなってちょっと思っ たりして こう仕事の幅を広げるっていうね 意 味でも ちょっと手伝ってもらえると助かるん だけど	【聞】	
10	J36	やあでもほんとちょっと 料理は あんまり自 信がないんでそれにあの：今お客さん がたく さん来てくれていて そのお客さんとかう接す るのが え：楽しいなと(h) 思ってるんで		【話】
11	J35	あ：そうなんだ：まあ 料理 調理自体じゃな くても ちょっとね あの 材料を揃えて野菜 洗ったり 下ごしらえで↑ちょっと切るだけとか でも そういうこともちょっと 難しいです かね：	【聞】	
12	J36	そうですね：		【話】
13	J35	ん：わかりました じゃあ あのホールの方 で はい接客の方ね あの ずっと やって もらってるんで		



## (2) 協調的役割回帰型

協調的役割回帰型は、片方の参加者が聞き手から話し手へ、または話し手から聞き手へと役割を切り替えた場合、もう一方の参加者は相手に合わせて役割を切り替える動きが見られたものの、役割交渉のやりとりを経て、最終的にはまた元の話し手・聞き手役割に戻るパターンである。話題が展開していくプロセスにおいて、話題上の話し手・聞き手役割の協調的な入れ替わりが1回以上生起し、且つ該当箇所以外のやりとりはすべて役割が固定的である。

会話例5は日本語の会話の1例である。03でJ17が聞き手発話で依頼の話題を導入し、05まで聞き手役を務める。07でJ17は話し手役割の発話をし、聞き手から話し手へと役割を切り替える。それに合わせて、08でJ18は聞き手役割の発話をして聞き手に回る。つまり、これをきっかけとして、それまでの話し手・聞き手が入れ替わった。そして、09でJ17はまた聞き手役割発話をし、聞き手役割に回帰する。それに応じて、10でJ18は話し手役割の発話をして、話し手役割に回帰する。この例に見られるように、協調的役割回帰型は、局所的な話し手・聞き手役割の交替が見られるものの、最終的に元の話し手・聞き手の役割に戻り、且つ相手の役割変更に合わせて自らの役割を調整することが特徴的である。

### 会話例5 日本語の会話 協調的役割回帰型

			役割	
			J17	J18
03	J17	あの急に あの：調理の人が1人辞めてしまったので あの接客のほうから調理に代わってもらいたいんですけど：お願いできませんかね	【聞】	
04	J18	一応僕あの：接客が好きで：あの 接客一あのお客さんに関わったりするのが楽しいので今このまま接客を続けていきたいなと 考えて いるんですけれども		【話】

05	J17	あ：そうですか：あの：：すごくあの 接客 し てるのも すごく 合ってる仕事だと思うんです けど：あの：今から たぶん料理ができて 損は ないので ちょっと試しにやってみるっていうの はどうですかね 興味ないですか↑料理は	【聞】
06	J18	料理 まあ興味ないことはないんですが：まやっ ぱりその お客さんとお話ししたりとか する中 でのほうが今楽しいと思って やりがいを感じて いるので このまま続けていけたらなと 考えて いまして	【話】
07	J17	あ：そうですか：なんかあの：：J Jさんおいし い物とか賄いとかも よくいろんなコメントとか くださるじゃないですか だからあの調理の あ の 料理長 もすごくちょっと筋があるんじゃない かってゆう話でちょっとひきぬ、引き抜けたら って なんかあたしのほうに相談があったので 今回話して見たんですけど	【話】
08	J18	そう ね	【聞】
09	J17	どうしても接客のほうがいいですかね	【聞】
10	J18	接客のほうが いいですね	【話】
11	J17	あ：そうですか ちょ ちょっとやってみるって のも 難しいですか↑	【聞】
12	J18	ん：まできたら その接客がいいなと思います	【話】
13	J17	あ そうですか わかりましたじゃあちょっと他 の人に 声掛けてみることにします	

### (3)一時競合的役割回帰型

一時競合的役割回帰型は、片方の参加者が聞き手から話し手へ、または話し手から聞き手へと役割を切り替えた場合、もう一方の参加者は相手に合わせて役割を切り替える動きが見られず、役割交渉のやりとりを経て、最終的にはまた元の話し手・聞き手役割に戻るパターンである。話題が展開していくプロセスにおいて、このような役割交渉のやりとりが一時的に見られ、且つその他のやりとりは役割固定型または協調的役割回帰型に分類される場合を、一時競合的役割回帰型とする。

会話例 6 は日本語の会話の 1 例である。03 で J1 が聞き手役割の発話で依頼の話題を導入し、04 で J2 はその依頼を断り、話し手の役割を務める。その発話に対して 05 で J1 は「少しずつ覚えていってもらえればそれでいいんですけどね」と意見を述べ、話し手役割の発話を維持した。それに対し、06 で J2 はまた相手の発話に対して否定の応答をし、話し手の役割を維持した。J2 の回答を受けて 07 で J1 はまた聞き手役に戻る。競合的役割回帰型は、この例に見られるように局所的な話し手・聞き手役割の交替が見られるものの、最終的に元の話し手・聞き手の役割に戻り、且つ相手の役割変更にも協調せず、一時的に自らの役割を維持するのが特徴である。

#### 会話例 6 日本語の会話 一時競合的役割回帰型(会話例 3 再掲)

		役割	
		J1	J2
03	J1	えっと：JJ さんすいません ちょっと今日はお願い が あって来てもらったんですけど えっと今 ホールの仕事をや 接客のほうをやってもらって ますよね でえっと：実は え キッチンの人が 1 人辞めてしまったので あの：そっちのヘルプ をお願いしたいんですが できますか↑	【聞】

04	J2	えっと　そうですね　僕は料理ほうが苦手なんで できれ　ばちょっと {笑} [お断りしたいんですけ ど	【話】
05	J1	[そうですか↑まあでもあの　料理のほうは　あの マニュアルもあるし　少しずつ覚えていってもら えれば　それでいいんですけどね	【話】
06	J2	え：：そうですねでも　まあ元々その接客の仕事 やりたいな　　と思って　あの　ここのアルバイト も応募して　で今その仕事に大分慣れてきて結構 常連さんお客さんとちょっと {笑} [お話したりし たりとか　することもあるって　できたら　そっち のほうで　続けていきたいなっていうふうに {笑} 思ってるんですよ	【話】
07	J1	[そっか　そうか： {笑} ん：そうですね　でも まあ　ねえ料理できると人生これから得です けど {笑}　　どうですか↑	【聞】
08	J2	{笑}　そうですね：：ん：：：そう：：：：：：	【話】
09	J1	やっぱりでも	【聞】
10	J2	でもやっぱり今　料理のほうにっていうとちょ っと {笑}	【話】
11	J1	そっか　気が乗らない↑	【聞】
12	J2	できれば {笑}　接客のほう続けて：いきたい なっていう	【話】
13	J1	あ：そーか：分かった　じゃあ他の人を当たって みることにしますね	

#### (4)話し手役割競合型

話し手役割競合型は、会話の参加者の双方とも、相手の話し手役割の発話を受けても引き続き話し手として振る舞い続け、話し手役割の発話が複数回連続して生起する場面が見られるパターンである。1つの話題区分の中にこのやりとりが1箇所以上見られたものを、話し手役割競合型とする。会話例7は4回以上続いたものである。

#### 会話例7 中国語の会話 話し手役割競合型

			役割	
			日本語訳	
	C25	C26		
01	C21	<p>现在事情是这样的 今はこういう状況なんで 【聞】</p> <p>因为后厨之前不是 すが この前は調理の方</p> <p>有两个人吗 现在 は2人いたでしょう 今</p> <p>那个帮手他已经走 1人がいなくなったので</p> <p>了 然后就是让你 君に行ってもらいたいで</p> <p>去 就是这个做菜的 す っていうか調理は1</p> <p>师傅他自己一个人 人では手が回らないです</p> <p>忙不过来 我这边 とりあえずそっちに行っ</p> <p>呢就是想先让你去 て手伝ってもらって 適</p> <p>那边帮一下 等到 当な人が見つかったらま</p> <p>我找到合适的人以 たホールのほうに戻って</p> <p>后到时候你再换回 もらっていいですか</p> <p>来 行吗?</p>		
02	C22	<p>是说让我去后厨帮 料理のほうに手伝いに行 【聞】</p> <p>忙吗? 还是说一边 くということですか そ</p> <p>帮忙 这边点餐的工 れとも手伝いながらホー</p> <p>作也是我负责呢? ルの仕事も担当しますか</p>		

03	C21	点餐呢 不还有其 他人吗 就是因为 咱们做饭店呢 就 是服务嘛人家点个 菜时间长了怠慢了 也不好 就咱们这 边后厨做饭比较慢	ホールって 他の人がい るじゃない うちの店は サービス業ですね お客 様が注文されてから長く 待たせることはよくあり ません 料理のほうはち よっと遅いです	【話】	
04	C22	是让我去做菜吗?	料理の担当に行ったほう がいいですか↑	【聞】	
05	C21	想让你去那做帮手 你去那还可以学两 个厨艺不是	手伝いに行ってもらいた いです そっちに行った ら料理も勉強できるんじ ゃないでしょうか	【話】	
06	C22	我{笑}一点都不会 做饭 真的	私{笑} ぜんぜん料理が できなくて 本当に	【話】	【話】
07	C21	没事 有人教你	大丈夫です 教える人が いるんですよ	【話】	【話】
08	C22	我做的饭是根本就 是不能吃的那种 并且{笑}并且我	私が作った料理は食べら れないほどまずいです それに{笑}それに私		【話】
→ 09	C21	不 你误会了 不 是让你去当主厨 就是他那缺一个帮 手	いや 勘違いですよ シ ェフではなくて 手伝い の人手が足りないです	【話】	【話】
10	C22	帮手.: 嗯 但是我 觉得做帮手可能会 占用我比较多的时 间 我在学校学习 压力也挺大的	手伝い.: うん でも手 伝いをしたら時間が奪わ れるかもしれないと思 いますが 学校での勉強も 忙しいです		【話】

11	C21	嗯 咱们这边可以给你加点工资 你看怎么样?	うん 給料を少し高くできますけど どうでしょうか↑	【聞】
12	C22	{笑} 拿工资来诱惑我 这不是工资能那个啥的事我觉得	{笑} 給料を餌にしていただいてもこれは給料の問題ではないと思います	【話】
13	C21	而且咱们是暂时让你去那边帮忙 不是说长期让你在那边干着 你可以考虑一下	しばらくそっちに行って手伝いをしてもらうのであってずっとそっちで働くんじゃないです ちょっと考えたらどうでしょうか	【聞】
14	C22	嗯:: 店长我觉得这个事我考虑好了 我觉得我还是想做点餐的工作 因为我对自己的做菜能力以及各方面并不是特别的自信 我怕再万一给搞砸了 那是不是更不好呀	うん:: 店長私もう決めました やはりホール担当をやりたいです 料理の能力や他の方面ではあまり自信がないので 万一が何か大変なことを起こしてしまったら もっとご迷惑をかけることになるんじゃないでしょうか	【話】
15	C21	嗯 行吧	ん まあ	

会話例7は中国語の会話の1例である。01でC21が依頼の話題を導入し、C22の意見を聞く。その依頼について02でC22は情報確認をし、05までのやりとりでC22は聞き手で、C21は話し手である。しかし06でC22は引き続き話し手役割の発話をし、10までC21とC22が話し手役割をめぐって相手の発話に対して自分の意見を述べ、競合している様相が見られる。

本節では談話展開のスタイルの質的分析を行った。次節では談話展開のスタイルの傾向を見るため、量的分析を行う。

### 5.5.2.2 話題展開のスタイルの量的分析

4つのパターンそれぞれが全体に占める割合を日中で比較した結果を表5-4に示す。

表 5-4 談話展開の各パターンの生起頻度の比較(実数と割合)

	役割 固定型	協調的役割 回帰型	一時競合的役割 回帰型	話し手役割 競合型	計
日本語	1(5%)	<b>10(50%)</b>	<b>9(45%)</b>	0(0%)	20(100%)
中国語	2(10%)	2(10%)	5(25%)	<b>11(55%)</b>	20(100%)

日本語では「協調的役割回帰型」が最も多く(50%)、次に多いのは「一時競合的役割回帰型」(45%)である。「協調的役割回帰型」と「一時競合的役割回帰型」は、「話し手役割競合型」のように話し手役割の発話が複数回連続して生起するパターンではないため、この2つを「協調的・一時競合的役割回帰型」としてまとめた。それに対して、中国語では「話し手役割競合型」が最も多い(55%)。この結果からは、依頼に対する断りの談話においては、JNSは「協調的・一時競合的役割回帰型」に集中しているのに対し、CNSは「話し手役割競争型」の談話展開のスタイルに集中していると言える。特に、「話し手役割競合型」の談話展開のスタイルは、中国語では55%の割合で用いられているのに対して、日本語では1例も見られなかった。この結果から、日中では談話展開のスタイルに大きな違いがあり、JNSに比べてCNSは、依頼側と断る側がともにより頻繁に話し手役割をめぐって交渉するという傾向がある。これは、談話展開のスタイルに関する先行研究と合致する結果である。先行研究の結果と合わせてまとめると、日本語では「協調的・一時競合的役割回帰型」の談話展開スタイルが特徴であり、対人配慮が優先され、非働きかけの共話的スタイルが優位である。それに対して、中国語では「話し手役割競合型」の談話展開スタイルが特徴であり、目的達成が優先され、働きかけの対話的スタイルが優位であるということになる。



## 5.6 考察

考察はまず、5.6.1 節では本章の分析結果と楊(2015)の結果を比較し、その差異が生じる原因について考える。次に、5.6.2 節では日中間における談話展開のスタイルの違いを「自他志向」の観点から、それが JNS と CNS の心理的欲求をどのように反映しているかについて考察する。

### 5.6.1 楊(2015)の結果との比較

楊(2015)は日中ともに役割固定型が最も多いと指摘しているが、本研究のデータでは JNS、CNS を問わず役割固定型が極めて少なかった。それは、場面の性質の違いに起因するものと考えられる。楊(2015)は 2 者間初対面場面の会話である。このような場面は円滑な会話の協働構築を前提としている。一方が話し手として振舞う場合、もう一方は聞き手として振舞うというやりとりの特徴が日中で共通していると考えられる。しかし、本研究は依頼に対する断りの場面の会話である。相反する目的を持つ依頼側と断る側は、円滑な会話の協働構築を前提とするものの、自分の目的を達成するためには役割を維持することが難しいと考えられる。

しかし、楊(2015)の指摘を支持する本研究の結果もある。楊(2015 : 78)は、日本語母語場面と比べ「中国語母語場面では、話題上の聞き手役割不在に対する許容度が高く、相手のサポートへの依存度が相対的に低い」と述べた。本研究での、依頼に対する「断り」の談話における展開スタイルにおいても、なぜ日本語では「協調的・一時競合的役割回帰型」が優勢であるのに対し、中国語では「話し手役割競争型」が優勢である。その原因を河(2012)が指摘した、相互作用における言語行動の動機づけの内的要因である、自己と他者における心理的欲求のあり方から考察を行った。

### 5.6.2 談話展開のスタイルと「自他志向」との関連性

本章の分析結果では、日本語と中国語では談話展開のスタイルに大きな差異が見ら

れた。その差異の背後に、「自他志向」という相互作用における言語行動の自己と他者の心理的欲求があることを指摘する。河(2012 : 45)は、「社会における自己と他者は相互共存的・依存的な関係であるゆえに、われわれの相互作用における言語行動の内的要因である心理的欲求には、『自己志向』と『他者志向』の2つの欲求を併せて持つ」と提案している。「自己志向」とは「自己の領域を求め、心理的に自己に対する配慮を優先する欲求」(同上 : 51)で、「他者志向」とは「他者との肯定的な関係を求め、心理的に他者との融合を重視する欲求」(同上 : 51)である。談話展開のスタイルは話題上の話し手役割発話・聞き手役割発話の分布の様相によって決められる。話題上の話し手役割発話を取るか、あるいは話題上の聞き手役割発話を取るかは言語行動の1つであるため、河(2012)が提案している「自他志向」の心理的欲求の概念を援用し、談話展開のスタイルについて説明する。

中国語の会話で多く見られる、情報や意見を提供する側面が重視されている「話し手役割競争型」の談話展開のスタイルは、自己に対する配慮を優先する「自己志向」の心理的欲求を反映している。したがって、CNS はより「話し手志向(speaker-oriented)」という役割志向態度の言語行動をとり、且つ会話において相手のサポートへの依存度が相対的に低く、話題上の聞き手役割不在に対する許容度が高い。また、「相手の発話や行為に言葉で反応することが日本語ほど重要ではなく、いちいち言葉で反応しなくても、相手の発話や行為を無視していることにはならない」(井上 2020 : 214)。

それに対して、日本語の会話で多く見られる、対人関係に配慮する側面が重視されている「協調的・一時競合的役割回帰型」の談話展開のスタイルは、他者との融合を重視する「他者志向」の心理的欲求を反映している。したがって、JNS はより「聞き手志向(hearer-oriented)」という役割志向態度の言語行動をとり、且つ会話において話し手役割をめぐって交渉する状態は一時的に見られるとしても、長く続かず、理解や確認など聞き手役割発話によって、相手と融合的に関わりながら円滑な会話の協働構築に戻る場合が多い。この傾向は、藤井(2018)の日本語はより聞き手志向の言語行動をとり、中国語はより話し手志向の言語行動をとっているという研究結果と一致して

いる<sup>51</sup>。つまり、JNS はより「聞き手志向」という役割志向態度の言語行動を、CNS はより「話し手志向」という役割志向態度の言語行動をとるという傾向は、談話展開のスタイルや言語形式ともに反映される。

## 5.7 本章のまとめ

本章では、依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルについて日中の比較を行った。JNS は「協調的・一時競合的役割回帰型」の談話展開のスタイルが優勢である。それは他者志向が優先された「配慮」の示し方であり、「関係維持が優先された」という配慮の属性が反映されている。それに対して、CNS は「話し手役割競合型」の談話展開のスタイルが優勢である。それは自己志向が優先された「配慮」の示し方であり、「意思伝達が優先された」という配慮の属性が反映されている。以上の結果によって、本研究の3つ目の課題「現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、話題上の話し手・聞き手の役割交替の様相の分析を通して、日本語と中国語の依頼に対する『断り』の談話展開のスタイルの特徴を探る。また、談話展開のスタイルの違いに JNS と CNS のどのような心理的欲求が反映されているかを明らかにする」、という課題を解明した。

黄(2016 : 76)は、「異文化コミュニケーションで引き起こされる誤解や摩擦は、単なる言葉や談話の構成上の違いだけではなく、それぞれの文化の背後にある習慣、価値観などもコミュニケーション・スタイルの違いから生じる可能性がある」と述べている。JNS は談話展開のスタイルや配慮を実践の中で自然に身に付けるが、学習者、特に外国語環境にいる学習者は「目に見えるレベルの観察で得た知見や教育されたことを頼りに配慮を行っている可能性がある」(三宅 2019 : 172)。そのため、日本語教育では、断りのストラテジーや言語表現を教えるだけではなく、日本語と中国語の会話の

---

<sup>51</sup> 藤井(2018 : 134)は、物語についてのアイデアの提案や意見の提示の発話に現れる「言語形式」に焦点を当てて文析を行った。その結果、日本語と韓国語は相手に問いかける形の疑問形式を使う頻度が高く、聞き手からの賛成、合意、確認、あるいは不同意などの反応を引き出しながら作業を進めており、自分の主張はより間接的に提示している様子が窺える。一方、英語と中国語は、緩和表現を伴うか、あるいは伴わない形での陳述文を多く用いており、話し手は聞き手からの反応を求めるというよりは、自身の考えをより直接的に主張していることが分かる。以上により、「日本語と韓国語は、より聞き手志向の言語行動を取り、英語および中国語は、より話し手志向の言語行動をとっている」と指摘している。

相互作用における、言語行動の自己と他者の心理的欲求の在り方の違い、およびその違いから生じる談話展開のスタイルの差異を学習者に気づかせ、インプットとして伝えることが重要であると考え。これらの差異を認識した上で、さらに会話の授業においては、具体的な場면을提示してタスクやロールプレイなどを用いて練習することで、学習者に日本語のコミュニケーション・スタイルを身に付けることを促す。こうすることで、JNS との接触場面で円滑なコミュニケーションが取れることにつながるだろう。

## 第6章 円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語

### 行動の日中対照

#### 6.1 配慮言語行動とは

日常生活の中で、私たちは人間関係の維持と意図の伝達に配慮し、相手と円滑にコミュニケーションを図ろうとする。本研究で言う「円滑なコミュニケーション」とは、「会話参加者互いの意思や感情が、誤解を招かずに気持ちよく伝え合っている状態」を指す。しかし、文化的背景が違えば、円滑にコミュニケーションを取るための行動規範に違いがある。行動規範の違いとして、本名・羅(2018)は、次の例を挙げている。

「今度の日曜日に遊びに行かない？」と誘われて日本人が断る場合、「日曜日はちょっと」と言葉を濁す言い方がよく使われる。それに対して、中国人は何らかの理由をつけて断るのが普通である。日本人は相手が「日曜日はちょっと」と言ったら、「分かった。また今度ね」とすぐに納得し、それ以上理由を追求しないが、中国人の場合「どうしてだめなの？」と理由を聞き返すことが多い。この例に見られるように、日本語はごく少ない言葉で断っていることが分かる。しかし、中国語では断りの理由が求められ、理由を説明しない限り相手は納得しない場合が多い。納得しない場合、相手と円滑なコミュニケーションが取れたとは言えない。

「察し」とは、「人々が多くの了解事項を共有していると認識するところに成立するコミュニケーションの様式」(本名・羅 2018 : 58)である。三宅(2011)は、日本語コミュニケーションの特徴として「察し」への期待が挙げられることを指摘している。野村(2000)は、「察し型コミュニケーション」は日本人のコミュニケーション特性の代表的なものであると指摘し、植野(2017 : 124)は「相手を察し、思いやりながら人と人の融合的な関係を成り立たせている共話型の会話は、長い歴史・文化の中で培われた日本人のアイデンティティの一部と言える」と述べている。日本語のコミュニケーションで注意を要することとして、相手の気持ちを察することが大切だ(メイナード 1993)と言われる一方、日本の文化は「察しの文化」とも言われるように、「相手が『察し』てくれることがすべての前提となるようである」(平田 2003 : 182)。日高(2012 :

92)は、『察し合い』は、まさに日本語の配慮言語行動の基盤にあるものと見てよい」と言い、「察し合い」の会話例として次の談話データを取り上げている。(26)は、A が B に駅まで車で送るように頼み、B がそれを断るという設定のロールプレイ会話の例である(日高 2012 : 92-93、一部抜粋)。

(26) 01A : あ、B

02B : はい、はい

03A : あのさ、ちょっとお願いがあるんだけどー

04B : うん

05A : あのねー、できればねー(B : うん)車で駅まで送ってほしいんだけどさ

06B : えっ、いつ? 今?

07A : 今

08B : 今?

09A : 今

10B : 今かー。ちょっと今ー

11A : だめ?

12B : 手離せ(A : あっ、そっかー)ないんだよねー30 分くらい待ってくれたらいいんだけどさ

「配慮言語行動」という表現は、2009 年 3 月に開催された「社会言語科学会」の設立 10 周年記念シンポジウム「配慮言語行動の新地平—歴史的・社会的・コミュニケーション的アプローチの連携から見えるもの」を企画した際に三宅が初めて使ったものである。また、三宅(2011 : 4)では、「対人関係や場面に留意して行う表現や行動を総称して『配慮言語行動』と呼ぶことにし、これは、敬語やポライトネスを含むが、対人配慮に関わる言語以外の要素を含む極めて広い意味で使っている」と指摘している。

依頼側 A の発話は、「あのさ」(03A)、「あのねー」(05A)は、何らかの持ちかけが行われることを予告的に暗示するものとして機能する。また、「ちょっと」(03A)、「できればねー」(05A)のように、相手に生じる心理的負担を予想し、それを事前に軽減化する

る表現も用いられている。一方、断る側 B は、「えっ、いつ？今？」(06B)という驚きの反応を示すことにより、A の依頼に応じることができないことを予告的に暗示している。また、断りを表す直接的な表現（「いやだ」「だめだ」など）ではなく、「今手離せない」という「状況の説明」をすることで、相手に察してもらえるように仕向けるものとなっている。そして、B の断りの意向を察した A は、10B・12B の発話が終わらないうちに「だめ？」「あっ、そっかー」という発話を行い、相手との関係が壊れないように配慮言語行動を行っている。断る側の関係修復の配慮言語行動としては、断りの状況説明をした後も、12B に見られる「30 分くらい待ってくれたらいいんだけどさ」のように、条件付での受け入れを表明することで、相手の意向にできるだけ添いたいという「誠意」を伝えている。

この会話例について、日高(2012)は、日本語の会話では話し手側から相手に自分の心理状態や知識状態を察してもらえるように仕向けることが頻繁に行われるが、そうした「察しの仕向け」に対しては、それにいち早く応じようとする「察しの返し」が連鎖するという「察し合い」が配慮言語行動として行われるとしている。「察し合い」の配慮言語行動は「できればねー」の前置き表現や、「あっ、そっかー」のあいづち<sup>52</sup>表現などによって実現される。従来の談話分析では、前置きやあいづちなどの研究は活発であったものの談話全体での位置づけはされていなかったため、本章では、そうしたアプローチを「察し合い」と位置づけて包括的に扱うこととする。

談話全体における対人配慮の示し方には、言語による違いが見られることもあり得る。生越(2012a : 171)は、「誰かとコミュニケーションするとき、相手への『配慮』をどのように示すかは、相手や場面によってその示し方は様々である。また、同じような相手・場面であっても、言語によってその示し方が違うこともある」と述べている。異なる文化や言語間では、配慮言語行動に違いが見られるのである(野田 2012、生越 2012a)。

中国語の会話で配慮言語行動がどのように行われ、日本語の配慮言語行動としての「察し合い」と比較してどのような特徴を持っているか、まだ明らかにされていない。本名・羅(2018)は日本語と中国語の「断り」のコミュニケーションに現れる配慮言語

---

<sup>52</sup> 大浜・西村(2006 : 223)は、「あいづちは各々の母語社会における会話の仕方や言語行動上の規範と密接に関わっている」と指摘している。

行動に相違点があると指摘する。日中の配慮言語行動における異同を記述するためには、Hall(1976)の「文化コンテキスト」の理論(6.2.1 節で詳述)を援用することが有効だと考える。本章では、Hall(1976)の理論による「高コンテキスト文化」と「低コンテキスト文化」の観点から、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開に見られる配慮言語行動についてロールプレイ調査の結果を分析する。そして、これらの結果に反映されている社会文化を考察する。

## 6.2 理論的枠組みと研究目的

異文化コミュニケーション研究の分野では、Hall(1976)が提案した「高コンテキスト文化」と「低コンテキスト文化」という概念を用いてコミュニケーションの文化差が説明されてきた。本研究は、日本語の配慮言語行動の基盤となる「察し合い」の形成はこの「低コンテキスト文化」と切り離さない関係があると考え、Hall(1976)によって提唱された「高コンテキスト文化」と「低コンテキスト文化」と関連する先行研究を概観し、研究目的と研究方法を述べる。

### 6.2.1 「高コンテキスト文化」と「低コンテキスト文化」

文化コンテキストは、コミュニケーションの場の状況のみならず、物理的、社会的、心理的、人間関係上の具体的な状況すべてを指し、それはコミュニケーションの内容と形式に大きな影響を与えている(石井・岡部・久米 2008)。Hall(1976)は文化差を高コンテキスト・低コンテキストという概念で示したが、コミュニケーションの際にコンテキストを考慮する程度によって「高コンテキスト文化(high-context cultures)」と「低コンテキスト文化(low-context cultures)」に分けられる。「どれだけ情報をコード化された言語に依拠するかが高コンテキスト文化・低コンテキスト文化の基準」(石井・北山 2004 : 243)となる。コンテキスト化の度合の高い文化は、高コンテキスト文化と呼ばれる。高コンテキスト文化では、話される言葉よりも場面、状況に情報が内在しているため、「伝達される情報の内で言葉にしなければならない部分だけが言葉で表明され、状況で理解される部分は言語化されない」(八代他 2009 : 86)。一方、コンテキスト化の度合の低い文化は低コンテキスト文化と呼ばれる。低コンテキスト文化



では、場面、状況よりも言葉に情報が内在しているため、「言葉を端折らないで、むしろ言葉をつくして正確に情報を伝達する」(同上：87)。前者は「飛び石的スタイル」、後者は「石畳的なスタイル」とも言える(八代他 2009)。Hall(1976)は、文化によってコンテキストの高低が異なり、日本を含む多くのアジア文化(中国、韓国、ベトナムなど)は比較的に高コンテキスト文化であり、北欧・ドイツ・アメリカ文化は比較的に低コンテキスト文化であると指摘している。日本は高コンテキストの最も強い文化圏であり、中国はそれに次ぐコンテキスト度の強い文化圏であると主張している。

西田・グディカンスト(2002)は、言葉が使われる割合が低いことを高コンテキスト文化、使われる割合が高いことを低コンテキスト文化と区別する。低コンテキスト文化では、言語によりコミュニケーションを図ろうとするため、言語に対して高い価値と積極的な姿勢を示し、コミュニケーションに関する諸能力(論理的思考力、表現力、説明能力、交渉能力)が重視される。また、石井・北山(2004)によれば、低コンテキスト文化のコミュニケーションでは、情報は基本的に個人が所有しているものとして位置付けられるため、話し合わないで意図が伝わらない。つまり、発話意図の伝達は、「言葉により話し合う」ことが前提として行われる。一方、高コンテキスト文化のコミュニケーションでは、情報は基本的に他者と共有されるものとして位置づけられるため、話し合わなくても意図が伝わる。つまり、発話意図の伝達は、「察しにより察し合う」ことが前提として行われる。八島・久保田(2012：96)は、高コンテキスト文化または言語とは、「状況に埋められた情報や、人々が前提として共有している知識への依存度が高い」ものであるのに対して、低コンテキスト文化または言語は「明示的なシンボルによるメッセージへの依存度が高い」と指摘している。バーグラント(2004)は高コンテキスト文化を「受信者責任型文化」、低コンテキスト文化を「発信者責任型文化」と呼んでいる。コミュニケーションにおいて「察し」を重んじる文化では、受信者には、言葉に頼らず状況から意図や意味を汲み取ることが要求され、一方「言葉によるコミュニケーション」を重んじる文化では、発信者が言葉で意図や意思を明確に伝えることが要求される。橋本他(2006：116)は、「貴方が言うことが貴方が意味すること(話し手中心；speaker-oriented)を低コンテキストの特徴、貴方の言葉に何通りもの意味がある可能性(聞き手中心；listener-oriented)を高コンテキストの特徴」としてまとめている。

「今度の日曜日に遊びに行かない？」と誘われて、中国人の場合、何らかの理由をつけて断るのが普通であり、理由説明がなかった場合、“为什么不行啊？／为什么不去啊？”（「どうしてだめなの？／どうして行かないの？」）と理由を聞き返すことが少なくない。この現象は Hall(1976)の「日本を含む多くのアジア文化は高コンテキスト文化」、「中国語はコンテキスト度がきわめて高い」という指摘に反しているのではないだろうか。なぜなら、アジア文化に属する中国語の会話例は、高コンテキスト文化の特徴を反映していないからである。

## 6.2.2 研究目的と研究課題

日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開における、配慮言語行動の特徴を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、本研究の4つ目の課題に取り組む。

**研究課題 4：**現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、依頼に対する「断り」の談話が展開していくプロセスの中で、相手と円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動がそれぞれどのような言語表現、あるいはストラテジーによって表現されるかを明らかにする。また、こうした配慮言語行動がどのような文化コンテキストを反映するかを明らかにする。

## 6.2.3 研究方法

本章では、5章と同じデータ、日中それぞれ20組のロールプレイのデータを調査対象とする。この2種類のデータの談話展開における、断る側と依頼側の発話内容や言語表現、使用された言語的ストラテジーに注目しながら、質的分析によってそこに表れる配慮言語行動を記述し、文化コンテキストとの関連性について論じる。上述した高・低コンテキストの特徴を踏まえて、談話展開における対人配慮のありようを考える上で興味深いと考える典型的な日本語と中国語の会話例をデータの中から抽出し、「高コンテキスト文化」と「低コンテキスト文化」の観点から分析を行う。日本語のコーパスの最初のデータに合わせ、可能な限り同じ変数となるデータを比較するため、

分析に用いる性別は統一した。日中ともに依頼側が女性、断る側が男性の各 1 組の会話例を選択した。

## 6.3 結果と考察

6.3.1 節では、JNS 間の日本語の会話を分析し、依頼側と断る側のやりとりに見られる配慮言語行動の特徴を明らかにする。6.3.2 節では、CNS 間の中国語の会話を分析し、依頼側と断る側のやりとりに見られる配慮言語行動の特徴を明らかにする。

### 6.3.1 日本語母語話者間の日本語の会話

会話(1)は JNS による依頼に対する断りの会話である。A は依頼側で日本料理店の店長の役を演じる調査者(女)であり、B は断る側でホール担当の役を演じる調査協力者の JNS01(男)である。

#### 会話(1)

- 03A はい、えーとー、JJ さんすいません、ちょっと今日はお願ひがあつて〈はい〉、来てもらったんですけど、えと今、ホールの仕事、をや〈はい〉接客の方(ほう)をやってもらってますよね、でーえつとー実は、えーキッチンの人が、1 人辞めてしまったのでー〈あー〉、あの一、そっちのヘルプをお願いしたいんですが、できますか？
- 04B えーとそうですね、僕はー料理ーの方(ほう)が、苦手なん、でー〈えーえーえー〉、できればちよつとー {笑}
- 05A そうですかー
- 06B お断りしたい、\*\*<sup>53</sup>んですけど
- 07A まあでもあの一料理の方(ほう)は、あの一マニュアルもあるしー、少しずつ覚えていってもらえれば、それでいいんですけどねー
- 08B えー、そうですねでも、まあ元々ー〈んー〉、その接客の仕事ー、やりたいなーと思って、あの一、ここのアルバイトも〈えー〉、応募してー、で今、

<sup>53</sup> 「\*\*」は不明瞭で聞き取り不能な部分を示す。

その(連体詞)仕事に一、大分慣れてきて〈えー〉、結構常連さんお客さんと  
{笑}〈あーあー〉、ちょっと {笑}

- 09A そっかそっか
- 10B お話したりとか〈はい〉、することもあるって〈あー〉、できたら、そっちの方(ほう)で、続けていきたいなーっていうふうに {笑}
- 11A そうかー {笑}
- 12B 思ってるんですよー
- 13A そうかー、んーそうですねーでもまあ、ねえ料理できるとー人生これから得ですけど {笑}、どうですか
- 14B {笑} そうですねー、んー、そう
- 15A やっぱりでも
- 16B でもやっぱり今ー〈んー〉、料理の方(ほう)にっていうとちょっとー {笑}
- 17A そっかー気が乗らない？
- 18B す、できればー {笑}、接客の方(ほう) 続けてー、いきたいなーっていう
- 19A あーそーかー、分かったじゃあ他(ほか)の人を当たってみることにしますね
- 20B すいません、お願いします
- 21A はい {笑}、わかりました、はいありがとうございます

依頼側 A は、「まあでもあの一料理の方(ほう)は、あの一マニュアルもあるしー、少しずつ覚えていってもらえれば、それでいいんですけどねー」(07A)、「でもまあ、ねえ料理できるとー人生これから得ですけど」(13A)のような文末を断定的に言い切らない「～けど」の言いさし表現を用いている。こうした表現は、「断定を回避することによって相手への遠慮を示しつつ、相手にこちらの依頼の意向を察してもらえるように仕向ける機能を果たす」(日高 2012 : 93)。一方、断る側 B は、「お断りしたい、＊＊んですけど」(06B)と明示的に断りを述べている。これは言葉に情報が内在している低コンテキスト文化を反映しているとも言えるが、高コンテキスト文化かあるいは低コンテキスト文化かは談話の中の一箇所だけで判断するのではなく、談話全体に現れる特徴で判断する必要がある。断る側 B は、「できれば」(04B・18B)、「できたら」(10B)のように、「断ることによって相手に生じる心理的負担を予想し、その押し付けを弱め

る」(清水 2018 : 124)前置き表現を用いている。これらの表現は、前置きとなるのと同時に、依頼に応じることができないという暗示的な予告にもなり、相手にこちらの受け入れの難しさを察してもらうよう仕向ける働きを持つ。最後に、「でもやっぱり今一、料理の方(ほう)にっていうとちょっとー」(16B)における「ちょっと」は、断りの機能を表す程度副詞で、日本人同士であれば相手の断りの意図がすぐに理解される。それは「言いにくい述部を聞き手に察してもらう方法をとることで、話し手の意思決定に聞き手を参加させ、共同作業の会話に引き込みながら断りの了解を得ることができる」(岡本・斎藤 2004 : 70)からである。

B の断りの意図を察した依頼側 A は、B の発話が終わらないうちに、「そうですかー」(05A)、「そっかそっか」<sup>54</sup>(09A)、「そうかー」(11A)という相手に対する理解・同意を示すあいづちを打つことで、相手との関係が壊れないように配慮言語行動を行っている。林(2008)によると、あいづちには、会話の進行を促進させるほかに、相手に対する理解・同意を示したり、協調的な雰囲気を作り出したりする機能がある。また、「そうかー、んーそうですねー」(13A)、「そっかー」(17A)が、相手の状況を察知したことを示し、いち早く相手の理由説明を受け入れようとする察しの返しとなっている。さらに、04 から 16 に続く B の断りの意思を示す発話に対し、依頼側 A の「やっぱりでも」(15A)、「気が乗らない？」(17A)という「気配り発話」<sup>55</sup>が行われる。これらは、B の断りの意思を察していち早く理解を示す察しの返しでありながら、何回ものやりとりを経た結果、B の断りの意思を変える見通しがないと判断した A が、最後に、B が断りやすくなるよう仕向けたものである。それを受け継ぐことで、B にとっては「でもやっぱり今一、料理の方(ほう)にっていうとちょっとー」(16B)と断りやすくなっている。一方、断る側 B の関係修復の察しの返しの配慮言語行動としては、断る意図があるにも関わらず、矢継ぎ早に断りの意思を示さず、「えーとそうですね」(04B)、「え

<sup>54</sup> 発話途中に打たれた反復型あいづちの機能について吉田(1989)は、反復型あいづちは理解や同意を積極的に表明する、と指摘した。

<sup>55</sup> ザトラウスキー(1993 : 76)では、勧誘者の発話に見られる「断わる理由や『勧誘』に不利な情報、否定的な評価を含む発話」を「気配り発話」と呼ぶ。これは、「勧誘の談話において、相手が誘いに積極的でないと推測した話し手が、相手が断りやすいように仕向ける発話と言う。やりとりの中で聞き手としての『察し』をきかせ、相手が断りの発話をする事で気まずい雰囲気にならないよう、先取りの配慮をしているのである。ここには、聞き手が相手の状況を察して行う、日本語の配慮言語行動の 1 つの典型が見られる」(三宅 2011 : 16)。

一、そうですね」(08B)、「そうですねー」(14B)と、相手が言っていることに対して一旦容認を表す FTA を行うための緩衝材を置いてから断りの理由説明などを行っていることが挙げられる。

日本語の言語使用時の(無意識的)態度として、「言わなくても分かることは、できるだけ言わないようにする」ということが基本にあると沖他(2018:89)は指摘している。上の例では、話し手(断る側)が状況や願望を述べることで聞き手(依頼側)に断りの意図を察してもらう述べ方が選択される。話し手が聞き手に理解を期待することが前提としてあり、話し手は言いさし表現「ちょっと」(16B)や前置き表現「できれば」(04B・18B)、「できたら」(10B)などを用いて、聞き手が話し手の断りの意図を察しやすいように配慮している。一方、聞き手は「そうですかー」(05A)、「そっかそっか」(09A)、「そうかー」(11A)のあいづち表現で、察しの返しを頻繁に行っている。さらに、「やっぱりでも」(15A)、「気が乗らない？」(17A)の気配り発話や、「えーとそうですね」(04B)、「えー、そうですね」(08B)、「そうですねー」(14B)のように、断る前に一旦容認を表す FTA を行うための緩衝材の使用により相手を傷つけない配慮を示し、察しの仕向けと察しの返しを兼ねた「察し合い」の配慮言語行動が行われている。話し手が、僅かに発する定型的な言葉から聞き手(相手)に結論を推察してくれることを期待するということは、相手を思いやる気持ちと控えめな態度を良しとする日本語の「察し合い」の配慮言語行動の特徴であり、高コンテクスト文化に属する「察しの文化」「受信者責任型文化」を反映していると言えるだろう。

### 6.3.2 中国語母語話者間の中国語の会話

会話(2)は CNS 同士による依頼に対する断りの会話である。C は依頼側で日本料理店の店長の役を演じる調査協力者の CNS17(女)であり、D は断る側でホール担当の役を演じる調査協力者の CNS18(男)である。会話例における下線部は、着目する部分を表す。中国語の日本語訳は、原文理解の目安として筆者が直訳した。

## 会話(2)

### 日本語訳

- 01C 小李，最近咱们后厨有点缺人手，你看要不要去帮帮忙？  
李さん、最近料理の方でちょっと人手が足りないので、そっちを手伝ってもらえませんか。
- 02D 店长，没有别的人选了吗？  
店長、他に適当な人はいないんでしょうか。
- 03C 我看咱们店里你挺好的。  
あなたが適当だと思いますよ。
- 04D 是这样的，因为我不太擅长做菜嘛，可以说就没人敢吃我做的菜。你也知道的，如果要是作为一个餐馆的话，做菜这个环节如果出了一点差池的话，可能对于整个餐厅的收入都会有一些影响。你看这样行不行，我继续做我现在这份工作，你可以去找一下别的人选，或者重新招聘新的员工。  
実は、料理はあんまりできなくて、誰も私の作った料理を食べてさえくれないんですよ。店長も知っているはずだと思いますが、料理店として料理の方に何かがあったら、店全体の売上にも影響が出てくるかもしれません。よろしければ、ホール仕事を続けさせてもらって、キッチンの仕事に関しては他の人を探るか、または新しい人を雇ってはどうか。
- 05C 现在时间比较紧，你就先去后厨帮着他们切切菜，打杂什么的。你看咱们店之前生意都挺好的，最近因为缺人手，顾客都不太满意。  
今、時間的にちょっときついので、キッチンに行って野菜を切るとか、下ごしらえとかやっては。今までずっと店の景気はいいのですが、最近は人手が足りなくて、お客様からちょっとクレームが出ているんです。
- 06D 哦。那可不可以这样呢？就是今天我可以先去试一下，但是试的话可能效果会不太好，如果今天你要是觉得不太好的话，到时候我们再调整一下人  
そうですか。それでもいいいんでしたら、とりあえず今日はキッチンに行ってやってみます。でもあんまり効果が出てこないと思います。もし店長もあんまりよくないと思ったら、その時また調整して

- |     |   |   |
|-----|---|---|
|     | 选, 你觉得可以吗?  | いただけますか。  |
| 07C | 嗯也行, 那你今天先去试试吧。   | うん、とりあえず今日は試しにやってみられますか。  |
| 08D | 嗯好吧。  | うん、はい。  |
| 09C | 效果好的话那你之后就一直在后厨跟着学然后在后厨继续做吧。  | もしうまく行ったら、これからも継続して料理担当をしてください。   |
| 10D | 店长 {笑}, <u>我觉得我不能胜任</u> 。其实我想做这份工作主要是想 <u>锻炼我的日语口语</u> , 这是一方面。而且我 <u>实在是没有做菜的天赋</u> , 所以我 <u>可能只能短时间的帮你解决职位上缺人手的问题</u> 。但是长时间来看还是 <u>需要再去选另外一个人选</u> 。而且 <u>我知道我有一些朋友可能比较擅长做菜</u> , 要不我把他介绍给您。 | 店长 {笑}、 <u>できないと思います</u> 。実は <u>日本語の会話能力を高めたい</u> と考えてこのバイトに応募しました。また、 <u>本当に料理をする才能はないので、短い間しか人手不足の問題の解決を助けることはできません</u> 。でも、 <u>長い目で見れば、他の人を探すことが必要です</u> 。また、 <u>私の友達で料理ができる人を知っている</u> ので、 <u>紹介するのはどうでしょうか</u> 。 |
| 11C | 嗯行。那你先顶上这个职位, 然后把你的朋友先介绍给我看看吧。  | うん、いいですよ。とりあえずあなたはキッチンの仕事をやってから友達を紹介してみてください。   |
| 12D | 好的。   | はい。   |

C の依頼に対して、D は直接的な断りではなく、“没有别的人选了吗”(「他に適当な人はいないんでしょうか」)(02D)という代案を提示し、それを断りの手がかりとして相手に断りの意図を察してもらえるように仕向けている。D の断る意図を察した依頼側 C は、“我看咱们店里你就挺好的”(「あなたが適当だと思いますよ」)(03C)という発話で、D を肯定しながら再依頼を仕向けている。その再依頼を受けた D は、6.3.1 節の日本語の会話(1)の「僕は一料理一の方(ほう)が、苦手なん、で一」(04B)と同様に、



まず“我不太擅长做菜”(「料理はあんまりできなくて」)(04D)と理由を述べる。“可以说就没人敢吃我做的菜”(「誰も私の作った料理を食べてさえくれないんですよ」)(04D)という新たな情報を付け加える。これはどの程度料理ができないかを相手の推論に委ねるのではなく、「自分が自分について相手に言語的に伝える行為」(橋本他 2006: 45)である「自己開示」によって客観的な事実を相手と共有する。その後、“如果要是作为一个餐馆的话, 做菜这个环节如果出了一点差池的话, 可能对于整个餐厅的收入都会有一些影响”(「料理店として料理の方に何かがあったら、店全体の売上にも影響が出てくるかもしれません」)(04D)のように論理的な根拠を持ち出し、料理の質が店に対して重要であるという世間一般の考え方に訴える。その前に使われる“你也知道的”(「店長も知っているはずだと思いますが」)(04D)という表現は、一般的な認識として相手も知っていると期待される事柄への同意を促す共感要求となる。これは相手との共通基盤を示すことによって、個人対個人の対立を回避するポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである。その後、“你看这样行不行, 我继续做我现在这份工作, 你可以去找一下别的人选, 或者重新招聘新的员工”(「よろしければ、ホールの仕事を続けさせてもらって、キッチンの仕事に関しては他の人を探すか、または新しい人を雇ってはどうか」)(04D)と述べ、依頼側 C に選択権があることを示しながら自分の意図を明確に表明し、さらに問題解決に有益だと考えている代案を提示している。

幾度も断ったにも関わらず再依頼された場合、6.3.1 節の日本語の会話例(1)では、断る側 A は、最後に「でもやっぱり今一、料理の方(ほう)にっていうとちょっと一」(16A)と述べ、間接的に相手と分かり合うための必要最低限の言葉「ちょっと」によって、相手に自分の断る意図を察してもらう形で終わる。それに対して、6.3.2 節の中国語の会話例(2)では、断る側 D は、最後に“我觉得我不能胜任”(「できないと思います」)(10D)と述べ、明示的に断る意思を示している。断りの FTA を軽減するために、断りを裏付ける理由として“实在是没有做菜的天赋”(「本当に料理をする才能はない」)(10D)ともう一度説明し、さらに“锻炼我的日语口语”(「日本語の会話能力を高めたい」)(10D)、“可能只能短时间的帮你解决职位上缺人手的问题。但是长时间来看还是需要再去选另外一个人选”(「短い間しか人手不足の問題の解決を助けることはできません。でも、長い目で見れば、他の人を探すことが必要です」)(10D)という理由の積み重ねで自分

の断りを正当化することで、依頼側 C を説得している。そして、最後に、補償ストラテジーとして、自分ではできないが “我知道我有一些朋友可能比较擅长做菜，要不我把他介绍给您” (「私の友達で料理ができる人を知っているので、紹介するのはどうでしょうか」)(10D) と具体的な代案を提示している。

こうした例のように、中国語の断り会話では、聞き手が話し手に具体的な理由説明を求めることが前提要素としてあり、話し手が積極的な自己開示や論理的な説明をするのが一般的である。上述の例からは、1 回の理由説明でなく異なる理由を重ねて示すことや、話し手と聞き手が納得できる一般常識を説明することによって相手を不愉快にさせないような配慮言語行動が行われている。「はっきりと明確に自分(個人)の考えを述べる」(沖他 2018 : 87)ことは、中国社会における言語使用の基本態度にもなっている<sup>56</sup>。「店長からの仕事内容の変更を断る」という場面では、特に店長から再依頼され、店長に遠慮して断っているのかどうかあいまいな言い方をした場合、意思が不明確になりかえって店長に迷惑をかけたり、結局時間の無駄になったりする。“我觉得我不能胜任”(「できないと思います」)(10D)という明確な言い方は、引き受ける余地が残っているようで店長に期待させる伝達意図の曖昧性を除去し、意思伝達の確実性が優先された結果である。しかし、明確に自分(個人)の考えを述べることも相手に対する配慮の 1 つであろう。話し手が結論を明言し、情報提供や論理的説得によって聞き手(相手)に結論を納得させることを期待するということは、相手を思いやる気持ちと積極的な態度を良しとする中国語の「話し合い」の配慮言語行動の特徴であり、より低コンテクスト文化に属する「言葉の文化」、「発信者責任型文化」を反映している。

## 6.4 本章のまとめ

本章は、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開における、配慮言語行動の特徴を明らかにし、本研究の 4 つ目の課題「現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、依頼に対する『断り』の談話が

---

<sup>56</sup> それに対して、日本社会における言語使用の基本態度は、「本音の意見や考えは、あまり口に出さず、気持ちや状況でその意味を察し合うことを美德としている」と野村(2000 : 8)が指摘している。

展開していくプロセスの中で、相手と円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動がそれぞれどのような言語表現、あるいはストラテジーによって表現されるかを明らかにする。また、こうした配慮言語行動がどのような文化コンテキストを反映するかを明らかにする」、という課題を解明した。

同じ状況で比較した場合、日本語の「断り」では、言わなくても分かってもらえることがコミュニケーションの前提となっているため、察し合うことが期待される。聞き手には状況から意図や意味を汲み取ることが要求されるため、話し手は多くの言葉に頼らず、聞き手との「察し合い」に基づいて言語表現を工夫することを通して、聞き手へのポライトネスを示し対人関係を配慮することが特徴である。これは高コンテキスト文化が反映された「配慮」の示し方であり、「関係維持が優先された」という配慮の属性が反映されている。察し合いを重ねれば相互理解は可能になり、問題を解決することができる。それに対して、中国語の「断り」では、言わなければ伝わらないことがコミュニケーションの前提となっているため、話し合うことが重要視される。話し手には言葉で意図や意思を明確に伝えることが要求されるため、話し手は聞き手が納得するまで言葉に頼る「話し合い」に基づいて論理的説明を重ねることを通して、聞き手への配慮を示すことが特徴である。それはより低コンテキスト文化が反映された「配慮」の示し方であり、「意思伝達が優先された」という配慮の属性が反映されている。話し合いを重ねれば相互調整は可能であり、問題を解決することができる。社会文化における語用論的規範の違いによって、母語話者の配慮言語行動の特徴が異なる。日本人と中国人がより良い付き合いをするためには、言語的表現は無論のこと、社会文化の違いをまず互いに理解することが重要であると言える。

今回扱ったデータは極めて限られているものの、本研究で提示した会話例は、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開に見られる配慮言語行動の典型の1つであろうと思われる。この分析を踏まえ、筆者は、中国語はこれまでに言われている説とは異なり、低コンテキスト文化に属すると考える。しかし、同じ高コンテキスト文化／低コンテキスト文化に属する言語であっても、そのコンテキストの高低には差があり、つまり段階性があると考えられる。日本は高コンテキストの度合いが最も高い文化圏であり、中国はより低コンテキストの度合いの文化圏であるが、日本に比べてどの程度の差があるのかをさらに検討する必要がある。一方、「個別の事例に拘りす

ぎると、『特殊な事例の一般化』という落とし穴もある」(佐藤 2008 : 71-72)。筆者の指摘に説得力を持たせるには、さらに分析対象とするデータを増やし、より信頼度の高い傾向を提示する必要がある。本研究では依頼に対する断りを例に用いたが、他の談話内容でも同じ傾向が見られるか、「同種の研究事例を数多く集めて分析することで、より一般的な傾向が示される可能性がある」(熊谷 2002 : 29)と考えられる。また、「対人把握に基づいた言語行動は、時代や社会変化に影響を受ける」(三宅 2011 : 12)。吉田(2006)は、日本社会は「言わなくても分かる」以心伝心の社会から、「言わなければ分からない」説明・説得型社会への移行について指摘している。「日本社会も『省略する文化』から『明示する文化』へと移行しつつあり」(林 2014 : 134)、効果的な異文化間コミュニケーションを行うには「日本的な察しに頼らず、言葉に出して能動的なコミュニケーションを心がける」ことを根底に意識することが求められる(野村 2000 : 8-9)。一定期間における現象・構造について記述する共時的な研究だけではなく、時間の流れや歴史的な変化を考慮に入れた通時的な研究の視点から、日本が「明示する文化」へと移行しつつある中での配慮言語行動の特徴の変化を把握する必要もある。

## 第 7 章 本研究のまとめと今後の展望

終章では、まず 7.1 節で本研究の結果をまとめる。その後、7.2 節で本研究の意義を言語行動研究と配慮言語行動研究への貢献、日本語教育と異文化理解教育への示唆の観点から述べ、7.3 節で今後の展望を述べる。

### 7.1 本研究の結果

本研究は、対照言語学の 1 つとして位置づけられる対照語用論の立場からの、JNS と CNS による「断り」の言語行動についての対照研究である。

ある言語と他言語の比較を通じて、言語使用に反映される語用論的特徴および規則の言語間、文化間の類似点と相違点の両方を明らかにするという対照語用論の根本的な目的に沿い、本研究では、日本語と中国語における依頼に対する「断り」の言語行動を言語社会心理学的アプローチから検討した。具体的な論点として、4 つの課題を設定した。

**課題 1：**言語行動の意識・発話文レベルにおける日中両言語の断り発話を比較し、認知や社会文化的差異とそれが反映するポライトネスの差異を明らかにする。また、断られる側の視点から、JNS と CNS にとって、ポジティブ・ポライトネスの断り方とネガティブ・ポライトネスの断り方ではどちらが受け入れやすいかという、「断り」に関する日中の意識の異なりを明らかにする。

**課題 2：**現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、JNS の断る側と CJL の断る側における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を明らかにする。また、展開構造に違いがある場合、その要因を人間関係の構築の観点から明らかにする。

**課題 3：** 現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、話題上の話し手・聞き手の役割交替の様相の分析を通して、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの特徴を探索。また、談話展開のスタイルの違いに JNS と CNS のどのような心理的欲求が反映されているかを明らかにする。

**課題 4：** 現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける日中両言語の断りの言語行動を比較し、依頼に対する「断り」の談話が展開していくプロセスの中で、相手と円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動がそれぞれどのような言語表現、あるいはストラテジーによって表現されるかを明らかにする。また、こうした配慮言語行動がどのような文化コンテクストを反映するかを明らかにする。

## 第 1 章 研究背景と目的

序章である第 1 章では、日中両国間の経済的、文化的な交流が緊密になる一方、それに伴う異文化間コミュニケーションにおいての摩擦や誤解が起きることは避けられないという研究背景を紹介した。これを背景にして、特に不愉快が生じやすい言語行動の 1 つとして「断り」の言語行動を取り上げ、断りの仕方や方法について学ぶ必要があり、また、その断り方に反映される異文化への理解は摩擦や誤解を防ぐために欠かせないものであることを説明した。その後、「関係維持と意図の伝達の両方に配慮が求められる」(尾崎 2006 : 90)という「断り」の言語行動の特徴を述べ、「断り」の言語行動に関する先行研究を言語行動の意識・発話文レベルの研究と現実／自然に近い言語行動・談話レベルの研究に分けて概観し、先行研究で明らかにされている点とまだ解明されていない点について整理した。

「断り」に関するこれまでの研究からは大きく 2 つの問題点が指摘される。1 つ目は断る側のストラテジーに焦点を当てたものがほとんどであり、断られる側の意識についてはあまり言及されてこなかった。もう 1 点は依頼に対する 1 回目の断りに対す

る言語行動の意識・発話文レベルに研究が集中しており、実際の談話展開における再依頼に対する断りの研究は無に等しい点である。

しかし、「断り」の言語行動は断る側と依頼側の相互行為で形成されている。丁寧に且つ婉曲的に断り表現を用いて断る場合でも、その婉曲的な断り方がかえって相手からの再依頼を誘発する場合も考えられる。したがって、本研究では、依頼に対する「断り」の言語行動を、断る側の1発話レベルだけでなく、断られる側、つまり、依頼側の意識や言語行動を含み、言語社会心理学的アプローチから、より長いスパンによる依頼側とのやりとりを含めた談話レベルで考察を進める必要性を述べた。本研究の調査や分析を通して、JNSとCNSによる「断り」の言語行動の特徴と相違点を明らかにする。その根底にある相手への配慮意識をはじめとする対人意識を考察することによって、日中両言語における配慮のメカニズムを解明し、日中接触場面でのコミュニケーション上の誤解や不愉快さを減らすことが研究の目的であることを述べた。

## 第2章 理論的枠組みと研究方法

第2章では、まず、「対照語用論」およびその下位分野である「異文化間語用論」と「中間言語語用論」を紹介した。次に、本研究の分析や考察に用いる理論的枠組みである「ポライトネス理論」と「相互行為的社会言語学」、また Langacker(2008)の「事態解釈」という概念を紹介した上で、本研究の分析方法である言語社会心理学的アプローチを示した。最後に、本研究で扱うデータについて説明した。

## 第3章 断る側の戦略と断られる側の意識の日中対照

第3章では、異文化間語用論の立場から、ポライトネス理論と Langacker(2008)の「事態解釈」の概念に基づき、DCT調査のデータを使い、JNSとCNSの断る側による戦略を比較した。その後、アンケート調査のデータを使い、断られる側の意識調査結果への分析によって、本研究の1つ目の課題を明らかにした。

断る側の視点からは、まず、認知の面から言うと、JNSは「スキーマ化」というく

事態解釈>を行うことにより言語構造を成り立たせ、断りの理由を簡潔にする傾向がある。一方、CNSは「精緻化」という<事態解釈>を行うことにより言語構造を成り立たせ、事例を挙げつつ断りの理由を詳述する傾向がある。次に、社会文化の面から言うと、相手との関係を一層親密にしたいという「近づく」親切心を強調することは中国語にとっては配慮であり、そのためCNSの断る側は相手のPFに働きかけるストラテジー、つまり実質的な「埋め合わせ」行動を積極的に提案し、ポジティブ・ポライトネスを好む傾向がある。一方、自分からの{代案提示}などが相手の迷惑になるか否かを考慮し、あまりに相手に気を使わずに一定の距離を保つという「近づかない」ことは日本語にとっては配慮であるため、JNSの断る側は相手のPFに働きかけるストラテジー、つまり実質的な「埋め合わせ」行動をほとんど提案せず、定型文やネガティブ・ポライトネスを好む傾向がある。このように、日本語と中国語では、その断り方に明らかな違いがあり、認知的および社会文化的差異とそれが反映するポライトネスや「配慮」の示し方の差異が明らかとなった。

断られる側の視点からは、「断り」に関する日中の意識の異なりについて、CNSはポジティブ・ポライトネスの断り方を好み、しかもその選択の一致率が高かった。それに対して、JNSはポジティブ・ポライトネスの断り方を好む場合もあるが、相手に気を遣わせてしまうことを考慮し、ネガティブ・ポライトネスの断り方を好む場合もある。さらに、JNSが好む断り方は人によって大きく異なり、時として相反していることも分かった。

#### 第4章 再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造の日中対照

第4章では、中間言語語用論の立場から、相互行為的社会言語学に基づき、ロールプレイのデータを使い、JNSとCJLによる「断り」の談話の展開構造を比較した。それによって、本研究の2つ目の課題を明らかにした。

再依頼に対して最初は断るが最後に受諾した場合、JNSとCJLの被依頼側における再依頼から合意形成に至る「断り」の談話の展開構造には、共通点と相違点があるこ



とが分かった。まず、共通点として、被依頼側が JNS かあるいは CJL かを問わず、再依頼から合意形成に至る断りの談話の展開構造には、「積極的合意形成」と「消極的合意形成」の2種類がある。また、「消極的合意形成」から「積極的合意形成」に切り替わる場合も見られる。一方、相違点として、JNS が被依頼側の場合、「再依頼部」⇒「第2断り」⇒・・・⇒「第n依頼」(依頼側が{代案提示}をする)⇒「受諾部」⇒「受け入れ部」の展開のように、「依頼側の{代案提示}による合意形成」の展開構造で合意形成に至る場合が多い。また、その{代案提示}の内容はその発話の場にいる登場人物に限られた。一方、CJL が被依頼側の場合、「再依頼部」⇒「第2断り」⇒・・・「第n依頼」⇒「第n断り」(のちに被依頼側が{代案提示}をする)⇒「受け入れ部」の展開のように、「被依頼側の{代案提示}による合意形成」の展開構造で合意形成に至る場合が多い。また、その{代案提示}の内容は、自分と親密な関係にある身内や友人などの第三の人物にも言及した。したがって、代案の使用は、再依頼から合意形成に至る断りの談話の展開構造に影響するということが示唆された。

「配慮」の示し方の観点から以上の結果を見ると、再依頼から合意形成に至る断りの談話の展開構造について、JNS は依頼側の{代案提示}による合意形成の場合が多い。また、その{代案提示}の内容は、その発話の場にいる登場人物に限られた。それは上下関係と自助が優先された「配慮」の示し方であり、「近づかない」という配慮の属性が反映されている。それに対して、CJL は断る側の{代案提示}による合意形成の場合が多い。また、その{代案提示}の内容は、自分と親密な関係にある身内や友人など、第三の人物にも言及した。それは自己意志と互惠関係が優先された「配慮」の示し方であり、「近づく」という配慮の属性が反映された結果ということが分かった。

## 第5章 依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの日中対照

第5章では、異文化間語用論の立場から、相互行為的社会言語学に基づき、ロールプレイのデータを使い、JNS と CNS の「断り」の談話展開における、話者交替を通じて観察される談話展開のスタイルを比較分析した。分析結果に基づいて、日本語の会

話と中国語の会話それぞれにおける談話展開のスタイルと「自他志向」についての相関関係を論じることによって、本研究の3つ目の課題を明らかにした。

JNS は、他者との肯定的な関係を求め心理的に他者との融合を重視する「他者志向」という、対人関係に配慮する側面が優先されている「協調的・競合的役割回帰型」の談話展開スタイルが特徴である。それに対して CNS は、自己の領域を求め心理的に自己に対する配慮が優先されている「自己志向」という、情報や意見を提供する側面が重視されている「話し手役割競争型」の談話展開のスタイルが特徴であることが示唆された。

「配慮」の示し方の観点から以上の結果を見ると、依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルについて、JNS は「協調的・一時競合的役割回帰型」の談話展開のスタイルが優勢である。それは他者志向が優先された「配慮」の示し方であり、「関係維持が優先された」という配慮の属性が反映されている。それに対して、CNS は「話し手役割競合型」の談話展開のスタイルが優勢である。それは自己志向が優先された「配慮」の示し方であり、「意思伝達が優先された」という配慮の属性が反映された結果ということを主張した。

## 第6章 円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動の日中対照

第6章では、異文化間語用論の立場から、相互行為的社会言語学に基づき、ロールプレイのデータを使い、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開に見られる配慮言語行動を分析した。分析を通して、日中両言語に見られる配慮言語行動の特徴を明らかにし、その背景にあると考えられる文化コンテキストとの関係を考察することによって、本研究の4つ目の課題を明らかにした。

日本語の「断り」では、言語化しなくても分かってくれることがコミュニケーションの前提となっているため、「察し合う」ことが重要視される。聞き手は、周りの状況から判断することが要求されるため、話し手は多くの言葉に頼らず聞き手との「察し合い」に基づいて言語表現を工夫することを通して聞き手への配慮を示し、相手を不

快にさせないように配慮することが特徴である。察し合いを重ねれば相互理解は可能になり、積み重なった相互理解によって問題を解決することができる。それに対して、中国語の「断り」では、言わなければ分かってくれないことがコミュニケーションの前提となっているため、「話し合う」ことが重要視される。話し手は、言葉で明確に表現することが要求されるため、話し手は聞き手が納得するまで言葉に頼る「話し合い」に基づいて論理的説得を工夫することを通して聞き手への配慮を示し、自分の意図を明確に伝えることが特徴である。話し合いを重ねれば相互調整は可能であり、積み重なった相互調整によって問題を解決することができる。ここから、日本語の配慮言語行動は高コンテキスト文化の反映であり、中国語の配慮言語行動はより低コンテキスト文化の反映であるということが明らかとなった。

「配慮」の示し方の観点から以上の結果を見ると、依頼に対する「断り」の談話展開に見られる配慮言語行動について、JNS は「察し合い」を好む傾向がある。それは高コンテキスト文化が反映された「配慮」の示し方であり、「関係維持が優先された」という配慮の属性が反映されている。それに対して、CNS は「話し合い」を好む傾向がある。それはより低コンテキスト文化が反映された「配慮」の示し方であり、「意思伝達が優先された」という配慮の属性が反映された結果ということが分かった。

今回の調査結果は表 7-1 にまとめられる。

表 7-1 日中「断り」の言語行動の相違点および「配慮」の二面性

言語	各対照項目および各項目に見られる「配慮」の示し方		「配慮」の二面性
日本語	<b>①戦略</b>	<b>②談話の展開構造</b>	近づかない配慮
	「スキーマ化」された理由 を述べる傾向がある & 実質的な「埋め合わせ」行動 はほとんど提案されない ↓ ネガティブ・ポライトネス が優先された「配慮」の示し方	依頼側の {代案提示} による 合意形成の場合が多い ↓ 上下関係が優先された 「配慮」の示し方 & {代案提示} の内容はその発話の 場にいる登場人物に限られる ↓ 自助が優先された 「配慮」の示し方	
	<b>③談話展開のスタイル</b>	<b>④配慮言語行動</b>	関係維持が優先された配慮
	「協調的・一時競合的 役割回帰型」が優勢 ↓ 他者志向 が優先された「配慮」の示し方	「察し合い」が好まれる ↓ 高コンテキスト文化 が反映された 「配慮」の示し方	
中国語	<b>①戦略</b>	<b>②談話の展開構造</b>	近づく配慮
	「精緻化」された理由 を述べる傾向がある & 実質的な「埋め合わせ」行動 は積極的に提案される ↓ ポジティブ・ポライトネス が優先された「配慮」の示し方	断る側の {代案提示} による 合意形成の場合が多い ↓ 自己意志が優先された 「配慮」の示し方 & {代案提示} の内容は 第三の人物にも言及する ↓ 互惠関係が優先された 「配慮」の示し方	
	<b>③談話展開のスタイル</b>	<b>④配慮言語行動</b>	意思伝達が優先された配慮
	「話し手役割競合型」 が優勢 ↓ 自己志向 が優先された「配慮」の示し方	「話し合い」が好まれる ↓ より低コンテキスト文化 が反映された 「配慮」の示し方	

表 7-1 に示すように、本研究で取り扱った依頼に対する「断り」の言語行動における「配慮」の示し方は、語彙・表現レベルでの言語形式の選択や言語行動の意識・発話文レベルでのストラテジーの選択にとどまらず、現実／自然に近い言語行動・談話レベルでの談話の展開構造や談話展開のスタイル、配慮言語行動という複数の要素の組み合わせとして、依頼側と断る側の相互行為による談話全体で表される。また、JNS と CNS の「配慮」の示し方の背後にある相手への配慮意識をはじめとする対人意識のあり方の相違点も明らかとなった。相手と円滑にコミュニケーションを図るという目標は言語が異なっても基本的には同じであるはずだが、依頼に対する「断り」の言語行動における配慮のメカニズムは言語によって異なる。それは、配慮の二面性—「近づかない配慮／近づく配慮」、「関係維持が優先された配慮／意思伝達が優先された配慮」—toまとめることができる。

日本語では、相手とのほどよい距離を保つ「近づかない」配慮を表す「遠慮意識」が常に働いており、「関係維持優先」で配慮をアピールする。それに対して中国語では、相手との親和性を増す「近づく」配慮を表す「親和意識」が常に働いており、「意思伝達優先」で配慮をアピールする。ただ、ここで強調したいことは、中国語における「意思伝達が優先された配慮」は「関係維持」を無視するものではない。むしろ、CNS・CJL が明確に自分の考えを述べることは、意味交渉を効率的に行う、曖昧な表現による誤解を避ける、相手への熱意や相手との良好な関係を維持したいという意志を明確に示すという3つの目的があり、相手に配慮した態度である。

これまで述べたように、CNS と JNS は、優先する点は異なるが、ともに相手と円滑にコミュニケーションを図り、それぞれの「配慮」の示し方で相手との関係を大切にしている。これが対照語用論において最も重要な点であり、つまり「言語や文化の違いについて考える場合、何かが根本的に違うと考えるよりも、『根本的な部分とそれほど変わらないが、ある点異なるために、結果的にいろいろなことが違ってくる』と考えたほうが、それぞれの言語・文化の現象がともに自然なことに見えてくることが多い」(井上 2020 : 225)という主張に肯ける。

## 7.2 本研究の意義

以下に、本研究の意義について、言語行動研究と配慮言語行動研究への貢献と、日本語教育と異文化理解教育への示唆という観点からそれぞれ述べる。

### 7.2.1 言語行動研究と配慮言語行動研究への貢献

「断り」の言語行動の研究は、これまでも、言語行動の意識・発話文レベル、あるいは数回程度のターン交替のレベルではなされていたが、それらの研究は、断る側のストラテジーを分析するものが主であった。そこでは、言語行動の意識・発話文レベルで見られる断る側による「断り」の特徴が明らかにされていたが、断られる側の意識、また談話レベルでの「断り」の言語行動は、相互行為としてどのように行われているか、そして「断り」が展開していくプロセスにおいてどのような配慮が示されるかについては不明な点が多かった。

これに対し、本研究は、これまでの「断り」の言語行動に関する先行研究とは異なり、断る側への着目に加えて、断られる側が断り発話をいかに受け取り解釈したかという、断られる側の言語意識への分析も研究の視野に入れた。また、言語行動の意識・発話文レベルにおいて、断る側にはどのようなストラテジーや言語表現が使われて断りの発話を実現するかに加えて、現実／自然に近い言語行動・談話レベルにおける、依頼側と断る側（被依頼側）の言語的相互行為によって「断り」の言語行動がどのように行われるかを、談話の展開構造、談話展開のスタイル、配慮言語行動という3つの側面から分析した。対照の結果、依頼に対する「断り」の言語行動における日本語と中国語の特徴や異同を明らかにすることにとどまらず、それらの結果を社会文化と結びつけての考察や議論によって、JNSとCNSの「配慮」の示し方、およびその背後にある配慮のメカニズムの異同を解明した。これは、見方や方法を変えれば、これらが「断り」の言語行動と配慮言語行動を談話レベルから分析する際の観点になりうることを示した。

本研究は、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の言語行動を対照することによってその特徴や異同を明らかにすることに加えて、「配慮」の示し方の観点からその相違点や類似点を考察、議論することによってその背景となる言語文化、社会および人々

を知り、理解することへと繋がり、よりよい異文化間コミュニケーションや人間関係の構築に応用できる。「対照研究が言語教育への示唆や提言へと繋がるような、対照研究にとどまらない視野を提供することができたのではないか」と岩田他(2018:3)は指摘しているが、次節では、本研究の結果を基に、日本語教育と異文化理解教育への示唆を考える。

## 7.2.2 日本語教育と異文化理解教育への示唆

日本語が上級になっても日本人とのコミュニケーションがスムーズに行くとは限らないことを実感した日本語学習者は少なくない。町(2006: viii)のまえがきには、次のような重要な指摘が記されている(下線は筆者による、以下同)。

日本語教育のこれまでの多くの実践と研究によって、日本語を教えるということとは単純に日本語の発音や文法・語彙を習得させればいいということではないことが、明らかにされてきた。

続けて次のように指摘する。

日本人と、日本語で、円滑なコミュニケーションをとれるということは、日本語社会の中でいかに自然に日本語の運用ができるかということである。言語と文化・社会が密接に関連していることは、いまさら繰り返す必要もない。

同様に、平・松村(2011: 82)は、「中国人日本語学習者にとって、日本語の難しさは、語形そのものではなく、対人関係や社会的ルールを考慮しながら、社会的慣習に従って、場面に応じて使い分けなくてはならないところにある」と指摘している。野田(2012: 152)によると、「配慮したつもりなのによい印象を与えない配慮表現・言語行動は、日本語能力が高い非母語話者にもよく見られる」という。「文法や語彙の不自然さと違い、人格の問題と思われる可能性があるため、実態を詳しく研究するとともに、日本語教育でも重視する必要がある」(同上: 152)という指摘もある。

日本人と円滑にコミュニケーションを取るために、第二言語としての日本語教育は、異文化理解教育をはじめ自文化および他文化に関する情報を学習者に発信・提供する必要がある。異文化間コミュニケーションにおける配慮言語行動の取り方や捉え方は言語によって異なっており、それらの相違を学習者に意識させる必要もある。これは、「異文化間のコミュニケーション・スタイルの違いを認識することが、誤解の減少、回避につながる<sup>57)</sup>」(池田他 2007 : 57)からである。しかし、そのような提示は日本語教育、特に中国国内の日本語教育でもほとんど扱われていないのが現状である。日本語で日本人と話す際に、誤解しない、または誤解されないために、学習者が日本語の発音や文法・語彙などの習得は言うまでもない。しかしそれより重要なのは、自分が自文化で「配慮」と思い込んでいる言語行動を取ってそれをアピールするのではなく、「コミュニケーション行為における自文化の特性を認識し、相手文化と自文化の差異を考慮し、互いの価値観を相対的に並列する思考」(野村 2000 : 4)を知ることであり、相手文化の対人配慮行動の特徴などを考慮に入れて自分の言語行動を調整することでもある。その上で、「母語話者の言語だけに正しさや自然さの絶対的価値を置くのではなく、言語使用者ごとの異なりを積極的に認める考え方<sup>58)</sup>」(小野 2020 : 251)も必要である。

本研究は、JNS と CJL との接触場面での誤解や不愉快さを減らすための情報を提供するため、中国国内での日本語教育の中で「断り」の言語行動を教える際にポイントとして考えられる事項を次のように整理する。まず、意識の面で、「配慮」の二面性、および文化や社会規範による日本語と中国語の「配慮」の示し方の違いを学習者に提示する。相手文化と自文化の価値観や行動規範に違いが存在することを認め、相手文化と自文化を客観的且つ相対的に理解し、相手と円滑にコミュニケーションを取るために、互いの言語や文化に特有のルールや習慣があることを配慮して言語行動を調整することの重要性を学習者にアピールする。その後、産出の面で、その「配慮」

---

<sup>57)</sup> 池田他(2007 : 57)は、「相手がどのような習慣を有しているかを知ることにより、異文化の人の行動を、自分の文化の基準ではなく相手文化の基準で解釈することが可能になる。知識があれば、相手文化の基準と自文化の基準のギャップを、意識的努力により埋めていくことができる。つまり、違いの認識が誤解の減少につながるのである」と述べている。

<sup>58)</sup> 小野(2020 : 251)は、「現代の多言語・多文化社会においては、『日本語母語話者による日本語』以外の日本語も必要となっている」と述べ、こうした考え方は、「World Englishes の発想を元にしており、World Japaneses と呼ばれる」(同上 : 251)と指摘している。



の二面性および文化や社会規範が「断り」の言語行動においてどのように示されるかを、＜ストラテジー＞(3章)、＜談話の展開構造＞(4章)、＜談話展開のスタイル＞(5章)、＜談話全体に見られる配慮言語行動＞(6章)という具体的な項目に分けて教育することを考えて行きたい。

本研究の結果は、日中間の「依頼—断り」のコミュニケーションのみに適用できるだけではない。特に、表 7-1 に示した日中「断り」の言語行動における「配慮」の二面性という性質は、「依頼—断り」以外の言語行動にも反映されることが予測でき、日本語と中国語以外の言語を母語とする学習者の「配慮」に関する示し方の背景を考える際にも参考になるだろう。また、本研究の結果は、CNS に対する日本語教育に応用できるのみならず、JNS に対する中国語教育にも応用できる。今後、このような観点を踏まえ、より広範囲、且つ詳細な研究が望まれる。その上で、言語行動に関する対照研究、および配慮言語行動に関する研究が体系化されるべきであろう。

以上、本節では、本研究の意義を言語行動研究と配慮言語行動研究への貢献、日本語教育と異文化理解教育への示唆という観点から述べた。

### 7.3 今後の展望

本研究は、今後以下のような発展の可能性はある。

まず、「断り」の言語行動について、さらなる実態の解明が期待される。本研究では、言語的ストラテジーの分析に限られているが、非言語行動やパラ言語など他の要素については分析を行わなかった。しかし、語尾の伸ばしやイントネーションなどのパラ言語、断りに伴う笑いや表情、身振りなども「断り」の言語行動の重要な要素として相手に与える印象に影響している。それらを補完することで、「断り」の言語行動の相互行為の実態が見えてくる。そこで明らかになった実態は、円滑にコミュニケーションを取るための日本語教育に利用しうるものである。

次に、会話の条件を操作した「断り」の言語行動の実態の解明が期待できる。本研究および上記の非言語行動やパラ言語などの枠組みを利用し、年齢、男女およびフォーマル・インフォーマルな場面などの条件を操作した談話を分析する。これにより、条件が異なる「依頼—断り」の会話でストラテジー、談話の展開構造、談話展開のス

タイトル、談話全体に見られる配慮言語行動などの異同が解明できる。

それらに加えて、中国国内で日本語教育に携わる際には、学習者の第二言語としての日本語との比較研究も進めることが期待される。語用論的指導や教材開発にあたっては、対象者とする学習者のレベルによって、各段階の学習項目の選定、タスクの設定、社会的・状況的文脈の提示の仕方などについてさらに検討を行う必要がある。

中国人日本語学習者の数は依然として世界で最も多く、今後もその数は増えると思われる。また、日本における中国文化や中国語への関心も高まりつつ、日中接触場面でのコミュニケーションの機会が増えている。このような背景から、相手と円滑にコミュニケーションを取れるよう、言語行動に関する日中対照研究の必要性や重要性は益々高まっている。今後更に多くの研究がなされて成果を教育に還元し、教育を通して成果を社会に還元することを期待し、本研究もその一助となるよう努めていきたい。

## 参考文献

### 【日本語文献】

- 生田少子(2012)「相互行為における機能的単位について—発話行為連鎖の視点から—」  
『明治学院大学英米文学・英語学論叢』127, pp. 39-59. 明治学院大学文学会.
- 池田理知子・灘光洋子・今井千景・吉武正樹・エリック M. クレーマー・山田美智子・  
岩隈美穂・伊佐雅子・丸山真純(2007)『改訂新版 多文化社会と異文化コミュニケーション』、東京：三修社.
- 石井敬子・北山忍(2004)「コミュニケーション様式と情報処理様式の対応関係—文化的視点による実証研究のレビュー—」『社会心理学研究』19, pp. 241-254. 日本社会心理学会.
- 石井敏・岡部朗一・久米昭元(2008)『改訂版（初版 1987） 異文化コミュニケーション』、東京：有斐閣.
- 伊藤恵美子(2004)『マレー語母語話者のポライトネスの諸相—勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から—』名古屋大学博士論文.
- 伊藤恵美子(2010)「依頼場面に見られる断り表現の特徴—日本語・ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語・タイ語の比較—」『留学生教育』15, pp. 35-44. 留学生教育学会.
- 井上優(2013)『相席で黙っていられるか—日中言語行動比較論—』、東京：岩波書店.
- 井上優(2020)「対照語用論と文化対照」加藤重広・澤田淳編『はじめての語用論—基礎から応用まで—』 pp. 211-226. 東京：研究社.
- 岩田祐子・金庚芬・楊虹・白井宏美(2018)「特集「人・文化・社会を理解することばの対照研究」」『社会言語科学』21(1), pp. 1-3. 社会言語科学会.
- 植野貴志子(2012)「聞き手行動の社会言語科学的考察—語りに対する聞き手の働きかけ—」『日本女子大学紀要 文学部』61, pp. 57-68. 日本女子大学.
- 植野貴志子(2017)「日本人の聞き手行動—「融合的談話」を事例として—」『日本語学』36(4), pp. 116-126. 東京：明治書院.
- 上村佳世子(2000)「子どもの認識形成への社会文化的アプローチ」『心理学評論』43(1),

- pp. 27-39. 心理学評論刊行会.
- ウォンサミン、スリーラット(2016)「不満表明とそれに対する応答に関する研究—日本語母語話者とタイ語母語話者を比較して—」『言語文化と日本語教育』51, pp. 11-20. お茶の水女子大学日本言語文化学会.
- 元智恩(2002)「日本語と韓国語の断り表現の構造—指導教官の依頼を断る場面を中心に—」『言語学論叢』21, pp. 21-37. 筑波大学一般応用言語学研究室.
- 宇佐美まゆみ(1999)「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」『日本語学』18(11), pp. 40-56. 東京：明治書院.
- 宇佐美まゆみ(2002a)「ポライトネス理論の展開(1) 「ポライトネス」という概念」『言語』31(1), pp. 100-105. 東京：大修館書店.
- 宇佐美まゆみ(2002b)「ポライトネス理論の展開(3) B & L のポライトネス理論(1)—その位置づけと構成—」『言語』31(3), pp. 108-113. 東京：大修館書店.
- 宇佐美まゆみ(2002c)「ポライトネス理論の展開(4) B & L のポライトネス理論(2)—「フェイス」という概念と「フェイス侵害度見積もりの公式—」『言語』31(4), pp. 96-101. 東京：大修館書店.
- 王書睿(2015)「「断り」研究の概観と課題—日本語教育の視点から—」『日本言語文化研究：城西国際大学大学院紀要』4, pp. 81-95. 言語文化研究編集委員会.
- 大谷尚(2019)『質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで—』, 名古屋：名古屋大学出版会.
- 大谷麻美(2015a)「日本人にとっての英語コミュニケーションの壁—本研究の目的と位置づけ—」津田早苗・田村泰美・大谷麻美・岩田祐子・重光由加・大塚容子『日・英語談話スタイルの対照研究』pp. 1-11. 東京：ひつじ書房.
- 大谷麻美(2015b)「話題展開スタイル日・英対照分析—会話参加者はどのように話題の展開に貢献するか—」津田早苗・田村泰美・大谷麻美・岩田祐子・重光由加・大塚容子『日・英語談話スタイルの対照研究』pp. 193-227. 東京：ひつじ書房.
- 大浜るい子・西村史子(2006)「日本とニュージーランドの言語行動対照分析—あいづちとターン交替の関係から—」町博光『講座・日本語教育学 第2巻 言語行動と社会・文化』pp. 223-233. 東京：スリーエーネットワーク.
- 岡本佐智子・斎藤シゲミ(2004)「日本語副詞「ちょっと」における多義性と機能」『北

- 海道文教大学論集』5, pp. 65-74. 北海道文教大学.
- 沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二(2018)「依頼談話の発想と表現—異文化接触問題の解決をめざした日韓中対照談話論—」『社会言語科学』21(1), pp. 80-95. 社会言語科学会.
- 生越直樹(2012a)「「配慮」の示し方—日本と韓国の言語行動の比較から—」三宅和子・野田尚史・生越直樹編『「配慮」はどのように示されるか』pp. 171-187. 東京：ひつじ書房.
- 生越直樹(2012b)「言語行動の日韓対照研究—その成果と問題点—」野間秀樹編『韓国語教育講座 第2巻』pp. 571-586. 東京：くろしお出版.
- 尾崎喜光(2006)「依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」『言語行動における「配慮」の諸相』pp. 89-114. 東京：くろしお出版.
- 小野正樹(2020)「日本語教育と応用語用論」加藤重広・澤田淳編『はじめての語用論—基礎から応用まで—』pp. 240-254. 東京：研究社.
- 小野由美子・劉玉琴(1998)「異文化間のミスコミュニケーションに関する一考察—日・中母語話者の断り表現をめぐって」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』13, pp. 105-113. 鳴門教育大学.
- 抱井尚子(2019)「混合研究法—量と質の境界を超えて—」『第30回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会予稿集』pp. 100-105. 第二言語習得研究会.
- 加納陸人・梅曉蓮(2003)「日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察—断り表現を中心に—」『言語と文化』15, pp. 19-41. 文教大学大学院言語文研究科附属言語文化研究所.
- 木下英文(2006)「断り談話における代案提示の機能について」『愛媛大学法文学部論集人文学科篇』21, pp. 103-117. 愛媛大学法文学部.
- 金珍娥(2012)「談話論からの接近」野間秀樹編『韓国語教育講座』2, pp. 485-520. 東京：くろしお出版.
- 金原奈穂・春原憲一郎(2007)「外国人留学生の日本企業就職に向けたキャリア・デザインの理論と実態」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 107-112. 日本語教育学会.
- 串田秀也(2009)「聴き手による語りの進行促進—継続支持・継続催促・継続試行—」『認

- 知科学』16(1), pp. 12-23. 日本認知科学会.
- 楠本徹也(1995)「終助詞「よ」の待遇性に関する一考察」『留学生日本語教育センター論集』21, pp. 1-14. 東京外国語大学.
- 熊谷智子(1995)「依頼の仕方—国研岡崎調査のデータから—」『日本語学』7(10), pp. 22-32. 東京：明治書院.
- 熊谷智子(2000)「言語行動分析の観点—「行動の仕方」を形づくる諸要素について—」『日本語科学』7, pp. 95-113. 国立国語研究所.
- 熊谷智子(2002)「「対照研究」と「言語教育」をつなぐために」国立国語研究所編『対照研究と日本語教育』pp. 21-33. 東京：くろしお出版.
- 熊谷智子(2016)「会話分析と談話分析」加藤重広・滝浦真人編『語用論研究法ガイドブック』pp. 239-260. 東京：ひつじ書房.
- 熊谷智子・篠崎晃一(2006)「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」『言語行動における「配慮」の諸相』pp. 19-54. 東京：くろしお出版.
- 黄明淑(2016)「「誘い」談話における再勧誘の言語行動の特徴—中国語母語話者と日本語母語話者の比較—」『日本語教育』164, pp. 64-78. 日本語教育学会.
- 黄郁蕾・玉岡賀津雄ほか(2014)「中国語母語話者の日本語学習によるポライトネスの構造と意識の変容—依頼に対する断り難さに着目して—」『ことばの科学』28, pp. 51-69. 名古屋大学言語文化研究会.
- 高揚(2016)『中国人日本語学習者に見られる語用論的転移—『断り』の場合—』中国海洋大学修士論文.
- 国立国語研究所(1994)『日本語教育映像教材中級編関連教材「伝えあうことば」4. 機能一覧表』、東京：日本シネセル.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子(2016a)『海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—I-JAS 構築に関する最終報告書—』国立国語研究所.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子(2016b)「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』6(3), pp. 93-110. 国立国語研究所.
- 迫田久美子・蘇鷹・張佩霞(2017)「中国語母語話者のロールプレイに見られる依頼表

- 現—日本語学習者の「念押し」表現への言語転移の可能性—』『日中言語研究と日本語教育』10, pp. 50-63. 東京：好文出版.
- 定延利之(2005)『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化—』、東京：岩波書店.
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法』、東京：新曜社.
- ザトラウスキー、ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』、東京：くろしお出版.
- 澤田淳(2020)「語用論とは何か」加藤重広・澤田淳編『はじめての語用論—基礎から応用まで—』 pp. 1-23. 東京：研究社.
- 施信余(2005)「依頼に対する「断り」の言語行動について—日本人と台湾人の大学生の比較—」『早稲田大学日本語教育研究』6, pp. 45-61. 早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- 施信余(2007)『「待遇コミュニケーション」における「依頼」に対する「断り」の研究—日台の言語行動の比較を中心に—』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文.
- 清水崇文(2009)『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』、東京：スリーエーネットワーク.
- 清水崇文(2016)「応用語用論」加藤重広・滝浦真人編『語用論研究法ガイドブック』 pp. 217-238. 東京：ひつじ書房.
- 清水崇文(2018)『コミュニケーション能力を伸ばす授業づくり—日本語教師のための語用論的指導の手引き—』、東京：スリーエーネットワーク.
- 肖志・陳月吾(2008)「依頼に対する断り表現についての日中対照研究」『福井工業大学研究紀要 第二部』38, pp. 133-140. 福井工業大学.
- 申媛善(2006)「情報やりとりにおける受信者側の働き—日本語話者と韓国語話者の比較—」『筑波応用言語学研究』13, pp. 85-98. 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース.
- 杉戸清樹・尾崎喜光(2006)「「敬意表現」から「言語行動における配慮」へ」『言語行動における「配慮」の諸相』 pp. 1-10. 東京：くろしお出版.
- 梶本総子(2004)「提案に対する反対の伝え方—親しい友人同士の会話データをもとに

- して—」『日本語学』23(10), pp. 22-33. 東京：明治書院.
- 薛鳴・坂本恵(2014)「コミュニケーションを阻害する文化的な違いについて—一日中の「親しくなること」「親しくなるためのストラテジー」の相違を中心に—」『待遇コミュニケーション』11, pp. 86-101. 待遇コミュニケーション学会.
- 高梨克也・榎本美香(2009)「特集「聞き手行動から見たコミュニケーション」の編集にあたって」『認知科学』16(1), pp. 5-11. 日本認知科学会.
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』、東京：研究社.
- 辻周吾・景浦亮平・石井香織・安達万里江(2016)「留学生の日本語コミュニケーションに関わる諸問題」『国際言語文化学会 日本学研究』1, pp. 1-12. 京都外国語大学国際言語文化学会事務局.
- 辻幸夫(2003)『認知言語学への招待 シリーズ認知言語学入門』第1巻、東京：大修館書店.
- 藤越(2017)「友人への「断り」に対する評価に関する質的調査—日本語母語話者と中国人日本語話者の評価を通して—」『言語資源活用ワークショップ 2016 発表論文集』1, pp. 10-19. 国立国語研究所学術情報リポジトリ.
- 中井陽子(2017)「誘いの会話の構造展開における駆け引きの分析—日本語母語話者同士の断りのロールプレイとフォローアップ・インタビューをもとに—」『東京外国語大学論集』95, pp. 105-125. 東京外国語大学.
- 中井好男・舩橋瑞樹・副田恵理子・向井裕樹(2018)「LINE での日本語母語話者からの誘いを非母語話者はどう断っているか—「再誘い」を誘発する要因とその背景にある意識—」『国立国語研究所論集』14, pp. 169-192. 国立国語研究所.
- 中垣友江(2014)「日本語とスワヒリ語における「勧誘」会話の対照研究—昼ごはんの「勧誘の断り」の会話から—」『日本語・日本文化研究』24, pp. 170-185. 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻.
- 西尾純二(2012)「日本語の配慮言語行動の社会的多様性」三宅和子・野田尚史・生越直樹編『「配慮」はどのように示されるか』pp.71-90. 東京：ひつじ書房.
- 西川玲子(2005)「日常会話に起こるナラティブの協同形成—理論構築活動としてのナラティブ—」『社会言語科学』7(2), pp. 25-38. 社会言語科学会.
- 西田司・グディカンスト, W. B. (2002)『異文化間コミュニケーション入門—日米間の



- 相互理解のために―』、東京：丸善.
- 仁田義雄(2009)「待遇表現の運用」日本語記述文法研究会編『現代日本語文法 7』pp. 289-299. 東京：くろしお出版.
- 野木園子(2010)「日本人の断り表現とラポールマネジメントに関する一考察」『二松学舎大学論集』53, pp. 97-109. 二松学舎大学文学部.
- 野田尚史(2012)「配慮したつもりなのによい印象を与えない日本語非母語話者の言語表現・言語行動」三宅和子・野田尚史・生越直樹編『「配慮」はどのように示されるか』pp. 131-152. 東京：ひつじ書房.
- 野村啓治(2000)「日本人コミュニケーションの基本特性―異文化コミュニケーションにおける自文化認識の視点から―」『コミュニケーション科学』11, pp. 3-20. 東京経済大学コミュニケーション学部開設事務室.
- 河正一(2012)「相互作用における言語行動―自他志向と言語行動の動機づけにおける社会的要因―」『日本アジア研究』9, pp. 45-61. 埼玉大学大学院文化科学研究科.
- バークランド、ジェフ(2004)『日本から文化力 異文化コミュニケーションのすすめ』現代書館.
- 橋内武(1999)『ディスコース 談話の織りなす世界』、東京：くろしお出版.
- 橋本満弘・畠山均・丸山真純(2006)『教養としてのコミュニケーション』、東京：北樹出版.
- 馬場俊臣・禹永愛(1994)「日中両語の断り表現をめぐって」『北海道教育大学紀要 第1部 人文科学編』45(1), pp. 43-54. 北海道教育大学.
- 林伸一(2014)「「省略する文化」と「明示する文化」―日本事情論としての考察―」『山口大学文学会誌』64, pp. 123-136. 山口大学文学会.
- 林宅男(2008)『談話分析のアプローチ―理論と実践』、東京：研究社.
- ハヤティ、ノフィア(2017)「日本語とスダ語における「断り」談話とそれに対する反応―予備調査結果の分析に基づいて―」『金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習』12, pp. 55-68. 金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習.
- 日高水穂(2012)「「察し合い」の談話展開に見られる日本語の配慮言語行動」三宅和子・野田尚史・生越植樹編『「配慮」はどのように示されるか』pp. 91-112. 東京：ひつじ書房.

- 平田祐子(2003)「日本人のコミュニケーション能力向上についての一考察—日本人の特性を考慮したプレゼンテーション教育 —」『同志社国文学』58, pp. 175-184. 同志社大学国文学会.
- 藤井洋子(2018)「「個を基体とする言語行動」と「場を基体とする言語行動」—英語・中国語・日本語・韓国語・タイ語の比較より—」『社会言語科学』21(1), pp. 129-145. 社会言語科学会.
- 藤森弘子(1994)「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー—『断り』行為の場合—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1, pp. 1-19. 名古屋学院大学留学生別科.
- 藤森弘子(1995)「日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」『日本語教育』87, pp. 79-90. 日本語教育学会.
- 藤森弘子(1996)「関係修復の観点から見た「断り」の意味内容—日本人と中国人日本語学習者の比較—」『大阪大学言語文化学』5, pp. 5-17. 大阪大学.
- 藤原智栄美(2004)『日本語話者とインドネシア語話者の「断り」に関する研究』大阪大学言語文化学専攻博士論文.
- 藤原安佐・阿部仁美・大井裕子・椿原博子・吉田則子(2009)「日本語教育における配慮に関わる表現の指導」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』108, pp.85-98. 北海道大学大学院教育学研究院.
- 文鐘蓮(2006)「中国人日本語学習者における「断り」表現の問題点」『「対話と深化」の次世代女性リーダーの育成：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ平成18年度活動報告書：海外研修事業編』pp. 34-38. お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ人事事務局.
- 平静・松村瑞子(2011)「日中会話におけるポライトネス・ストラテジー」『言語文化研究』26, pp. 73-84. 九州大学大学院言語文化研究院.
- 堀素子・津田早苗・大塚容子・村田泰美・重光由加・大谷麻美・村田和代(2006)『ポライトネスと英語教育—言語使用における対人関係の機能—』、東京：ひつじ書房.
- 堀江薫(2016)「対照語用論」加藤重広・滝浦真人編『語用論研究法ガイドブック』pp. 133-153. 東京：ひつじ書房.

- 堀田智子・堀江薫(2012)「日本語学習者の「断り」行動におけるヘッジの考察—中間言語語用論分析を通じて—」『語用論研究』14, pp. 1-19. 日本語用論学会.
- 本名信行・羅華(2018)『Q & R でわかる 中国人とのつき合い方』、東京：大修館書店.
- 洪珉杓(2007)『日韓の言語文化の理解』、東京：風間書房.
- マスデン真理子(2011)「日本人大学生が失礼だと感じる留学生の誘い・断りの表現に関する予備調査」『熊本大学国際化推進センター紀要』2, pp. 51-73. 熊本大学.
- 町博光(2006)『講座・日本語教育学 第2巻 言語行動と社会・文化』、東京：スリーエーネットワーク.
- 水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』12(7), pp. 4-11. 東京：明治書院.
- 三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』、東京：くろしお出版.
- 三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』、東京：ひつじ書房.
- 三宅和子(2019)「モバイル・メディアにおける配慮—LINE の依頼談話の特徴—」山岡政紀編『日本語配慮表現の原理と諸相』pp. 163-180. 東京：くろしお出版.
- 村田和代(2018)『聞き手行動のコミュニケーション学』、東京：ひつじ書房.
- メイナード、泉子・K (1993)『会話分析(日英語対照研究シリーズ 2)』、東京：くろしお出版.
- 蒙韞(2010)「日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの一考察—日本人会社員と中国人会社員の比較を通して—」『異文化コミュニケーション研究』22, pp. 1-28. 神田外語大学.
- 八島智子・久保田真弓(2012)『異文化コミュニケーション論—グローバル・マインドとローカル・アフェクト—』、東京：松柏社.
- 八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美(2001)『異文化コミュニケーション・ワークブック』、東京：三修社.
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田友子(2009)『改訂版 異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる』、東京：三修社.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2018)『新版 日本語語用論入門—コミュニケーション理論から見た日本語—』、東京：明治書院.
- 山岡政紀(2019)「配慮表現とは何か」山岡政紀編『日本語配慮表現の原理と諸相』pp. 1-15.

東京：くろしお出版.

山口和代(1997)「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因—中国人および台湾人留学生を対象として—」『日本語教育』93, pp. 38-48. 日本語教育学会.

楊虹(2015)「初対面会話における話題上の聞き手行動の中日比較」『日本語教育』162, pp. 66-81. 日本語教育学会.

吉田智子(1989)「発話の重なり現象の考察—電話会話の分析—」『日本語教育論集』6, pp. 76-93. 国立国語研究所.

吉田裕久(2006)「国語科で育てるべきことばの力」『日本語学 特集 国語科の授業でつきたい学力とは』25(2), pp. 6-14. 東京：明治書院.

吉田好美(2015)『勧誘に対する断りの研究—日本語母語話者とマナド語母語話者の比較—』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士論文.

吉田好美(2016)「再勧誘後における断り発話の出現について—日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較—」『比較文化研究』124, pp. 63-72. 日本比較文化学会.

李威(1999)「日・中・韓母語話者の「断り」行為の対照研究」『平成 11 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 181-186. 日本語教育学会.

李運博・修剛(2018)「新時代に向かう中国日本語教育の現状と課題」『早稲田日本語教育学 特集 海外の高等教育機関における日本語教育の現状と課題—日本からは見えない文脈を検証する』24, pp. 49-57. 早稲田大学大学院日本語教育研究科.

李海燕(2013)『「断り」表現の日中対照研究』東北大学大学院国際文化研究科博士学位論文.

李国玲(2015)『改善要求発話の日中対照研究—認知コミュニケーション論の観点から—』筑波大学大学院人文社会科学研究科博士学位論文.

劉玉琴・小野由美子(1996)「中日母語話者の「断り」発話行為に見られる相違について」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』42(2), pp. 540-545. 中国四国教育学会.

【英語文献】

- Aijmer, Karin (ed.) (2011). *Contrastive Pragmatics*, Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Austin, J. L. (1962). *How to Do Things with Words* (eds. Urmson and Sbisà). Oxford: Oxford University Press.
- Beebe, Leslie M., T. Takahashi and R. Uliss-Weltz (1990). Pragmatic transfer in ESL Refusals. In R. Scarcella, E. Anderson and S. Krashen (eds.) *Developing communicative competence in a second language*. pp. 55-73. New York: Newbury House.
- Blum-Kulka, Shoshana, Juliane House and Gabriele Kasper. (1989). Investigating Cross-Cultural Pragmatics: An Introductory Overview, In Shoshana Blum-Kulka, Juliane House and Gabriele Kasper (eds.) *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*, pp. 1-34. Norwood, NJ: Ablex.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987 [1978]). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge, MA: Cambridge University Press. [ペネロピ・ブラウン、スティーヴン・C・レヴィンソン著、田中典子監訳、斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野寿憲・山下早代子訳(2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』、東京：研究社]
- Byram, M. (2008). *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Chen, X., Ye, L., & Zhang (1995). Refusing in Chinese. In G. Kasper, *Pragmatics of Chinese as native and target language*. pp. 119-163. Honolulu, Hawaii: University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center.
- Fillmore, Charles J. (1984). Remarks on contrastive pragmatics, In Jacek Fisiak (ed.) *Contrastive Linguistics: Prospects and Problems*, pp. 119-143, Berlin: Mouton.
- FitzGerald, H. (2003). *How different are we? Spoken discourse in intercultural communication*. Clevedon: Multilingual Matters. [ヘレン・フィッツジェラルド著、村田泰美監訳、重光由加・大谷麻美・大塚容子訳 (2010)『文化と会話スタイル—多文化社会・オーストラリアに見る異文化間コミュニケーション—』、東京：ひつじ書房]
- Geert Hofstede, Gert Jan Hofstede, and Michael Minkov. (2010). *Cultures and Organizations*:

- Software of the Mind, 3rd ed.* [G・ホフステード、G・J・ホフステード、M・ミンコフ著、岩井八郎・岩井紀子訳(2013)『多文化世界〔原書第3版—違いを学び未来への道を探る—〕』、東京：有斐閣]
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York: Pantheon Books.
- Golato, Andrea. (2003). Studying Compliment Responses: A comparison of DCTs and Recordings of Naturally Occurring Talk, *Applied Linguistics* 24 (1), pp. 90-121, Oxford University Press.
- Grice, H.P. (1975). *Logic and conversation*. University of California Berkeley.
- Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies: Studies in Interactional Sociolinguistics*. London: Cambridge University Press.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. New York: Doubleday. [エドワード・T・ホール著、岩田慶治・谷泰訳(1979)『文化を超えて』、東京：(株)ティビーエス・ブリタニカ]
- Kasper, Gabriele. (2000). Data Collection in Pragmatics Research, In Helen Spencer-Oatey (ed.) *Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures*, pp. 316-341, London: Continuum. [ヘレン・スペンサー＝オーティー編著、田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理・福島佐江子訳(2004)『異文化理解の語用論—理論と実践—』、東京：研究社]
- Lakoff, R. (1973). The logic of politeness: Or, minding your p's and q's. In C. Corum, T. C. Smith-Stark, & A. Weiser (Eds.), *Papers from the Ninth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*, pp. 292-305. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Langacker, Ronald. W. (2008). *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press. [ロナルド・W・ラネカー著、山梨正明監訳(2011)『認知文法論序説』、東京：研究社]
- Leech, G. N. (1983). *Principles of Pragmatics*. University of California: Longman. [リーチ・G・N 著、池上嘉彦・河上誓作訳(1987)『語用論』、東京：紀伊國屋書店]
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. [レヴィンソン・S・C 著、安井稔・奥田夏子訳 (1990)『英語語用論』、東京：研究社]
- Littlewood, William. (1983). Contrastive pragmatic and the foreign learner's personality,

*Applied Linguistics* 4(3), pp. 200-206.

Nelson, Gayle L., Waguida El Bakary and Mahmoud Al Batal. (1996). Egypt and American Compliments: Focus on Second Language Learners, In Susan M. Gass and Joyce Neu (eds.) *Speech Acts Across Cultures: Challenges to Communication in a Second Language*, pp. 109-128, Berlin: Mouton de Gruyter.

Oleksy, Wieslaw. (ed.) (1989). *Contrastive Pragmatics*, Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Pütz, Martin and JoAnne Neff-Aertselaer. (eds.) (2008). *Developing Contrastive Pragmatics: Interlanguage and Cross-Cultural Perspectives*, Berlin: de Gruyter.

Sasaki, M. (1998). Investigating EFL students' production of speech acts: A comparison of Production questionnaires and role plays. *Journal of Pragmatics*, 30, pp. 457-484.

Searle, J. R. (1969). *Speech acts: an essay in the philosophy of language*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

Thomas, Jenny. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: Longman. [ジェニー・トマス著、田中典子・鶴田庸子・津留崎毅・成瀬真理訳(1998)『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味—』、東京：研究社]

### 【中国語文献】

张仲超(2012)《饭局关系学》、昆明：云南人民出版社.

### 【参考辞典】

近藤安月子・小森和子(2012)『日本語教育事典』、東京：研究社.

中島義明・子安増生・繁榊算男・箱田裕司・安藤清志・坂野雄二・立花政夫(1999)『心理学辞典』、東京：有斐閣.

Nicholas Allott. (2010). *Key Terms in Pragmatics*. London: Continuum Intl Pub Group. [ニコラス・E. アロット著、今井邦彦監訳、岡田聡宏・井門亮・松崎由貴・古牧久典訳(2014)『語用論キーワード事典』、東京：開拓社]

## 付録Ⅰ 調査票

### 付録Ⅰ-1 日本語母語話者への調査票

#### 「断り」表現に関するアンケート調査

本調査への回答や結果は学術的な目的以外に使用することは一切ございません。調査はコミュニケーションを記述するためのもので、論文中において文法や表現の間違いを指摘したり、言語能力を評価したりすることはありません。また、皆様の個人情報を他者に見せることもございません。下記の情報は本調査において貴重なデータになりますので、ご記入お願い申し上げます。

1. まず、ご自身のことについてお伺いします。

年齢：

性別：

学類・年次：

2. 調査内容

次の文章を読んで、その場면을イメージしてください。以下の場面に際して、あなたは相手からの依頼に対してどのように断りますか。できるだけ自然に実際に話すように教えてください。

＜場面Ⅰ＞ あなたの親友が今週末に引越しします。彼／彼女はあなたに手伝ってくれることを望んでいます。

友達：今週末引越ししなければならなくなったの、手伝ってくれる？

あなた：



<場面Ⅱ> 日頃からあなたとの関係が良好な先生が、今週末の家庭教師のバイトを  
あなたに紹介されました。

先生：今週末に家庭教師のバイトがあるんですけど、やりませんか？

あなた：

### 3. 本調査に対するコメント

今回の調査につきまして、どう思われたでしょうか。皆様からのご意見やコメント  
が、これからの研究に大変役に立ちますので、ぜひご遠慮無く書いていただければ、  
嬉しく存じます。

中国海洋大学 日本言語文学専攻

高揚

1163719222@qq.com

## 付録 I -2 中国語母語話者への調査票

### 关于“拒绝”表达的调查问卷

您好。非常感谢您抽出宝贵时间配合完成此份调查问卷。本调查的目的是分析并考察在不同情境中的“拒绝”语言表达，而并非对您的语法或表达进行指摘，也并非用来评价您的语言表达能力。本次调查采取匿名制，您的回答将只用于论文的数据分析。

1. 请先填写一下您的个人信息。

年龄：

性别：

专业・年级：

2. 请阅读下面的短文，并想象一下具体场景。在这种情况下，面对对方的请求，你将如何拒绝呢？请按照您平时的说话习惯，尽可能做出自然地回答。

〈场景一〉你亲密的好朋友这周末要搬家。他／她希望你能够去帮忙。你如何拒绝呢？

好友：这周末我要搬家了。你能来帮我吗？

你：

〈场景二〉平时与你关系不错老师，给你介绍了一份周末做家教的兼职。你如何拒绝呢？

老师：这周末有一份家教的兼职。你去做吧？

你：

### 3. 关于对此次调查问卷的感想

感谢您抽出时间配合完成了此次问卷调查。如果您不介意，请将您对本次调查的感想或意见写在下面。

中国海洋大学 日语语言文学专业

高扬

1163719222@qq.com

## 付録Ⅱ 談話完成テスト資料

### 付録Ⅱ-1 日本語母語話者の談話完成テスト資料

<場面> 親しい友人に引越しの手伝いを頼まれて断る

- JNS1M 面倒だからパスで。
- JNS2M ごめんね。距離が遠いのと、時間がたくさん取れないから行けない。
- JNS3M ごめん、バイトだわ。
- JNS4M 勉強で忙しい。
- JNS5M その日忙しいから、無理なんだ。
- JNS6F 今週末はちょっと用事があるから行けない。ごめんね！
- JNS7F ごめん、その日は用事があるから…。
- JNS8F ごめんね。その日は予定があるから行けないんだ。他の日なら大丈夫だと思う。
- JNS9F バイトがあるから手伝えないんだ。ごめんね。
- JNS10F 彼がどうしても手伝ってほしいことがあるから行けないよ。ごめんね。
- JNS11F その日用事があって手伝えない！ごめんね。
- JNS12F ごめん、今週末は予定があるから他の子にお願いしてほしい。
- JNS13F 今週末は用事があるから手伝えない。
- JNS14F ごめんなさい。行けないです。
- JNS15F ごめん、その日予定合わないんだ…。
- JNS16F ごめん、無理そう。
- JNS17F 用事がもしかしたら入るかもしれない！
- JNS18F ごめん、その日はもう用事があって…
- JNS19F その日大事な予定があるの。
- JNS20F 今週末はちょっと先約があって…。それ以後の〇〇日なら大丈夫だけど…  
どう？

## 付録Ⅱ-2 中国語母語話者の談話完成テスト資料

<情景> 拒绝好朋友请你帮忙搬家的请求

CNS1M 对不起。我周末姥姥要来，我好久没和姥姥一起吃饭了，实在抱歉。下次有什么需要帮助一定去。

CNS2M 不好意思，周末我家里有点事，不能去帮你了。

CNS3M 这周末我一个老同学要来，恐怕不能帮你忙啦，回头你收拾新家的时候一定去帮忙哈。

CNS4M 真不好意思，周末我恰好有个重要的活动需参加，要不我替你联系其他人？

CNS5M 不好意思啊，我这周末有事，实在抽不开身。

CNS6M 下午老板找我讨论，去不了。

CNS7M 我周末有事。如果忙完，我尽量过去帮你。

CNS8F 啊……对不起，不行耶，这周有很重要的社团活动必须得参加。

CNS9F 我可能没有时间。这样吧，有时间我一定去，老朋友搬家我也不太好缺席，对吧。

CNS10F 我周末要去辅导班代课，下午4点才能完，下课后我立马赶过去帮你，好吗？抱歉啊！

CNS11F 不好意思，周末有事推不了，怎么不早说，都和别人约好了。

CNS12F 这周末我和别人约好了，不能去帮你啦。

CNS13F 这周末有课啊，抱歉啊，改天补偿你。

CNS14F 周末我已经有别的安排了，很重要，抱歉。

CNS15F 不好意思啊，我周末有别的安排了，要不我这几天帮你？

CNS16F 我这周末有事，不然晚上我给你带过去好吃的？

CNS17F 我周末要开会，开完会我就过去。

CNS18F 不好意思啊，我有别的事了，我帮你问问其他朋友吧。

CNS19F 不好意思啊，这个周末我得准备考试，没办法帮你搬家了。

CNS20F 不好意思，我真的很想帮你，但是家里面临时有点事走不开，非常抱歉。

## 付録Ⅲ 意識調査票

### 付録Ⅲ-1 中国語母語話者への意識調査票

#### 关于拒绝表达方式的意识调查

您好，十分感谢您抽出宝贵的时间完成此份调查问卷。此问卷是关于拒绝表达方式的意识调查。本调查采取匿名制，您的回答将成为研究的重要分析数据，分析结果将应用于增进中日间异文化交流及日语教育的改善。谢谢您的配合。

● 请先填写一下您的个人信息。

A. 年龄：

B. 职业：公司职员・学生（本・硕・博）・其他

C. 性别：男・女

● 下列场景中，作为被拒绝的一方，您有什么感受？请从下列拒绝表达方式中，按照接受程度从易到难排列（例如：a>b>c），并填写排列理由。

<场景>你的好朋友（关系非常要好）拒绝了你周末请他/她帮你搬家的请求。

你：这周六我打算搬家。你能来帮我的忙吗？

好朋友：\_\_\_\_\_。

1. a. 抱歉啊，周六我已经有安排了……

b. 真不好意思，周末我恰好有个重要活动需参加，要不我替你联系其他人？

c. 抱歉，这周末我有安排了，你问问其他人吧。

①容易接受的顺序（从易到难）：

---

②排列的理由:

---

---

---

2. a. 我周末要去辅导班代课, 下午 4 点才能完。下课后我立马赶过去帮你, 好吗? 抱歉啊!

b. 抱歉啊, 周末我已经有安排了去不了了。改天的话可以帮忙。

c. 这周末我有点事去不了。抱歉啊!

①容易接受的顺序 (从易到难):

---

②排列的理由:

---

---

---

● 对于本次调查的意见和建议

对于本次关于拒绝表达方式的意识调查, 您有什么想法、意见或建议, 请您填写在下列横线处。您的意见和建议, 将会对我的研究有很大的帮助。

---

---

---

谢谢您的合作。

## 付録Ⅲ-2 日本語母語話者への意識調査票

### 断り方への意識調査

この調査は、断り方について意識調査で、テストではありません。お答えいただいたコメントは貴重なデータになり、研究のみに使用することをお約束いたします。また、他者の見せることもごさいません。異文化コミュニケーションおよび日本語教育を改善するために、ご協力お願い申し上げます。

- まずご自身のことについてお伺いします。

A.年齢:\_\_\_\_\_

B.職業：社会人・学生(学年：学部生・院生・博士)・その他

C.性別：男・女

- 以下の場面で、断られた側として、実際にこのように断られたら、あなたはどうか感じますか。断りの表現の中(断りパターンによって、1と2の2つのセットに分ける)で、受け入れやすい順に並べ(例:a>b>c)、その並べた理由を書いてください。

<場面>親しい友人（同性）に週末に宿舍の引越しの手伝いを頼みましたが、  
断られました。

あなた：ねえ、今週末引越ししなければならなくなっただけど、手伝ってくれない？

親しい友人：\_\_\_\_\_。

1. a.ごめん、その日はもう用事があって…  
b.本当にごめん。週末はあいにく大事な活動に参加しなければならないから、代わりに私が他の人に連絡するのはどう？  
c.ごめん、今週末は予定があるから、他の子にお願いしてほしい。



①受け入れやすい順：

---

②受け入れやすい順を選んだ理由：

---

---

---

2. a. 週末は塾があつて、午後4時授業が終わるんだ。終わってからすぐに手伝いに行くよ。それでいい？ごめんね！
- b. ごめんね、その日は予定があるから行けないんだ。他の日なら大丈夫だと思う。
- c. 今週末はちょっと用事があるから行けない。ごめんね！

①受け入れやすい順：

---

②受け入れやすい順を選んだ理由：

---

---

---

● 本調査に対するコメント

今回の調査につきまして、ご意見やコメントなどが、研究に大変役に立ちますので、ぜひお書きください。

---

---

---

ご協力どうもありがとうございました。

## 付録Ⅳ 意識調査における調査協力者の内訳

### 付録Ⅳ-1 日本語母語話者の内訳

表 1 日本語母語話者の内訳 (2017 年 8 月調査当時)

番号	性別(男／女)	年齢(歳)	職業(社会人／学生)
JNS1	女	20	学部生
JNS2	女	21	学部生
JNS3	女	20	学部生
JNS4	女	23	大学院生
JNS5	女	40	大学院生
JNS6	女	18	学部生
JNS7	女	26	大学院生
JNS8	女	50	大学院生
JNS9	男	38	大学院生
JNS10	女	23	大学院生
JNS11	女	22	大学院生
JNS12	女	18	学部生
JNS13	女	18	学部生
JNS14	男	34	社会人
JNS15	女	50	社会人
JNS16	女	43	社会人
JNS17	男	25	大学院生
JNS18	女	38	社会人
JNS19	女	73	定年
JNS20	男	19	学部生

## 付録Ⅳ-2 中国語母語話者の内訳

表 2 中国語母語話者の内訳 (2017 年 8 月調査当時)

番号	性別(男／女)	年齢(歳)	職業(社会人／学生)
CNS1	男	26	社会人
CNS2	女	27	社会人
CNS3	女	24	大学院生
CNS4	男	20	学部生
CNS5	女	20	学部生
CNS6	女	19	学部生
CNS7	女	26	社会人
CNS8	男	20	社会人
CNS9	男	43	社会人
CNS10	女	35	社会人
CNS11	女	40	社会人
CNS12	女	35	社会人
CNS13	女	20	学部生
CNS14	男	28	社会人
CNS15	女	26	社会人
CNS16	男	29	社会人
CNS17	女	26	社会人
CNS18	女	54	定年
CNS19	男	53	社会人
CNS20	男	26	社会人

## 付録Ⅴ ロールプレイカード

### 付録Ⅴ-1 日本語版のロールプレイカード

#### 被依頼側の日本語母語話者へのロールプレイカード

(迫田他(2016b : 68)を参考に筆者作成)

##### 状況：

- 被依頼側：調査協力者の日本語母語話者/中国人日本語学習者  
日本料理店でのアルバイト(接客)、週3回勤務
- 依頼側：調査実施研究者の日本語母語話者  
日本料理店の店長

断りのタスク：アルバイト先でホール担当から調理担当に変わるように依頼され断る

##### 課題の提示：

あなたは、日本料理店<sup>にほんりょうりてん</sup>でアルバイトをしています。接客<sup>せつきやく</sup>スタッフとして注文<sup>ちゅうもん</sup>を取ったり、料理<sup>りょうり</sup>を運<sup>はこ</sup>んだりしています。

店長<sup>てんちやう</sup>さんから、「料理<sup>りょうり</sup>をつく<sup>つく</sup>人が一人<sup>ひとり</sup>やめたので、来月<sup>らいげつ</sup>から料理<sup>りょうり</sup>をつく<sup>つく</sup>仕事を担当<sup>しごと</sup>してほしい」と言<sup>い</sup>われました。しかし、あなたは料理<sup>りょうり</sup>に<sup>に</sup>が<sup>が</sup>て、日本人<sup>にほんじん</sup>と話<sup>はな</sup>せる仕事<sup>しごと</sup>がしたいので、この話<sup>はなし</sup>を断<sup>ことわ</sup>りたいと思<sup>おも</sup>いました。

店長<sup>てんちやう</sup>に、料理<sup>りょうり</sup>の仕事<sup>しごと</sup>の話<sup>はなし</sup>をじょうずに断<sup>ことわ</sup>って、今<sup>いま</sup>の仕事<sup>しごと</sup>を続<sup>つづ</sup>けられるように話<sup>はな</sup>してください。

(準備<sup>じゆんび</sup>ができれば始<sup>はじ</sup>めますから、準備<sup>じゆんび</sup>ができれば教<sup>おし</sup>えてください。)

## 付録V-2 中国語版のロールプレイカード

### 依頼側のロールプレイカード(筆者作成)

#### 角色扮演(1)

你是日本料理店の店长。作为店长，主要负责料理店的运营及人事调动安排等工作。店里生意一直都很好，可是最近负责做菜的王师傅突然辞职了。一时间厨房里缺了人手，有些怠慢了给客人上菜的时间。因此你想调在大厅负责接待客人的小李从下个月起到后厨担任做菜的工作。

请你巧妙地向小李提议，并尽可能地让小李答应你的提议。

(等你准备完毕后我们开始，所以请你准备完毕后告诉我。)

### 依頼側のロールプレイカード(日本語訳は筆者による)

あなたは、日本料理店の店長です。店の運営および人事異動の手配などを行っています。

今までずっと店の景気はいいですが、料理を作る王さんが突然やめたので、手が回らなくなり、料理を提供する時間が長くなってしまいました。そのため、あなたはホールを担当している李さんに来月から調理担当を頼みたいと思います。

李さんに依頼して、応諾を得られるように話してください。

(準備ができれば始めますから、準備ができれば教えてください。)

被依頼側のロールプレイカード(迫田他 2016 : 221 より)

角色扮演(2)

你在日本料理店打工。作为接待客人的服务员，平时的工作内容是接受客人的点菜，并把菜端到客人桌上等。

店长和你说，“做菜的有一个人辞职了，所以我希望你从下个月起担任做菜的工作。”但是，你不擅长做菜，并且你想做能练习日语会话的工作。因此你想拒绝店长的提议。

请你巧妙地拒绝店长，并继续你当前的工作内容。

(等你准备完毕后我们开始，所以请你准备完毕后告诉我。)

## 博士論文に関わる研究発表活動（章関連）

### 第1章、第2章

新規執筆

### 第3章

高揚(2017a)「「断り」における日中対照研究—断られた側の意識調査から—」第9回

日本語／日本語教育研究会 ポスター発表 2017年10月1日大阪大学にて 『日本語/日本語教育研究会第9回大会 ポスター発表予稿集』

高揚(2017b)「「断り」における配慮表現のフレキシビリティ—日中対照を通して—」

第9回日本語コミュニケーション研究会 口頭発表 2017年11月4日筑波大学にて

高揚(2018c)「断り発話の構成要素に関する日中対照研究—認知とポライトネスの接点から—」日本語用論学会第21回大会 口頭発表 2018年12月1日杏林大学にて『日

本語用論学会第21回大会発表論文集(第14号)』 pp. 49-56

高揚(2019b)「断りの言語行動における配慮表現のフレキシビリティ—日中の若者にお

ける比較を通して—」『日本語コミュニケーション論集』第8号, pp. 44-54. 日本語コミュニケーション研究会【研究論文】

高揚(2019c)关于被拒绝方意识差异的中日对比研究.《汉日语言对比研究论丛》第10辑,

pp. 291-306. 汉日对比语言学研究（协作）会【研究論文(査読付き)】

### 第4章

高揚(2018a)「日本語母語場面と日中接触場面における「断り」言語行動の一考察—初

出の断りから合意形成に至るプロセスに注目して—」第10回漢日対比言語学シンポジウム 口頭発表 2018年8月19日蘇州大学にて『第十届汉日对比语言学研讨会会议手册』 pp.200

高揚(2019a)「「断り」言語行動の日中対照研究—日本語母語場面と日中接触場面にお

ける談話展開を中心に—」言語社会心理学研究会第3回定例研究会 口頭発表 2019年1月26日国立国語研究所にて

高揚(2019d)「再依頼から合意形成に至る断りの会話の展開構造―断る側の日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較―」2019年度日本比較文化学会 東北・関東支部合同例会 口頭発表 2019年9月7日神田外語学院にて

高揚(2020a)「再依頼から合意形成に至る断りの談話の展開構造―被依頼側の日本語母語話者と中国人日本語学習者との比較―」『国際日本研究』第12号, pp.155-171. 筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻【研究論文(査読付き)】

## 第5章

高揚(2019e)「依頼に対する断りの談話展開のスタイル―日本語母語話者と中国語母語話者の比較―」第20回国際言語文化学会 日本語・日本語教育研究会 口頭発表 2019年9月10日グランフロント大阪にて

高揚(2020b)「依頼に対する断りの談話展開のスタイル―日本語母語話者と中国語母語話者の比較―」『国際言語文化学会 日本学研究』第5号, pp. 109-128. 国際言語文化学会 日本語・日本語教育研究会【研究論文(査読付き)】

## 第6章

高揚(2018b)「日本語母語場面と日中接触場面における「断り」言語行動の一考察―「察し合い」の談話展開とそこに見る配慮表現―」社会言語科学会第42回大会 口頭発表 2018年9月23日広島大学にて 『社会言語科学会第42回大会発表論文集』 pp. 89-92.

高揚(2019f)「依頼に対する断りの談話展開に見られる配慮言語行動に関する一考察―日本語と中国語の対照研究の観点から―」『ことば』第40号, pp. 160-177. 現代日本語研究会【研究論文(査読付き)】

## 第7章

新規執筆

(なお、すべて既刊論文および学会発表に加筆・修正を施している)



## 謝 辞

本論文は、筆者が筑波大学大学院人文社会科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものです。本論文を執筆するにあたり、多くの方々のご指導やご支援をいただき、ここに感謝の意を申し上げたいと思います。

中国国家留学基金管理委员会の実施する「国家建設高水平大学公派研究生項目」の奨学金をいただき、2016年の秋学期に筑波大学に入学しました。以来、同専攻教授小野正樹先生には、指導教官・主査として、研究の方向づけから分析の詳細に至るまで終始一貫して丁寧で親身にご指導いただき、数多くの激励の言葉を賜りました。研究の独創性やオリジナリティを磨いていただき、研究者としての成長を温かく見守ってくださいましたことに、深謝の意を申し上げます。

同専攻准教授ヴァンバーレン・ルート先生と関崎博紀先生にも、入学して以来大変お世話になり、副査としてご助言をいただくとともに本論文の細部にわたりご指導をいただきました。謹んで感謝の意を申し上げます。

他にも多くの方々からご支援いただきました。論文審査委員会の明石純一先生、日頃からお世話になっている同専攻の井出里咲子先生、現代語・現代文化専攻の佐々木勲人先生、流通科学大学准教授辻周吾先生、いつも温かく支えてくださった新潟大学の蒙韞先生、小野ゼミの先輩で現在は長安大学で教鞭を執る李国玲先生、大学院時代の指導教官である中国海洋大学の教授王文賢先生、元中国海洋大学外国人講師早川正恭先生、および国際日本研究専攻事務室の職員の皆様、小野ゼミの皆様、データ収集にご協力いただいた中国海洋大学、筑波大学、桜美林大学の皆様、ネイティブチェックをしてくださった東出朋先生、片山奈緒美さん、森島有紀さんにも、厚く御礼申し上げます。皆様からの心温まるご支援とご協力をいただいたおかげで、筆者はめげずに最後までやり遂げることができました。

最後に、日本での留學生活の間、両親のように温かく見守ってくださった鷺見武彦・澄子御夫婦に特別の感謝を申し上げます。そして、辛い時、いつも精神的に励ましてくれた中国にいる家族に、言い尽くせない感謝の意を込めて、この論文を捧げます。

高 揚

2020年5月28日 筑波大学キャンパスにて